

北陸自動車道関連遺跡  
発掘調査報告書  
III

1976

滋賀県教育委員会

団体 法人 滋賀県文化財保護協会

北陸自動車道関連遺跡  
発掘調査報告書

III

滋賀県教育委員会  
財団法人滋賀県文化財保護協会

210.2-  
11  
61

## 序

滋賀県教育委員会では、北陸自動車道の建設に先き立って、遺跡の発掘調査を昭和48年度より実施している。今までその結果の一部については、すでに報告したところがありますが、このたび、昭和50年度に実施した黄牛塚古墳、中山古墳、上ノ山古墳群の発掘調査の結果を報告するはこびになりました。

遺跡の保存と開発との関係が大きな社会問題となっていながら、これの決定的な解決策を見いだすことのできない現在、各人の文化財に対する正しい認識が、将来必ずやこの問題を解決するものならば、これら遺跡の調査報告書がここに上梓されたことで、その認識の一助となれば幸いに思います。

最後に、発掘調査および整理業務等に日夜努力いただいた調査員の方々ならびに地元関係者に深謝いたします。

昭和51年3月

滋賀県教育委員会

教育長 柳原太郎

## 緒 言

北陸自動車道関係遺跡の発掘調査としては、今年度は第3年次に当る。今年度においては、近江町顕ヶ所在の仏光寺遺跡及び黄牛塚古墳、長浜市小一条町中山古墳及び国友遺跡、余呉町坂口上ノ山古墳群の5遺跡の調査を実施した。これらのうち、仏光寺遺跡については、用地買収の状勢に応じ、一部の発掘を実施したにとどまり、残部については翌年度に再調査することとなった。また、中山古墳は、関連工事である土取り場から不時発見されたもので、緊急に調査を実施したものである。国友遺跡は現地の発掘調査が冬期に及ぶため、その整理、報告書の刊行については、翌年度実施することにした。

本報告書に所載した遺跡は、従って、黄牛塚・中山古墳と上ノ山古墳群で、いずれも古墳時代後期の横穴式石室を持つものであつた。黄牛塚・中山両古墳においては、玉類及び須恵器類の副葬品が検出され、さらに、須恵器において、ミニチュア様の小型品を納めるという類似した様相を呈しており、距離的にも近接しているところから、後期古墳の地域性を考える上に興味ある成果であった。また上ノ山古墳群では、1号墳から馬具の出土があり、装身具のみ出土する中山・黄牛塚両古墳とは異り、被葬者の性格を知る上に新たな資料を提示した。

これら諸遺跡は、その保存と工事との調整が困難であって、いずれも、道路下に埋没するか、消滅するものであり、現状保存できなかったことは残念である。

なお、発掘調査及び整理作業には、京都産業大学考古学クラブの多数の学生の協力を得た他、京都教育大学OB米田和正氏、地元の方々には多大なご協力、ご助力を得ることができた。また、日本道路公団金沢建設局の森内豊造氏、益田正邦氏、鈴木勝氏、広野満信氏、および、同局長浜工事事務所の串田義市氏および益田植三氏には種々にわたりお世話になった。明記して謝意を表します。

# 目 次

## 序 緒 言

第1章 黄牛塚古墳	1
1. 位置と環境	1
2. 調査経過	4
3. 古墳の構造	5
4. 遺物	10
5. 考察	20
第2章 中山古墳	22
1. 位置と環境	22
2. 調査経過	22
3. 遺構	24
4. 遺物	25
5. 小結	37
第3章 上ノ山古墳群	38
はじめに	38
1. 位置	38
2. 歴史的環境	38
3. 上ノ山古墳群	39
4. 上ノ山1号墳	42
5. 上ノ山2号墳	50
おわりに	53
第4章 大東遺跡	59
1. 方形周溝墓	59
2. 遺物	61

3. 小 結 .....	65
付 章 横山古墳群の意味するもの .....	67

## 挿図目次

図1 黄牛塚・中山古墳位置図	2
図2 黄牛塚古墳附近地形図	3
図3 黄牛塚古墳地形測量図	4
図4 黄牛塚古墳墳丘測量図（発掘後）	5
図5 黄牛塚古墳墳丘断面実測図	6・7
図6 黄牛塚古墳石室実測図	9
図7 黄牛塚古墳出土遺物出土状態	10
図8 黄牛塚古墳出土遺物実測図(1)	18
図9 黄牛塚古墳出土遺物実測図(2)	19
図10 中山古墳附近地形図	20
図11 中山古墳地形測量図	23
図12 中山古墳石室実測図	24
図13 中山古墳出土遺物実測図(1)	35
図14 中山古墳出土遺物実測図(2)	36
図15 上ノ山古墳群位置図	40
図16 上ノ山古墳群地形測量図	42
図17 上ノ山古墳群1号・2号墳地形測量図	43
図18 上ノ山1号墳墳丘断面実測図	44・45
図19 上ノ山1号墳石室実測図	47
図20 上ノ山1号・2号墳出土遺物実測図	49
図21 上ノ山2号墳墳丘断面実測図	50
図22 上ノ山2号墳石室実測図	52
図23 湖北地方主要古墳出土須恵器杯身編年表	54
図24 上ノ山古墳群周辺遺跡出土遺物実測図（平野市介氏蔵）	55
図25 大東遺跡方形周溝墓実測図	60
図26 大東遺跡1号方形周溝墓出土遺物実測図	61
図27 大東遺跡2号方形周溝墓出土遺物実測図	62
図28 大東遺跡出土遺物実測図(1)	63
図29 大東遺跡出土遺物実測図(2)	65

## 図版目次

図版一 黄牛塚古墳(遺構)	(上) 古墳全景(発掘前、東より)	(下) 古墳全景(発掘後、西より)
二 黄牛塚古墳(遺構)	(上) 石室全景(東より)	(下) 石室全景(西より)
三 黄牛塚古墳(遺構)	(上) 石室全景(東より)	(下) 閉塞石遺存状態(東より)
四 黄牛塚古墳(遺構)	(上) 玄室奥壁	(下) 玄室東南コーナー
五 黄牛塚古墳(遺構)	(上) 玄室北東コーナー	(下) 游道入口南側列石
六 黄牛塚古墳(遺物)	(上) 玄室内遺物出土状態	(下) 玄室内遺物出土状態(東より)
七 黄牛塚古墳(遺物)	(上) 玄室内遺物出土状態	(下) 玄室内遺物出土状態
八 黄牛塚古墳(遺物)	(上) 玄室内遺物出土状態	(下) 玄室内遺物出土状態
九 黄牛塚古墳(遺物)		
十 黄牛塚古墳(遺物)		
十一 中山古墳(遺構)	(上) 古墳全景(発掘前、東より)	(下) 古墳全景(発掘後、東より)
十二 中山古墳(遺構)	(上) 石室全景(東より)	(下) 石室全景(南より)
十三 中山古墳(遺構)	(上) 石室側壁(1)	(下) 石室側壁(2)
十四 中山古墳(遺構)	(上) 石室側壁(3)	(下) 石室側壁(4)
十五 中山古墳(遺物)	(上) 遺物出土状態(杯身・蓋・鉄環)	(下) 遺物出土状態(杯)
十六 中山古墳(遺物)	(上) 遺物出土状態(杯)	(下) 遺物出土状態(杯・壺)
十七 中山古墳(遺物)	(上) 遺物出土状態(玉類)	(下) 遺物出土状態(金環)
十八 中山古墳(遺物)	須恵器杯身・蓋	
十九 中山古墳(遺物)	須恵器高杯・壺・甌・提瓶	
二十 中山古墳(遺物)	(上) 玉類	(下) 金環・鉄環・玉・紡錘車・石鏡
二十一 上ノ山古墳群(遺構)	(上) 古墳群遠景(北より)	(下) 1号・2号墳全景(東より)
二十二 上ノ山古墳群(遺構)	(上) 1号墳全景(南より)	(下) 1号墳全景(東より)
二十三 上ノ山古墳群(遺構)	(上) 1号墳(発掘後、南より)	(下) 1号墳石室全景(南より)
二十四 上ノ山古墳群(遺構)	(上) 1号墳石室全景(南西より)	(下) 1号墳石室全景(南東より)
二十五 上ノ山古墳群(遺構)	(上) 1号墳石室近景(南より)	(下) 1号墳石室近景(北より)
二十六 上ノ山古墳群(遺構)	(上) 1号墳玄室(東より)	(下) 1号墳玄室(西より)
二十七 上ノ山古墳群(遺構)	(上) 1号墳玄室(南より)	(下) 1号墳羨道(北より)
二十八 上ノ山古墳群(遺構)	(上) 1号墳羨道(東より)	(下) 1号墳羨道(北より)
二十九 上ノ山古墳群(遺構)	(上) 1号墳玄室奥壁	(下) 1号墳玄室奥壁近景
三十 上ノ山古墳群(遺構)	(上) 1号墳玄室北西コーナー	(下) 1号墳玄室北東コーナー
三十一 上ノ山古墳群(遺構)	(上) 1号墳玄室東壁北半部	(下) 1号墳玄室東壁南半部
三十二 上ノ山古墳群(遺構)	(上) 1号墳玄室西壁北半部	(下) 1号墳玄室西壁南半部
三十三 上ノ山古墳群(遺構)	(上) 1号墳羨道東壁	(下) 1号墳羨道西壁
三十四 上ノ山古墳群(遺物)	(上) 1号墳遺物出土状態	(下) 1号墳遺物出土状態
三十五 上ノ山古墳群(遺構)	(上) 2号墳全景(発掘前、南より)	(下) 2号墳全景(発掘後、南より)

異 上ノ山古墳群（遺構）（上）2号墳石室全景（南より）  
（下）2号墳玄室石材抜取り状態  
(南より)

- 毛 上ノ山古墳群（遺物） 1号墳出土遺物  
元 上ノ山古墳群（遺物） 1号・2号墳出土遺物  
元 上ノ山古墳群 周辺遺跡出土遺物  
堅 大東遺跡（遺構）（上）1号・2号方形周溝墓  
（下）1号方形周溝墓（HS I）  
四 大東遺跡（遺構）（上）2号方形周溝墓（HS II）  
（下）T6柱穴内廳板出土状態  
堅 大東遺跡（遺物） 2号方形周溝墓出土遺物  
堅 大東遺跡（遺物） 1号方形周溝墓及びその他出土遺物  
四 大東遺跡（遺物） その他出土遺物

# 例　　言

- 1 本書は、昭和50年度において滋賀県が日本道路公団金沢建設局からの委託を受けて実施した北陸自動車道開通遺跡の発掘調査報告である。
- 2 この調査は、滋賀県が財団法人滋賀県文化財保護協会（理事長 和田純一）に再委託したものであり、これについては滋賀県教育委員会事務局文化財保護課技師田中勝弘が担当し、指導した。
- 3 調査および整理業務参加者は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

技師 田中勝弘

財団法人 滋賀県文化財保護協会

技師 鬼柳彰

主任調査員 別所健二

調査員 谷口義介

調査補助員 重村和・林純・鈴木弘市

神藏明子・上羽基之・川上真成

垣村俊大・藤村善嗣・阪口勝彦

木村昌義・朝野明美・飯野清士

原田雅裕・坂本清信・鈴木俊則

芳村高史・三宅憲明・岡井誠

曾根秀夫・南部基・北川利之

宮南称・藤原千晶

事務担当 井上剛・桑原栄子・鈴木英枝

越久栄美・北川修

- 4 本書報文は、田中勝弘、鬼柳彰、別所健二、谷口義介がそれぞれ分担して執筆し、文末にそれぞれ文責を明示した。

# 第1章 黄牛塚古墳

## 1. 位置と環境（図1・図2）

黄牛塚古墳は坂田郡近江町額戸に所在し、その地は長浜市・近江町にかけて広がる長浜平野の東限に南北に連なる横山山陵の南西部の一画に当たる。すなわち、横山山陵がその南端で分枝した三本の尾根のうち、中央に当たる尾根のその支脈たる小尾根の北側山麓に存在するのである。

しかし、当古墳を含めて周辺の古墳も、行政区画としての近江町に所在するように、同じ横山に存する各古墳とは、また別の古代の地域政治共同体内の遺跡なのである。このことは自然環境上からも顕著であって、当古墳や他の周辺各古墳の位置する尾根あるいはデルタはいずれも湖北平野の南端を西流する天野川に臨んでおり、これらの諸遺跡が天野川水系に生產基盤をおいていた人達の足跡であることを如実に示しているのである。

さて、当黄牛塚古墳は額戸集落の南はずれから東へ深く食い入る谷のほゝ最奥部の南側山腹に築造された独立墳であって、近在する式内社日撫神社の由緒記や額戸近辺の民間において、後鳥羽上皇奉納の黄牛にまつわる塚として、長い間伝承上知られていた古墳である。当古墳は谷傍に抱かれている立地条件から視界は悪く、北・東・南はすべて山がせまり、まったく周辺への展望はきかない。わずかに西方のみ開けていて、田園地帯が遠く臨まれるが、これとても南北の山にはさまれて、その視界は広くない。

当古墳の地盤は鬱蒼たる雜木林であるが、西及び北面の谷底には近世以来開墾された谷水田が見られる。

ところで、額戸集落や隣村高溝など、かつての日撫村は南の息長村と共に、『和名抄』において坂田郡朝妻郷もしくは阿那郷と呼ばれていた地域に当たり、この地域が古代の雄族息長氏の本貫地と考えられており、古代においても要衝地であったらしく、古墳や歴史的な建造物には事欠くことはない。

まず西方 500m の同一谷口北側山腹には、能登瀬に鎮座する山津照神社とともに、息長宿禰王を祭神とする式内社日撫神社が存在する。また、その日撫神社と谷をへだてた南側尾根上に帆立貝式古墳と径30m に及ぶ大円墳からなる後別当古墳群が額戸集落並びにその南の三角洲地帯を見下しているのである。さらに、黄牛塚古墳の西南方に当る旧息長村近辺には、この地域でもっとも古い横穴式石室を有す山津照神社古墳や塚の越古墳、新庄古墳群等の地域首領系譜に連なる古墳が見られるのに對し、黄牛塚古墳北方の律令制下、阿那郷と考えられる地域には、布勢古墳や一昨年発掘調査せられた諸頭山古墳群、或は今回緊急調査された中山古墳等の古代阿那郷を支えた集落の有力家系の古墳が点在しているのである。

ただ上記した近江町内の諸古墳を造営した古代人の住居址の調査研究はまったくなく、集落と墳墓の総合的研究を停滞たらしめていて、今後の調査研究の進展が待たれるが、ただ黄牛塚古墳の北西、額戸集落と高溝集落に弥生時代から古墳時代に及ぶ集落址が存在することが判明していることを付け加えておく。（別所健二）



- ①茶臼山遺跡 ②長屋敷一 ③オキサキ山一 ④垣籠一 ⑤西塚 ⑥祖の神 ⑦越前塚一 ⑧上篠塚 ⑨市勢  
 ⑩中山 ⑪諸塚山 ⑫三の宮塚 ⑬舟崎山 ⑭入塚山 ⑮黄手塚 ⑯後別当(仮称) ⑰新庄 ⑱塚の越  
 ⑲能登勢(仮称) ⑳山津原 ㉑磯崎 ㉒広畠陵附屬地 ㉓村脇田(丘見長広庭園) ㉔唐古塚一 ㉕鶴臘山一

図1 黄牛塚・中山古墳位置図

## （付 記）

黄牛塚古墳の名称は、黄牛（おぎゅう）塚という小字名から取っているが、この塚の由来について、地元にひとつの伝説が残されている。後鳥羽院が名越へ潜幸のみぎり、日撫神社に参拝して角力の見物をしたが、そのおり黄毛の牛を一頭奉納した。その牛が百余歳の長寿を保ったのち死んだので塚に祀り、ここから黄牛塚の名が起つた、というのである。このたびの発掘調査中、地元の古老が見学に来ると決って、牛の骨はまだ出ぬか、とたずねるのが常であった。この伝説は、日撫神社と密接な関係があるらしく、同神社所蔵の『日撫大明神語実録記』、『神事由来記』、『神宮寺最期状』などにも、均しく記されている。

ところで、『近江国坂田郡志』はこの伝説を疑い、黄牛塚の小字名は別に王丘塚とも書くので、黄牛はほんらい王丘が正しく、古の某王の墳墓が「王丘」の名として残ったのであり、後鳥羽院と黄牛塚の伝説は後の附会にすぎない、と断じている。たしかに古墳を称して王塚とか大入塚と名づける例は各地に多くみられる。しかし地元の人たちでみると「王丘」とは書かぬ由、また明治7年5月の『近江国坂田郡戸村地券取扱絵図』、同8年の『地券野収帳』、同22年の地籍図を調べても、明らかに黄牛塚と記して、王牛塚とはなっていない。坂田郡内には別に王塚なる塚もあり、それなどに基づいて『坂田郡志』は、黄牛塚を王丘塚に読みかえたのではなかろうか。しかし、黄牛塚に牛の骨は埋められておらず、7世紀前後の円墳であることは、今回の発掘調査の結果明らかになったので、結論としては『坂田郡志』の説は正しかったと認めなければならない。それゆえいわゆる黄牛塚伝説なるものは、後の附会ということになろう。

しかしながら問題は、そのような伝説がどのようにして起ってきたかということにある。黄牛塚伝説について民俗学的な観点から書くことが多いが、ここはその場ではない。たゞ次の柳田國男の言葉を掲げるにとどめる。

「古墳を重要なものと見て、之に注意を払う考古学者の一派に、古墳が築かれてから今日に至る迄の、民俗上の変化を無視した研究の仕方をして居るものがありはしないか。」——「民俗学上に於ける塚の価値」  
（『定本』第12巻所収）

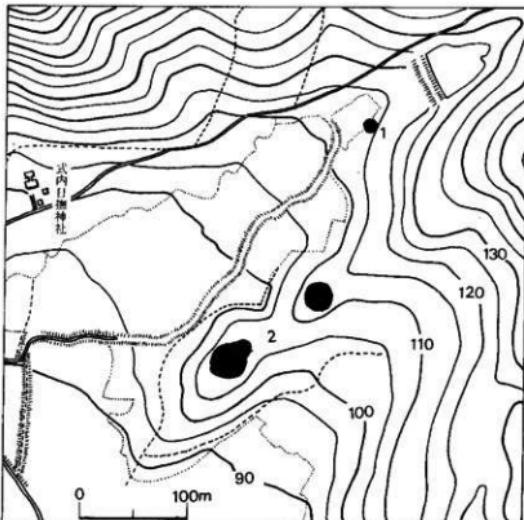


図2 黄牛塚古墳附近地形図（1. 黄牛塚古墳 2. 後別当古墳群）

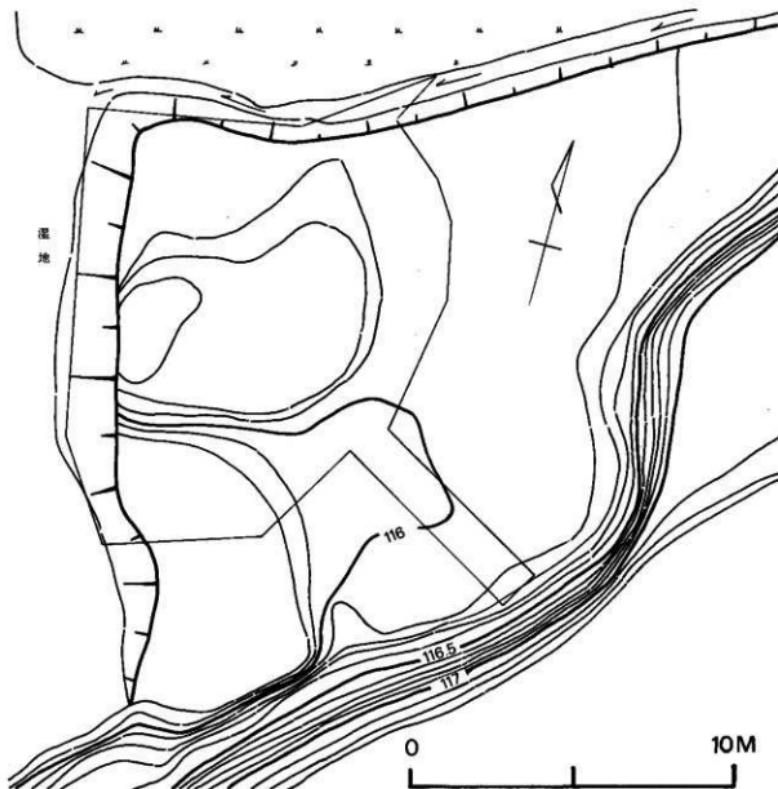


図3 黄牛塚古墳地形測量図

## 2. 調査経過

### 「発掘日誌」抄

7月2日。平板にて地形測量。マウンドはほとんど流失もしくは削平。南～東の昔のみ若干の盛り上りを残す。北・西は開田のさい切断されたという。

7月5日。マウンド中央に幅1.5mのトレンチ設定。南々西～西北西方向。西北側の半分、こぶし大の礫石20cmほど積る。

7月7日。トレンチ内、礫石を除去。その下は腐葉土。同層より須恵器片はじめて出土。

- 7月16日。トレンチ掘り下げ継続。大石出はじめて対向。石室の両側壁と推測。
- 7月17日。奥壁 1.3m、側壁 7m 余の長方形石室顕現。天井石なく、石室内に礫石多くつまる。
- 7月19日。石室内、礫石・埋土除去。左側壁にわずかに抽剥を認む。石室は玄室・羨道に分る。玄室内と右側壁附近に須恵器半瓶を発見。
- 7月21日。左袖部より环・蓋・高环・横瓶・疊など完形のまゝ、続々出土。玄室奥より勾玉（メノウ）1点。写真撮影、実測、レベル記入。
- 7月22日。玄室奥壁近く、勾玉（メノウ）さらに1点。土師器2個。棺台らしき角石も検出。羨道部に閉塞。
- 7月24日。玄室内、礫・土砂除去。床面は砂利・粘土層か。マウンド南・北側、裾部を顕出。
- 7月26日。左袖部の落石除去。その下より須恵器20点余出土。环・蓋・高环・疊・平瓶など。
- 7月28日。開口部の右側から背後へと、墳壠をさぐって掘り下げ。列石あり、マウンド円周に沿う。
- 8月2日。開口部左侧、墳壠をさぐる。外護列石検出。右側に同じ。
- 8月6日。羨道部の落石、チェーンブロックで搬出。閉塞の前後を掘り下げ。玄室寄りに平瓶、高环、開口部に高台つき環破片検出。写真撮影、平面実測、レベル記入など。
- 8月12日。封土の層序観察のため、トレンチ3方向に設定。玄室の左・右側壁、奥壁からそれぞれ外方に。
- 8月19日。トレンチ掘り、地山まで達して完了。
- 8月20～9月10日。写真撮影、立面図、見通し図、断面、平面実測図、平板測量など。
- 9月12日。黄牛塚周辺の古墳の分布調査。
- 9月13日。調査すべて完了。事務所に撤収。

(谷口義介)

### 3. 古 墓 の 構 造

#### 1) 墓 丘 (図 3～5)

当古墳は既述のとおり、山裾に立地するため、古墳築成の第一段階として、石室構架以前に基盤整備を行っている。すなわち、まず東西10m、南北11.2m以上、深さ1.4mにわたって鏡形に原地形をカットし、そのうえに石室幅だけ更に30cmほど掘下げることによって、平坦な地盤を整備したのである。この削平は当然、北側斜面山裾という自然条件に規制せられて、南から北の方向へ掘込まれたものと判断しうる。

なお、発掘以前の地形測量図でも明らかなごとく、当古墳の東部と南部に墳丘の円周に沿った平坦面が見られ、一見したところ周濠とも思われたので、南北トレンチを延長して調査したが、表土直下に地山が平坦に横たわっており、周濠等の掘込みとは見られなかった。いま、その性格が把握しがたく一見したところ、墳丘円周に沿って

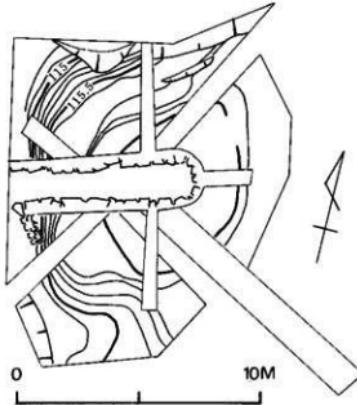


図4 黄牛塚古墳墳丘測量図(発掘後)

おり、古墳築造時の土取り等の痕跡とも考えられるが、当古墳周辺には、後代の開墾・山林整地による人工地形が随所で見られ、前掲の円形平坦地も、これによるものとも予想される。

次に墳丘封土についてであるが、掲載した地形測量図でも明らかなように、調査以前には扇形の僅かな盛りあがりだけが見られたので、これを古墳の墳丘封土と推定しても、南東部4分の1区画にすぎず、主体部とともに他の三区画分に相当する北東・北西・南西部の盛土は破壊削平されて、まったく遺存していないものと予想していた。また唯一の残された南東部に当たる盛土も、盛土上の集石状況から、その遺存度はきわめて悪く、ほとんど基底部に当たるものしか残っていないと推測していた。

しかし、結果は主体部の遺存とともに、盛土積上げ過程を推測しうる良好なマウンドが残されていたのであった。

次に墳丘の三方に穿った各トレンチの断面から、封土の築成過程を検討してみると、石室の構築と封土の積上げは、別々に進められたものではなくて、非常に密接な関連の下に、平行して行なわれた模様である。

既述のとおりの基盤構築の後、まず奥壁で2石、側壁で3石を積みあげ、地山掘下げ部と石材との空隙を、茶褐色粘土または黄褐色粘土一層で充填している。しかし、北側墳丘では地山掘下げが浅いため、これに先行して、赤褐色粘土層を地山上に盛土しており、黄褐色粘土はこの後、石材と赤褐色粘土の盛土によって生じた60cm余の凹所を埋めているのである。ここまでが、墳丘築成の第一段階で、いずれの盛土も水平に積まれており、石材後方の固めとそれの準備以外の何ものでもなく、墳形を呈しない。

以後の盛土は三方とも僅かづつ異っている。左側壁側では石材の背後裏込めに際して、壁となる地山がないため、後方に盛土しては、凹部を造成し、その後黄褐色粘土をつきかためて、石材の裏込めを行う、この基本的な盛土法を小さぎみに交互に繰返し、少しづつ墳丘を盛上げ、最後に褐色粘土で天井石を覆い墳形を整えたものと考えられる。

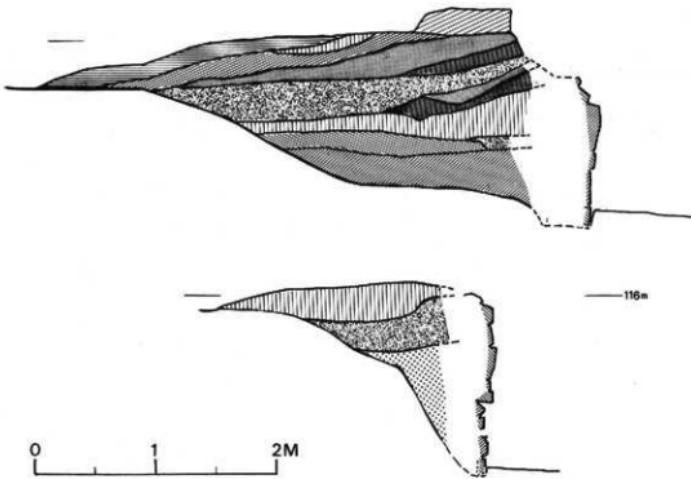


図5 黄牛塚古墳墳丘断面実測図

これに比べて、右側壁では最下層の上に灰黒色粘土を積み、これと石材との間を黒褐色粘土を充填するだけで、これより上層では裏込めに相当するものではなく、以後石材と掘込み肩部までの空隙を石室方向へ高く盛上げでは、墳形を序々に形づくり、最後に褐色粘土で天井石を覆い、墳形を整えている。

また奥壁側では、奥壁石材を掘込みいっぱいに積上げているため、その墳丘築成は非常に簡単で、第一段階の盛土の他には、黒褐色粘土層と褐色粘土層しか見られない。黒褐色粘土層は掘込み肩部と石材との間の空隙の充填土であり、褐色粘土は天井石を覆う最後の封土と考えられる。

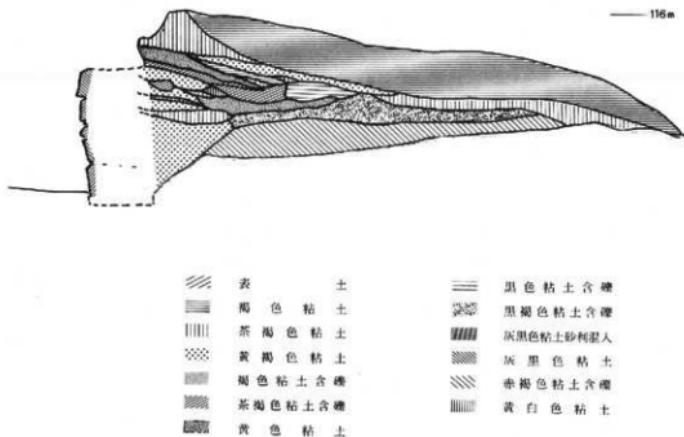
以上の遺存していた盛土はいうまでもなく、相当な削平を受け、旧状をとどめないが、残存する盛土の傾斜角・推定石室の高さ等から、石室基底石より2mは存したものと推定される。また、残存する墳丘径は約11mを計るが、元来これに近い規模を有したものと思考される。

## 2) 石 室 (図6)

内部主体は横穴石室ではあったが、後代の盗掘か石材抜き取りのため、天井石及び側壁の上部は遺存していないものの、ほど旧状を知りうると判断された。

石室はほど西方向に開口しており、主軸はおよそW17°S-E17°Nを計る。石室の平面形態は、一応左片袖と解釈したが、右側壁の袖石に該当する石材は、左の袖石同様縦位にすえられており、その後の石材の置き方とは明瞭な相違が見られることは注目すべきである。すなわち、この立石を境界に、石室は東側を玄室、西側を羨道にと判然とわかたれていたものと推察される。

まず、玄室は奥壁に接する部分で1.34m、中央部で1.5m、入口部で1.4mの幅を計測し、一方玄室長4.21m



を計測した。や、中ぶくらみのいわゆる長方形プランの石室であった。また左袖部は二石によって構成されていて、幅24cmを測った。

玄室の高さは、天井石並びに側壁上段の石材の欠損から明らかにできない。しかし現状では奥壁部が3段で1.5m、右側壁部では4段1.3m、左側壁部は5段で1.1m残存しており、奥壁がほぼ旧規を残すものと考えられるので、旧規の玄室高は1.5m余はあったと思われるが、後でのべるよう、石室床面は基底面より約10cm高く、したがって玄室復原高は約1.4mであったと推測できる。

羨道部は、墳丘西側が開墾に伴う削平を受けていたため、旧規模を留めていないとも考えられたが、右側壁最西端から墳丘南側に連続する外護列石が存在したので、羨道の長さは3.3mを計測した。これに対して、その幅は、玄室との境界点で1.15m、入口部で1.3mを有し、やや閉口部に向って広がるものであった。

石室の築造は、奥壁、両側壁の基底石設置幅だけ床面より、さらに約10cmをほど均一に掘下げたあと、奥壁、両側壁の最奥部石材、袖石等の最下段がまず置かれ、以後両側壁の間隙部の石材が順次設置されたものと解される。

石積法を推測すれば、一段目（基底石）は奥壁、左側壁最奥部の石材、左袖石及び右側壁の袖部該当石材ほか2石が縦位に置かれており、左側壁の奥壁コーナーの石材は横積ではあるが巨石を使用している。その他の最下段の石材及び上段の石材は原則的に横積みであり、中に小口積も見られる。また、右側壁に比較して、左側壁は全体的に小ぶりで、残存石が5段につまっている個所もある。さらに、玄室の石材に対して羨道の石材の方が大きいことが判然としている。

持送りは、二段目まではほど垂直に積上げているが、三段目から巨石を積上げており、わずかに持ち送られた模様であるが、両側壁とも、そのせり出し幅は20cmにも満たなかったものと思われ、ほとんど直立した側壁を構成していたと考えられる。なお、これらの石室構築に使用された石材は、横山丘陵の地盤であるチャートの割石であった。

石室内部の敷設として、棺台、土壇、閉塞石等が見られ、きわめて注目される。棺台と思われる石列は奥壁前面と玄室中央部の2個所に、石室幅いっぱいに組まれていた。両石列の右側壁の石材は側壁内に食い込んでおり、両石列が側壁構築以前に並べられたことを推測させる。両石列間の長さは、右側壁で1.7m、左側壁で1.4mであり、高さは10~20cmを測るが、奥壁前面の方が床面と平行して棺台もわずかに高くなっている。

奥壁から第一石列までの間、幅40~60cmの床面は玄室部に比して、最も10cm前後高く、土壇を築いたものと思われるが、状況からして基盤築成時にあらかじめ予定して掘られたものであろう。事実、土壇は南側から北側へゆるやかに傾斜している。

以上の二つの内部敷設は特異なもので、石室内部の空間区分を明瞭に意識した、本古墳築造時の当初から細密な設計の下に設けられたものであり、被葬者の進体安置と儀礼に係わる重要な付設物である。

一方、羨道入口よりや、玄室よりに積まれた閉塞石は非常に粗雑なものであり、約20cm角の塊石を高さ80cm程に荒く積んでいる。しかし、閉塞石最下段の石は玄室床面よりも35cm高く、床面より浮上しており、一見して当初からの敷設物でないことが判明した。また閉塞石下には木炭層と灰褐色粘土層が確認されたが、木炭層は幅105cm、厚さ6~10cmにわたって、堅く敷きつめられていて、閉塞石付設に伴ったものと判断される。つまり、この閉塞石は床面に散乱していた石材が落込み、灰褐色粘土層が堆積したのち設けられた、後代の敷設物であることが推定され、その時期は、羨道部入口部の浮土中より出土した高台付きの环身から7世紀末~8世紀初頭が一応考えられる。

なお、墳丘上の敷設として外護列石が存した。右側壁西端の二石の裏から墳丘南側へまわっているもので、七

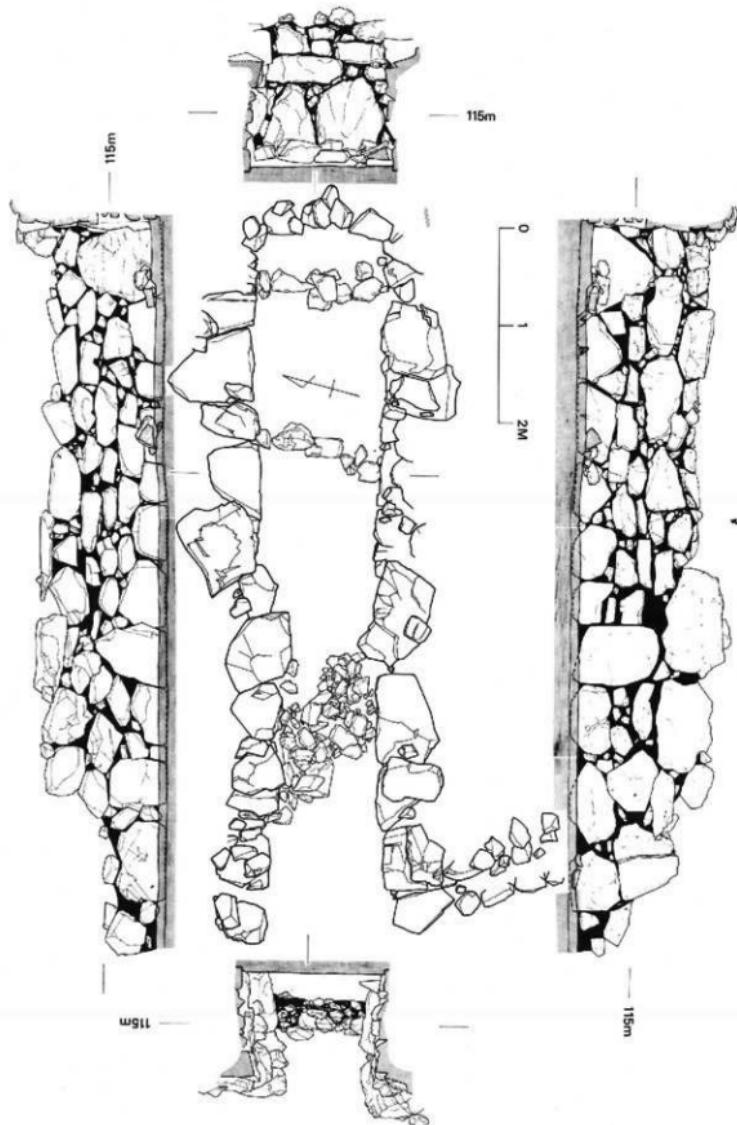


图 6 黄牛塚古墳石室実測図

下二段に組まれている。が、墳丘裾を区画してめぐっていたというよりも、墳丘斜面に組まれており、南側へまわるにしたがって、より高所へ置かれている。

#### 4) 遺物の出土状況 (図7)

当古墳に伴うものと判断せられる遺物は須恵器43点、土師器2点、勾玉2点、鉄製品等があげられるが、狭道より出土した環身一点の他は、すべて玄室及び玄室入口附近より出土した。

出土遺物のうち、埋葬時の原位置をとどめていると考えられるものは、土壇上より検出された土師器二点がまずあげられる。二点とも口を上に向けて置かれており、被葬者に供献された祭器的性格が濃く感ぜられるものである。



図7 黄牛塚古墳出土状況

次に、棺台第2石列南に右側壁に沿って置かれた環身、膝、平瓶が指摘できる。いずれも追葬時の被葬者に伴うものであると考えられる。

左側壁沿いには横瓶、杯他多量の須恵器が重なりあって出土を見たが、それらは新旧二期にわたる遺物であり、追葬時にかき集められた遺物群とも推測される。

また、玄室前半部中央付近より狭道にかけて、主軸に平行して検出された環他5点の遺物がある。これらはいずれもミニチュア風の小型品で一時期のものであり、あるいは最後の被葬者に伴うものとも考えられる。

なお、狭道入口の高台付きの杯身は、床面より上の浮土の中から出土したもので、既に述べたように閉塞敷設築造に伴った遺物と判断された。

(別所健二)

### 4. 遺物 (図8・図9)

#### I) 須恵器・土師器

黄牛塚古墳からは、須恵器42個、土師器2個、総計44個の出土をみた。土器の形態上の特徴、技法上の特徴およびその他の留意点については、後掲の説明表に詳しく記しておいたので、参照されたい。以下には全体的な特徴と推移を述べ、あわせて実年代の推定を試みておきたい。

环 环の身 [A] は計11個出土したが、大別して3類に分けられる。

(1) 矮小化した立ち上りと受部をもち、立ち上りの内傾度が著しい。底部は丸味をおびる。口径は平均11.0cmを測って、小型。9個。

(2) 立ち上りが消滅し、口縁部は長くほど直立する。口径10.6cmと小型だが、器高は4.7cmを測って、底部が深い。[A-10] の1個のみ。

(3) 口径15.7cmと大型で、高台が体部の直下に、わずかに外方に張ってつく。体部はつよく外反しつつ立ち上る。

形態からいって8世紀代のものとみられ、(i)(j)とは100余年の時間的な距たりがある。狭道開口部よりたゞ1個出土した点からも、(i)(j)とは異って副葬品とは考えられず、例外的に扱う必要がある。〔A-11〕。

#### 蓋 环の蓋〔A'〕も11個出土し、2類に大別できる。

(A)天井部は丸く、口縁部は外下方に聞く。3点出土したうちの1個〔A'-1〕が〔A-5〕と一对をなすので、蓋〔A〕は環〔i〕と対応する。

(B)天井頂部に中央のくぼむつまみをもち、口縁部近くの内面にかえりをもつ。すなわちつまみをとれば、環〔i〕を倒さにした形になる。8点出土したが、その中の〔A'-4〕が〔A-10〕と一对をなす。つまり蓋〔A〕は環〔i〕と対応する。〔A'-4~11〕の計8個。

环の小型化の傾向は6世紀末に特に著しく、蓋がつまみやかえりをもちはじめるのは、7世紀前半のことである。したがって环〔i〕・蓋〔A〕の段階は6世紀末に、环〔i〕・蓋〔b〕の段階は7世紀前半に位置づけられよう。たゞ天井頂部のつまみは、陶邑窯などでは擬宝珠形が初現であるのに対し、蓋〔b〕のものは逆に中央のくぼんだ形を示している。7世紀前葉に比定される湖東の孤栗A2号墳においても、つまみ中央のくぼんだ小型蓋が1点みられる。特殊なタイプとして注目しておきたい。

高环 高环〔B〕は大、小あわせて8個出土している。有蓋長脚二段透しのもの2個〔B-2・3〕、それよりやや小型の無蓋長脚二段透しのもの1個〔B-1〕、ミニサイズの二段透し高环〔B-4・5〕と一段透しのもの〔B-6・7・8〕である。有蓋長脚の高环には長方形の二段透しを3方にあけるもの〔B-2〕と、2方にあけるもの〔B-3〕があるが、共に6世紀中頃の長脚二段透しの後をうける形とみてよい。無蓋長脚二段透しの高环も、6世紀末の段階に比定しておきたい。ミニサイズの高环は、口径9~10cm、器高4cm平均を測る。二段透しのものは、环体部の中ほどにつまみ出し突帯を付し、一段透しのものには同所に平行凹線がめぐるが、环部の形自体は环〔A-10〕と同一である。つまり小型の高环は、环〔A-10〕に脚をとり付けた形であって、5点とも环〔i〕の段階（7世紀前半）に位置づけられよう。

蝶 蝶〔C〕は5点の出土をみたが、これも大・小の2類に大別しうる。口径12cm、器高15cm平均を測る大型の蝶〔C-1・2〕は、口頭部の発達に特徴があり、形態からみて6世紀末の段階に属すことができる。〔C-3・4・5〕は、口径9.5cm、器高11cm平均と小型であるが、形態としては〔C-1・2〕と変りはない。

直口壺 直口壺〔D-1〕はたゞ1個出土した。体部はほゞ球形で、口頭部は長く、外上方に直線的にのびる。この器形のものは、陶邑窯では6世紀中頃以降急速に減少するといわれるが、当古墳のばあい6世紀末までの存続は認めてよいであろう。

台付直口壺 台付直口壺〔E〕は、大・小2点の出土をみた。〔E-1〕は器高21cm、梢円気味の体部に、先端に至って内彌する長い口頭部と、長方形透しを3方にあける台脚部がつく。〔E-2〕は器高12cmを測って小型、肩部に刻目文帯を付し、脚柱部に小円孔を穿っている。形態からみて〔E-1〕を6世紀末に、〔E-2〕はそれに後続する段階に比定できよう。

平瓶 平瓶〔F〕は3点出土したが、これも大・小の2類に分けられる。〔F-1〕は体部最大径18.4cm、〔F-2〕は同じく14.8cmを測り、ともに背に環状の把手を付ける。これに対して〔F-3〕は体部最大径が11.9cmと小型で、口頭をめぐって円型の粘土粒を5個貼付する。平瓶は陶邑窯では6世紀末に初現するとされるが、〔F-1・2〕を6世紀末に、〔F-3〕を7世紀前半に位置づけたい。なお近傍の諸頭山2号墳から出土した平瓶（8-9）は、背に1個のボタン状突起をつけ、両者の間に入るとみてよい。

横瓶 横瓶〔G-1〕はたゞ1点の出土をみた。正面からみると体部は均齊な梢円形で、細長く次第に外反す

る口頭部を付ける。陶邑窯では、この器形は6世紀末以降減少するといわれる。やはり〔G-1〕も6世紀末のものとみなされよう。

## II) 土 爾 器

壺〔H-1〕と瓶〔I-1〕の2点出土している。壺は、球形の体部に、短く外反する口縁部がつく。瓶は、丸い底部から体部が垂直にのび、口縁部はわずかに外反して、丸い先端に至る。ともに玄室奥壁前より、定置した状態のまま出土している。供獻したものと思われる。

以上、壺(身・蓋)の推移、器形の消長をもとにして考えると、当古墳の須恵器は2群に大別でき、その2群はそれぞれ6世紀末と7世紀前半の2期に比定しうると思われる。したがって黄牛塚古墳は2次にわたって埋葬されたことになろう。また、閉口部から出土した尚台付の瓶は8世紀代のものとみられ、第2次埋葬が終って後100年ほど経て最終的に閉塞したさい、残されたものと思われる。

なお、当古墳出土の須恵器について特に注目されるべきは、全般的な小型化の傾向であって、それは壺、蓋のみでなく、高壺、瓶、台付直口壺、平瓶などの器種にも及んでいる。同様な傾向は、後述する当古墳近傍の中山古墳出土の須恵器にも認められ、同じく7世紀前半代に比定される。大津市坂本穴太町の銅込古墳出土のミニチュア炊飯具などとは無関係と思われるが、上記両古墳にみられる小型須恵器について、博雅の士のご教示を賜われば幸甚である。

## III) 勾玉・鉄製品

勾玉 勾玉は2個、玄室奥壁附近より出土した。石材は瑪瑙で、飴色を呈し、穀の磨消しは十分でない。

鉄製品 鉗および刀子と思われる鉄製品が各1点ずつ出土した。ともに破片で、腐蝕も甚だしく、詳細は明らかでない。

(谷口義介)

## 参考文献

田辺昭三「陶邑古窯址群」Ⅰ。

滋賀県教育委員会「甲賀郡甲西町狐栗古墳群調査概要」(1968.3)。

田中勝弘「諸頭山古墳群の発掘調査」(「北陸自動車道開通実績調査報告書」Ⅰ)。

**黄牛塚古墳出土須恵器説明表** (付、土師器)

団体No.	器形	土器No.	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴
8	环身	A-1	<ul style="list-style-type: none"> <li>■口径 9.0cmと特に小型。</li> <li>■立ち上りは、初めてよく内傾し、口端部に近く外方にそれ、先端は弧く收める。</li> <li>■受部はやや長く、水平に外にのび、先端は丸い。</li> <li>■体、底部は丸味をわびる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■底部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■胎土は良好。</li> <li>■焼成はなま焼け。</li> <li>■色調は灰白色。</li> <li>■底面部、本灰層より出土。</li> </ul>
8	环身	A-2	<ul style="list-style-type: none"> <li>■立ち上りはつよく内傾し、高さ 0.5cm、先端は鋭い。</li> <li>■受部はほぼ水平に外にのび、先端は丸い。</li> <li>■口径は、10.9cm。</li> <li>■受部先端と体部の境はつよく内屈して、凹縫がめぐらしがなす。</li> <li>■体、底部は丸く收める。</li> <li>■底部内面中央のふくらみは気泡か。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■底部はヘラ削り調整。方向は時計逆まわり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■胎土は石粒を多く混入。</li> <li>■焼成は堅焼。重ね焼きのいの破片が、体部に付着。</li> <li>■色調は内部は灰青色、外表は自然釉で緑青色。</li> <li>■玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
8	环身	A-3	<ul style="list-style-type: none"> <li>■立ち上りは矮小化し、高さ 0.7cmを測る。</li> <li>■口径は、11.4cm。</li> <li>■受部はやや外方にのび、受部、口縫の先端は共に丸い。</li> <li>■体、底部は丸く收める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■底部のヘラ切りは粗く、底部内面中央には仕上げナデを施さない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■胎土は、わずかに石粒混入。</li> <li>■焼成は良好。</li> <li>■色調は淡い灰青色。</li> <li>■玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
8	环身	A-4	<ul style="list-style-type: none"> <li>■立ち上りは内傾度が著しく、高さは 7.0cm、先端はやや弧く收める。</li> <li>■受部は、ほぼ水平に外にのびる。</li> <li>■口径は、11.3cm。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■内面の横ナゲは「掌」。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■胎土は、わずかに石粒混入。</li> <li>■焼成は良好。</li> <li>■色調は淡い灰青色。</li> <li>■玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
8	环身	A-5	<ul style="list-style-type: none"> <li>■立ち上りは、やや反り気味に内傾し、高さ 0.7cmを測る。</li> <li>■口径は11.2cm。</li> <li>■受部はほぼ水平に外方にのび、先端は鋭い。</li> <li>■受部先端と体部の境はわずかに内屈し、体部は丸味をわびる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■体部・口縫部、および内面は横ナゲ調整。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■胎土は良好。</li> <li>■焼成は堅焼。</li> <li>■色調は灰青色。</li> <li>■玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
8	环身	A-6	<ul style="list-style-type: none"> <li>■立ち上りは、内傾度が著しく、高さは 0.6cmを測る。</li> <li>■受部は焼く、外上方にのび、先端は丸く收める。</li> <li>■口径10.2cm。</li> <li>■体部はやや丸味をわび、底部は扁平をなす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■底部はヘラ削りせず、中央部のヘラ切りは粗い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■胎土は精良。</li> <li>■焼成は良好。</li> <li>■色調は灰青色。</li> <li>■玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
8	环身	A-7	<ul style="list-style-type: none"> <li>■立ち上りは、初めてよく内傾し、中ほどから外上方にそれ。</li> <li>■先端は鋭い。</li> <li>■受部は、立ち上りとの境に浅いV字溝をめぐらし、やや外方にのびる。</li> <li>■受部先端から体部にかけてつよく内屈し、体、底部は丸く收める。</li> <li>■口径11.1cm。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■底部内面中央に仕上げナデ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■胎土に石粒混入。</li> <li>■焼成は堅焼。重ね焼きのいの破片が底部と口縫部に付着。</li> <li>■色調は内部は淡い灰青色、外表の体・底部に淡緑色の自然釉。</li> <li>■玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
8	环身	A-8	<ul style="list-style-type: none"> <li>■口縫部・底部に著しい虫みを生ずる。</li> <li>■立ち上りは矮小化し、甚だ内傾、高さ 0.5cmを測る。</li> <li>■口径は、11.2cm。</li> <li>■先端は、口縫部・受部とも丸い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■内面底部に粘土紐のまき上げ痕をそのまま残し、未調査。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■胎土に石粒多く混入。</li> <li>■焼成は燒きひずみを生ず。</li> <li>■色調は暗い灰青色。</li> <li>■玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>

8	环 身	A-9	<ul style="list-style-type: none"> <li>*立ち上りは、はじめ内縫部が薄しく、*底部中央のヘラ切りは粗雑。</li> <li>中ほどから角度を上向きにかえる。</li> <li>*体部・口縫部および内面は横ナデ。</li> <li>*受部は質く、わずかに上方にのびる。</li> <li>*体・底部は丸味をおびる。</li> <li>*口径は、11.4cm。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は良。わずかに石粒混入。</li> <li>*焼成は堅緻。</li> <li>*色調は灰青色。</li> <li>*玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>	
8	环 身	A-10	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口径10.6cm、器高 4.7cmと底部はこどに深い。</li> <li>*口縫部は長く、やや外方に開きつつ立ちなり、先端は丸く收める。</li> <li>*底部はゆるやかに丸味をおびる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土はわずかに石粒混入。</li> <li>*焼成はなま焼け。</li> <li>*色調は灰白色。</li> <li>*玄室内、右側壁附近より出土。</li> <li>*〔A-4〕身とセット。</li> </ul>	
8	环 身	A-11	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口径15.7cm、器高 4.3cmと大型。</li> <li>*体部はよく外反しつら立ち上り、口縫部は丸く收める。</li> <li>*底部と体部の内面境界は丸く屈曲する。</li> <li>*高台は体部の底下に、わずかに外方に張り付く。</li> <li>*脚縫面は水平。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土はわざかに石粒混入。</li> <li>*焼成は良好。</li> <li>*色調は淡い灰青色。</li> <li>*周道開口部より出土。</li> </ul>	
8	环 身	K-1	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天井部はゆるやかに丸味をおび、口縫部をなしては縫部に至る。</li> <li>*口縫部はわずかに外方にひらき、先端は内向きの瘤面を有す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は精良。</li> <li>*焼成は良好。</li> <li>*色調は淡い灰青色。</li> <li>*玄室内、左袖部より出土。</li> <li>*〔A-5〕身とセットをなす。</li> </ul>	
8	环 身	K-2	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天井部は丸く、むしろ尖り気味。口縫部は外方に開いて、丸い端部に至る。</li> <li>*4分の1欠損。</li> <li>*端部はやや内凹。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は良。わずかに小石粒混入。</li> <li>*焼成は良好。</li> <li>*色調は灰青色。</li> <li>*玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>	
8	环 身	K-3	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天井部はゆるやかに丸く、口縫部は外方に開いて、丸い先端に至る。</li> <li>*天井部から口縫部にかけての後は、粘土錆びと上げのもの。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は良好。</li> <li>*焼成も良好。</li> <li>*色調は淡い灰青色。</li> <li>*玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>	
8	环 身	K-4	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天井部につまみをもち、つまみの中央部は深くぼみ、端部は上方にのびる。</li> <li>*天井部と口縫部の境は、つよく内屈する。</li> <li>*口縫部に近く内面につくかえりは、口縫部よりも下方に突出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天井部は粗くヘラ切りし、天井部にへき裂をなしては縫部に至る。</li> <li>*天井頂部は粗くヘラ切り。</li> <li>*内面中央に仕上げナデ。</li> <li>*天井部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は不良。細砂を含む。</li> <li>*焼成はなま焼け。</li> <li>*色調は灰白色。</li> <li>*玄室内、左袖部より出土。</li> <li>*〔A-10〕身とセット。</li> </ul>
8	环 身	K-5	<ul style="list-style-type: none"> <li>*つまみは中央のくぼみは深く、端部は外方に開く。</li> <li>*口縫部に近く内側にかえりをもつが、かえりは口縫部よりも下方に突出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天井部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。余は横ナデ。</li> <li>*内面中央に仕上げナデ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は良好。</li> <li>*焼成は堅緻。</li> <li>*色調は灰青色。</li> <li>*玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
8	环 身	K-6	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天井部のつまみは中央が浅くくぼみ、端部は外方に開く。</li> <li>*口縫部内側にかえりをもち、かえりは口縫部よりも下方に突出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天井部はヘラ削り調整、その上から同様を利用したカキ目を施す。</li> <li>*口縫部、および内面は丁寧に横ナデ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は良好。</li> <li>*焼成は堅緻。</li> <li>*色調は灰青色。</li> <li>*玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
8	环 身	K-7	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天井部につくつまみは、中央が浅くくぼみ、端部は外方に開く。</li> <li>*口縫部に近く内側にかえりをもち、かえりは口縫部よりも下方に突出する。</li> <li>*口縫部は焼けひずみのため歪む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天井部はヘラ削り、その上からカキ目を施す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は良好。</li> <li>*焼成は堅緻。</li> <li>*色調は淡い灰青色。</li> <li>*玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
8	环 身	K-8	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天井部のつまみは、中央が浅くくぼみ、端部は外方に開く。</li> <li>*口縫部内側のかえりは外反しつつ下方にのび、その先端は口縫部よりも下方にある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天井部はヘラ削り調整、その上からカキ目を施す。</li> <li>*口縫部、および内面は横ナデ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は良好。</li> <li>*焼成は堅緻。</li> <li>*色調は暗い灰青色。</li> <li>*玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>

8	环 茎 A'-9	<ul style="list-style-type: none"> <li>* つまみは中央部が浅くくぼみ、端部は外方に開く。</li> <li>* 天井部から口縫部にかけて、段をなす。</li> <li>* 口縫部内側のかえりはやや外反してのび、その先端の位置は口端部より甚だ下方にある。</li> <li>* つまみ中央のくぼみはやや深く、端部はわずかに外方に開く。</li> <li>* 口縫部に近く内側にかえりをもち、かえりは口縫部より上方に突出する。</li> <li>* かえりの先端は鋭いが、口縫部は丸く取める。</li> <li>* 天井部に付くつまみは中央が浅くくぼみ、端部は外方に開く。</li> <li>* 口縫部に近く内側にかえりをもつが、かえりは口縫部より下方に突出する。</li> <li>* かえりの先端は鋭く、口縫部は丸く取める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 天井部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。その上からカキ目を施す。</li> <li>* その上からカキ目を施して、他の部分の横ナデとも丁寧な仕上げ。</li> <li>* 天井部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。</li> <li>* その上からカキ目を施して、他の部分の横ナデとも丁寧な仕上げ。</li> <li>* 天井部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。</li> <li>* その上から回転を利用したカキ目。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 脱土は良好。</li> <li>* 焼成は堅緻。</li> <li>* 色調は灰青色。</li> <li>* 玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
8	环 茎 A'-10			
8	环 茎 A'-11			
8	高环 (無茎) B - 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 口径11.5cm、器高12.6cm、脚部に比して环部の発達は著しい。</li> <li>* 环部は、体部に二段の高い継がつき、外反しつつ口縫部を至り、先端は丸く取める。环の底部は扁平。</li> <li>* 脚柱部に長方形二段造しが2方にあく。</li> <li>* 脚部の開きは少なく、先端は下方にのみ突出する。</li> <li>* 口径11.8cm、器高16.5cmと大型。</li> <li>* 环部の立ち上がり内傾度が著しく、立ち上りと先端の境に深いV字溝があり、受部は外方にのびる。</li> <li>* 脚柱部はラップ状に外下方に開き、長方形二段造しが3方にあく。</li> <li>* 脚部と脚部の境に二段の継。</li> <li>* 脚部はつよく開き、環部は上・下方に突出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 脚柱部から脚部にかけてカキ目を施す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 脱土は、細砂を含む。</li> <li>* 焼成は堅緻。</li> <li>* 色調は灰黒色。</li> <li>* 玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
8	高环 (有茎) B - 2			
8	高环 (有茎) B - 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 口径11.9cm、器高16.1cmと大型。</li> <li>* 环部は、立ち上りは内傾、受部はほぼ水平にのびて、先端は共に丸い。</li> <li>* 脚柱部はラップ状に外下方に開き、長方形二段造しが2方にあく。</li> <li>* 脚部から器部にかけてつよく屈曲し、環部は下方のみやや突出して着地する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 环底部はヘラ削り。</li> <li>* 环内部は横ナデするが、わずかに叩き目を残す。</li> <li>* 脚部は丁寧に横ナデ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 脱土は良好。</li> <li>* 焼成は堅緻。</li> <li>* 色調は环の体、底部の外表が淡緑色、脚部は灰青色。</li> <li>* 玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
8	高环 (無茎) B - 4	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 口径 8.8cm、器高 9.4cm、环の深さ 3.5cm。</li> <li>* 环の体部中ほどにつまみ出し凸番を付す。</li> <li>* 脚柱部は短く、長方形二段造しが2方にあく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 环の体部と底部の境は、ヘラ削り調整。方向は時計逆まわり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 脱土は良好。</li> <li>* 焼成は堅緻。</li> <li>* 色調は灰青色。</li> <li>* 玄室内、腰道闇より出土。</li> </ul>
8	高环 (無茎) B - 5	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 口径 8.8cm、器高 9.5cm、环の深さ 3.2cm。</li> <li>* 体部中ほどに、つまみ出し凸番。</li> <li>* 脚柱部に長方形二段造しが2方にあく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 环底部はヘラ削り調整。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 脱土は良好。</li> <li>* 焼成は、脚部に焼けひずみ。</li> <li>* 色調は灰青色。</li> <li>* 玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>

8	高 环 (無蓋)	B-6	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口径 9.7cm、器高 9.5cm、环の深さ 3.9cm。</li> <li>*脚部に比して、环部が発達。</li> <li>*环部は、体部に 2 本の長い回線があぐり、直立して、外反気味の口縁に至る。</li> <li>*脚部は短く、長方形一段透しが 2 方方にあく。</li> <li>*脚根部はほぼ水平にのび、端部は垂直。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体部と底部の間はヘラ削り。</li> <li>*あとは丁寧に横ナギ。</li> </ul> <p>*胎土は精良。 *焼成は脚部が焼けひずみ。 *色調は灰黒色。 *玄室・底道間より出土。</p>
8	高 环 (無蓋)	B-7	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口径 9.6cm、器高 9.3cm、环の深さ 4.0cm。</li> <li>*脚部に比べて、环部が発達。</li> <li>*环の体部は直立、中ほどに凹線が 2 本ある。</li> <li>*脚柱部に、長方形一段透しが 2 方方にあく。</li> <li>*脚根部は水平に外にのび、端部は下方に突出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体部と底部の間はヘラ削り。</li> </ul> <p>*胎土は良好。 *焼成はなま焼け。 *色調は灰白色。 *玄室内、左袖部より出土。</p>
8	高 环 (無蓋)	B-8	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口径 9.6cm、器高 9.2cm、环の深さ 3.8cm。</li> <li>*环の体部は直立、中ほどに凹線 2 条が平行、口縁先端はやや外にそる。</li> <li>*脚柱部は短く、長方形一段透しが 2 方方にあく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体部と底部の間はヘラ削りし、その上からカキ目を施す。</li> <li>*体部・脚部、および内面は丁寧に横ナギ。</li> </ul> <p>*胎土は精良。 *焼成は良好。 *色調は灰青色。 *玄室・底道間より出土。</p>
9	脚 (無蓋)	C-1	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口径 12.3cm、器高 16.1cm。</li> <li>*口縁部は長く、一旦外側にしてのち段をつくって、外上方にのびる。</li> <li>*脚部と口縁部の境界、脚部中ほど、肩部、体部と底部の接界に計 5 本の深い凹線があぐる。</li> <li>*肩部は張り、底部は丸く、脚部に円孔を穿つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口縁部を直面に近く折り上げているのは、大きく開いた口縁部の焼きひずみをふせぐため。</li> </ul> <p>*胎土は良好。 *焼成は堅緻。 *色調は灰黒色。 *玄室入口、右側壁寄りから出土。</p>
9	脚 (無蓋)	C-2	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口径 11.9cm、器高 14.7cm。</li> <li>*口縁部は最初細く、一旦外側にしてのち段をつくって、外上方にのびる。</li> <li>*脚部と口縁部との境、および脚部中ほどにこまめ出し突起。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*脚部は、しばりの技法によって極端に細くつくらされている。</li> </ul> <p>*胎土は精良。 *焼成は堅緻。 *色調は灰黒色。 *玄室内、左袖部より出土。</p>
9	脚 (無蓋)	C-3	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口径 9.6cm、器高 11.2cm と小型。</li> <li>*口縁・口縁部間の境界の屈曲は、(C-3) とはほどなく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*底部はヘラ削り。</li> </ul> <p>*胎土は良。 *焼成はなま焼け。 *色調は灰白色。 *玄室内、左袖部より出土。</p>
9	脚 (無蓋)	C-4	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口径 9.7cm、器高 11.0cm と小型。</li> <li>*口縁部と口縁部の境界はつよく屈曲、外方にこまめ出し突起。</li> <li>*体部は情円型、肩部に凹線があぐる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*底部は簡便を利用したヘラ削りで、方向は時計逆まわり。</li> </ul> <p>*胎土は良。 *焼成は口縁部に焼けひずみ。 *色調は灰青色。 *玄室内、左袖部より出土。</p>
9	脚 (無蓋)	C-5	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口径 9.5cm、器高 10.9cm と、(C-3) とはほどなく。</li> <li>*口縁部は、はじめ外上方にのびたのち急角度に折れ、再び屈曲して、外反する口縁となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*底部はヘラ削り。</li> </ul> <p>*胎土は良。 *焼成はなま焼け。 *色調は灰白色。 *玄室内、左袖部より出土。</p>
9	直 口 盤	D-1	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口径 9.0cm、器高 16.7cm。</li> <li>*口縁部は長く、外上方にはほんのりと凸弧的にのび、中間に平行凹線がめぐる。</li> <li>*体部は形態、肩部に平行凹線。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体部下から底部は、ヘラ削りで、方向は時計逆まわり。</li> </ul> <p>*胎土は、やや石炭混入。 *焼成は堅緻。 *色調は紫がかった灰黒色。 *玄室内、左袖部より出土。</p>

9	台付直口袋 E - 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口径 7.8cm、台部先端径 10.4cm、器高 20.9cm。</li> <li>*口縁部は長く、外反しつつ立ち上り、平行凹線が左・下方にめぐる。</li> <li>*体部は梢円形で、凹線が 2 本。</li> <li>*脚柱部に長方形一段透しが 3 方にあく。</li> <li>*柱部と縫部の境に断面 V-角型のつまみ出し突起。</li> <li>*脚底部先端は、内方に向く縦面をもつ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*全体に丁寧に横ナデ調整。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土に細砂混入。</li> <li>*焼成は堅細。</li> <li>*色調は灰青色。</li> <li>*玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>*口径 5.0cm、体部最大径 8.1cm、器高 12.3cm と超小型。</li> <li>*II 頭部は外反しつつ立ち上り、口縁部に至って直立。</li> <li>*体部は錐形で、脚部に刻目文帯を付す。</li> <li>*脚柱部の中ほどに小円孔を穿ち、脚部は大きく外に向く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体部下半はヘラ削りで、方向は時計順まり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土に細砂・石粒混入。</li> <li>*焼成は、脚端部が焼きひずみ。</li> <li>*色調は灰黒色。</li> <li>*玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
9	台付直口袋 E - 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口縁部は欠損。</li> <li>*体部上面に把手を付す。</li> <li>*体部の最大径は 18.4cm と大形。</li> <li>*脚部と底盤の境界はわずかに棱をなすが、底部は丸く收める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*肩部に叩き目痕を残す。</li> <li>*体部下半と底盤はヘラ削りで、方向は時計順まり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土にやや石粒混入。</li> <li>*焼成は良好。</li> <li>*色調は淡い灰青色。</li> <li>*玄室内、右圓盤寄りから出土。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>*外上方にひらく口縁部は、体部上面の中心部はぎざして接合する。</li> <li>*体部上面に把手を付す。</li> <li>*体部最大径は 14.8cm。</li> <li>*脚部と底盤の境界は棱をもつ。</li> <li>*底部は扁平。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体部は底部から上方へ順次変形、上面の側山部を内板でふさいだのち、中心をはずして口縁部を接合。</li> <li>*閉口部をふさぐ内板には、把手をとりつける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は良好。</li> <li>*焼成のきい底部にふくらみ。</li> <li>*色調は灰黒色。</li> <li>*玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
9	平板 F - 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体部上面に円形の粘土紋を 5 個貼付する。</li> <li>*体部上面は丸く、脚部は張り出し、底部はやや扁平をなす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体部下半と底盤はヘラ削り。</li> <li>*ヘラ削りの方向は時計順まり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は細砂混入。</li> <li>*焼成は良好。</li> <li>*色調は淡い灰青色。</li> <li>*玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>*体部最大径 18.2cm、器高 20.3cm。</li> <li>*口縁部は長く、次第に外反しつつ口縁部に半る。</li> <li>*体部は方角な梢円形。</li> <li>*口縁部の中ほど、体部周先端、体部中央にそれぞれ平行凹線を施す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*成形の過程は、筒状の胴に口縁部をとりつけたのち、胴部の左・右端を接着する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は石粒混入。</li> <li>*焼成は良好。</li> <li>*色調は灰青色。</li> <li>*玄室内、左袖部より出土。</li> </ul>
9	平板 F - 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口縁部は短く、外反して立つ。中ほどにゆるやかな棱。</li> <li>*体部は直筒形。</li> <li>*口縁部の中ほど、体部周先端、体部中央にそれぞれ平行凹線を施す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*外表はナデ、内面ははけ目。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は石粒混入。</li> <li>*焼成は不良。</li> <li>*色調は褐色。</li> <li>*玄室内壁前より出土。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>*口縁部は短く、外反して立つ。中ほどにゆるやかな棱。</li> <li>*体部は直筒形。</li> <li>*口縁部の中ほど、体部周先端、体部中央にそれぞれ平行凹線を施す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体部から口縁部にかけて、わずかにはけ目。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土に細砂・石粒混入。</li> <li>*焼成は不良。</li> <li>*色調は褐色。</li> <li>*玄室内壁前より出土。</li> </ul>
9	檻 (上部部器) H - 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口縁部は短く、外反して立つ。中ほどにゆるやかな棱。</li> <li>*体部は直筒形。</li> <li>*口縁部の中ほど、体部周先端、体部中央にそれぞれ平行凹線を施す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*外表はナデ、内面ははけ目。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は石粒混入。</li> <li>*焼成は不良。</li> <li>*色調は褐色。</li> <li>*玄室内壁前より出土。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>*口縁部は短く、外反して立つ。中ほどにゆるやかな棱。</li> <li>*体部は直筒形。</li> <li>*口縁部の中ほど、体部周先端、体部中央にそれぞれ平行凹線を施す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体部から口縁部にかけて、わずかにはけ目。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土に細砂・石粒混入。</li> <li>*焼成は不良。</li> <li>*色調は褐色。</li> <li>*玄室内壁前より出土。</li> </ul>
9	檻 (上部部器) I - 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口縁部は短く、外反して立つ。中ほどにゆるやかな棱。</li> <li>*体部は直筒形。</li> <li>*口縁部の中ほど、体部周先端、体部中央にそれぞれ平行凹線を施す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*外表はナデ、内面ははけ目。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土に細砂・石粒混入。</li> <li>*焼成は不良。</li> <li>*色調は褐色。</li> <li>*玄室内壁前より出土。</li> </ul>

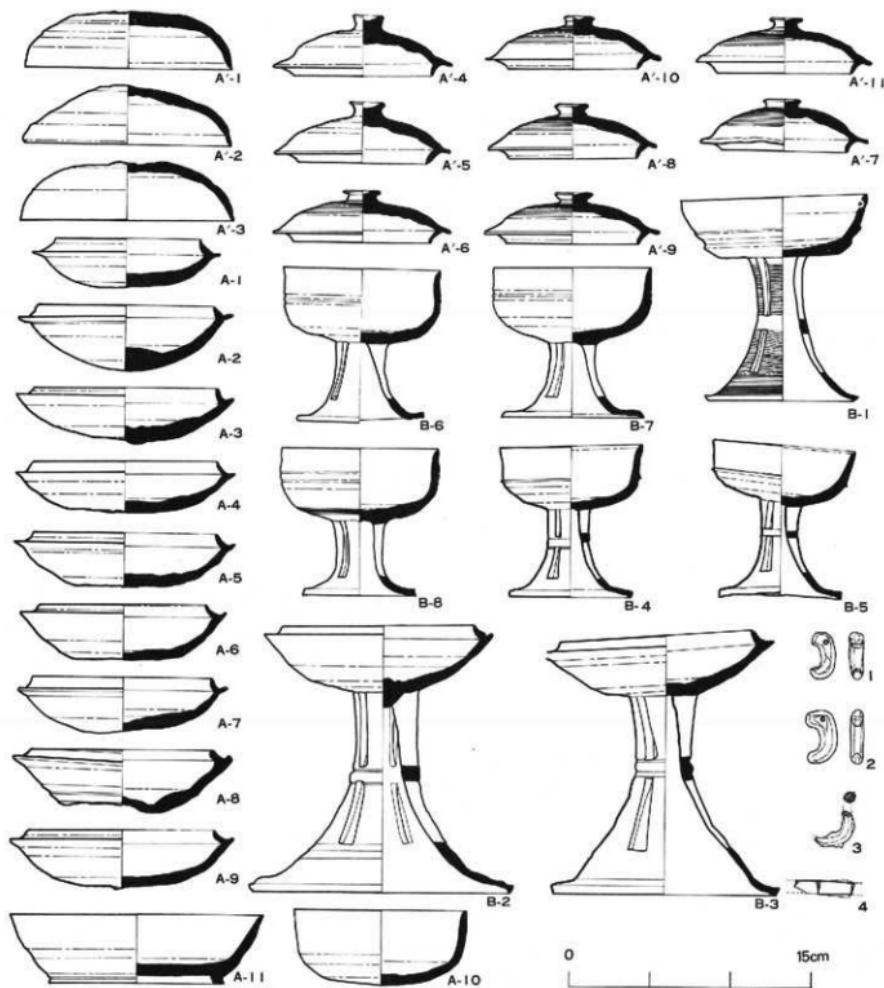


图8 黄牛冢古墳出土遺物実測図1

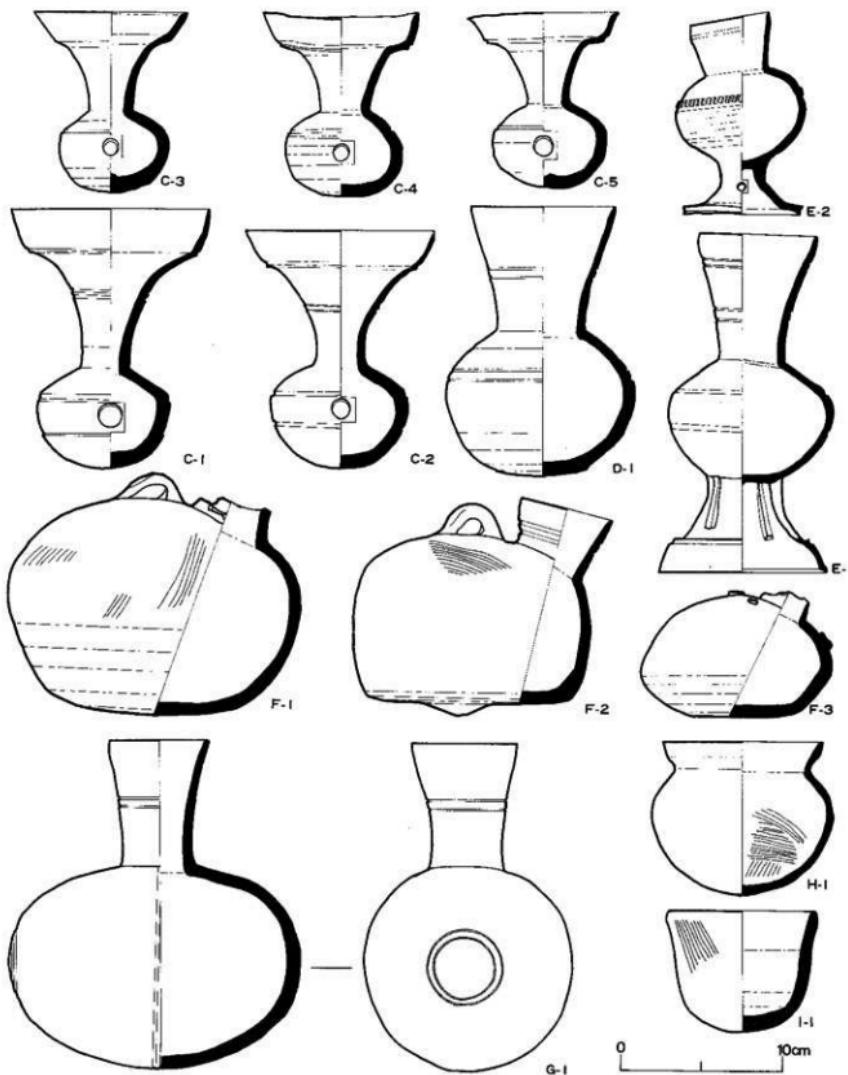


图9 黄牛冢古墓出土遗物实测图(2)

## 5. 考察

黄牛塚古墳出土の計43点の須恵器は「遺物」の項で詳細に論じられたように、新旧二期の遺物として把握できるであろう。すなわち、环、高环、平瓶等に典型的に見られるごとく、小型の丁寧なつくりの、一見して儀器としか考えられないものと、矮小化、退化化が明らかにみられるものの、まだ実用品としての形態を残す粗雑な成形痕しかみられないものとに区分されるのである。これらは陶邑古窯址のⅡ期末～Ⅲ期初頭に編年づけられるものと考えられ、実年代で6世紀末～7世紀前葉に当るものである。とくに後出的な杯【A-1～A-4】のタイプに入る小型品は、長浜市小一条の中山古墳から出土した超小型品とともに、祭祀用ミニチュアとして一括することができると思われる。結局のところ、遺物からする当古墳の築造は6世紀末葉という時期が考えられ、7世紀に入って超小型のミニチュアが副葬されたものと考えられる。

以上のごとく、当古墳の遺物は少くとも二時期にわたる様相を示しており、その石室内には、当然複数の被葬者ということが考えられるが、当石室内にはこの事を直接的に明らかにできる遺骸や木棺等の資料は全く残存していないかった。たゞ傍証的な資料として、副葬時の位置を保っていると思われる土器及び被葬者の安置場所と密接につながる内部敷設である棺台を取り上げることができよう。無論、土器の出土状況に関しては、大半のものが後代に袖部付近に集められたものと考えられ、きらには盗掘等による搅乱なども推測され、十分に証明しうる資料でないことは言うまでもない。

しかし、玄室奥部の土壇上、棺台わきに対称的な位置におかれた土師器二点と勾玉二点の出土位置及び二列の棺台石列等から、奥壁に頭部を向けた棺台上の1～2棺の安置がまず想定され、玄室前半部右側壁沿と同中央・石室軸上に並ぶ副葬品から同じく1～2棺の埋納が予想される。

以上のように、当古墳には2棺以上の複数体の埋葬が確実視されるが、これらの被葬者は、当古墳の築造年代からして、通例のごとく一古代家族の家長(戸主)及びその家族員と考えられ、家長の死とともに築造された当古墳内に、順次その縁故者が追葬されたものと解釈できよう。

ところで、一般に横穴式石室の採用は、その墓室の形式にふさわしい、新しい儀礼をもたらしたと言われ、<sup>①</sup>特に帰化系氏族の墳墓には炊飯具ミニチュアの副葬という事象に見られるように、その特色がことに著るしい。<sup>②</sup>そして、この新しい儀礼及び葬制に規定されて、石室内は明瞭に分割されていたのであって、そこには被葬者の死後の世界が堅固な姿で構成されていたものと推定される。

横穴式石室の内部空間の構成について、福岡澄男氏は大津北郊の古墳を対象に鋭い視点から解明され、石室形態とその内部敷設は被葬者の埋葬と儀礼とに深く関わっていることを指摘された。<sup>③</sup>

黄牛塚古墳の場合は、大津北郊の古墳に見られたような敷石(棺床)による石室内空間分割は見られなかったがこれにかわって、土壇と棺台とによる石室内空間構成が見られるようである。

すなわち、奥壁沿いに築かれた土壇は儀器たる土師器2点がすえられていたことから推測されるように、遺骸



插図写真 黄牛塚古墳出土遺物 (1・2: 勾玉, 3・4: 鉄製品)

安置の場所ではなく、安置に先立つ儀礼の場と言えよう。そして儀礼の場の前方の一列の石列こそが、木棺安置用に設けられた棺台と判断されるのである。

実際に第一次埋葬者たる家長の葬送経過を想像するならば、まず木棺搬入の前に、玄室奥部土壇に儀器たる上師器がおかれ、所定の儀礼が行なわれ、そのち棺台上に被葬者を納棺した柩が置かれ、最後に木棺側及び玄室前半部に須恵器等の副葬品が置かれ、再び所定の儀礼がとり行なわれて終了したものと思われる。

さて、長方形プランの玄室奥部に当古墳のような、儀礼、埋葬に伴う特別な敷設を設けた例は、一般には石障とか石棚などの敷設がこれに該当するものと推定されるが、特別な敷設物を設けないまでも、柩安置に先だって儀礼をとり行う空間を設けたと考えられる一例として、甲賀郡甲西町の孤栗古墳群第B-2号古墳をとり上げることができる。<sup>④</sup> 棺台上の被葬者に伴う副葬品と推測されている、奥壁附近の土器群が木棺安置に先だって置かれたものと考えることが許されるならば、当古墳にも上述したごとき、空間分割が存したものと想定される。

したがって言いかえるならば、黄牛塚古墳の土壇と棺台による石室内空間構成は、以上のような当時における儀礼と葬制にまつわる慣習に規定された結果生じたものと言っても過言ではないであろう。

なお、先に取上げた石櫛はマキノ町所在の奈良塚古墳にその例を見るが、石障については、従米、坂田都誌において石棺と解釈されていた近江町能登瀬の山津照神社古墳の石室内構築物は、その記述からすれば<sup>⑤</sup> むしろ石障と考えられる可能性が大きく<sup>⑥</sup>、その周囲から副葬品の出土をみたことと相まって、黄牛塚古墳と同様な儀礼空間の成立が推察されることを附記しておきたい。

以上、要するに黄牛塚遺跡は複数体の被葬者を納めた6世紀末7世紀前葉の径11m程度の小円墳であったが、その内部は特別な構築物が作成されており、死後の世界に対する豊かな観念が読みとられる注目すべき古墳であった。このような小円墳は横山古墳群にも数多く見られ、いずれも6世紀以降のあらたな生産力の飛躍を踏まえて成長してきた、共同体内の有力家族の墳墓と見られ、当古墳も附近の新興有力家族の墓地になるものと考えられる。しかし一方、当古墳は繼承して築造された古墳を伴わない単独塚であり、この点において、当古墳近辺の諸頭山古墳群、船崎古墳群等の後期古墳群や後別当古墳群他の旧息長村周辺の首長系群のものと考えられる各古墳とは異質であり、当古墳の被葬者たる古代家族の性格と消長を暗示しているように感ぜられる。なお、このような横山古墳群の諸相に関する一考察を別稿として試みたので参照されたい。

(別所健二)

## 註

- ① 小林行雄『古墳の話』
- ② 水野正好「滋賀郡所在の漢人系帰化族とその墓制」(『滋賀県文化財調査報告書』第4冊 滋賀県教育委員会)。
- ③ 福岡澄男「内部構造をめぐる諸問題」(『滋賀県文化財調査報告書』第4冊所収 滋賀県教育委員会)。
- ④ 水野正好他『甲賀郡甲賀町孤栗古墳群調査概要』(滋賀県教育委員会)。
- ⑤ 「改訂近江国坂田郡志」 第一巻。
- ⑥ この点について丸山竜平氏の示唆をえた。

## 第2章 中山古墳

### 1. 位置と環境(図1・図10)

中山古墳は行政上長浜市小一条町中山にある。昭和49年度に、北陸自動車道関連遺跡として発掘調査を実施した同市諸頭山古墳群とは小谷をはさんで、北東200mの所に位置する。現在独立丘として南北に細長い丘を形成しているが、本来、北に向て舌状に突出した丘陵であったと思われ、古墳はその北端部に位置する。丘陵は頂部が何時の時点かに削平されており、他に数基の古墳が集成されていた可能性も考えられるが、現在では証明できない。

中山古墳の発見によって、周辺には、布勢古墳、諸頭山古墳群、時期不明の船崎山古墳群と、3~4グループの後期古墳群が知られるようになった。いずれも6世紀末~7世紀初当のもので、長浜平野南部における古墳時代後期の墓制、ひいては、村落共同体のあり方について、より詳細に検討できるようになろう。

### 2. 調査経過

昭和50年9月上旬、長浜市小一条町の通称中山北端の丘腹部において、地元の中学生3名が須恵器片を発見し、以後數日にわたり多量の各種須恵器、ガラス製丸玉2個を探取した。現場は北陸自動車道建設とともに土取り場で、大型ブルドーザーによって、採土作業が行なわれていたのである。小一条区長より報告を受けて、調査が開始されたのは9月12日である。

遺物の発見地点は、ブルドーザーによって削り取られた急角度の斜面端部にあり、3個の東西に並ぶ列石がみられ、さらに、この延長上約4mの地点に、一個の石が露出していた。

この列石はおそらく石室の一部が露出しているものと推定し、南側を平面的に順次、掘り下げることにした。石室内部と思われる部分は、10~20cmを計る碎石が一面に散乱していた。しかしこれは土操作業によるものではない。石室の周囲は元來の自然地形を残さず、平坦な地形であり、以前から耕干し場として利用されていたもので、

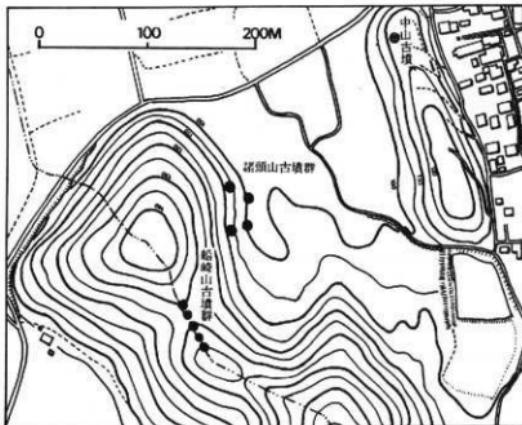


図10 中山古墳附近地形図

当古墳は、この丘頂部を削平した際に破壊されたものと考えられる。このため古墳としての形状を全く保たず、地元の古考の間に當古墳の所在は伝えられていなかったのである。

発見者によって、すでに30数点にのぼる各種須恵器（环身、环蓋、高环、瓶、壺、提瓶等）、と2個のガラス製丸玉がとり上げられていたが、さらに石室内部に散乱する大小の碎石をとり除いていくと、かなり破損してはいるが、20点を数える各種須恵器の出土をみた。そして数日のうちに地山を削平した床面があらわれ、側壁は一部を除いて、最下段の石材を遺存するのみであることが判明した。また床面からは、ガラス製小玉114点、金環2点、丸玉2点、鐵環1点等が発見された。

また墳丘封土の遺存の有無を確かめるため石室に直交するトレンチを北へ延長したところ、石室より約23m北の斜面下部において黒色表土内より、10数点の須恵器片、石錐1点、石製筋鉢車1点、土師器片数点の出土があった。しかし墳丘の周囲では封土の痕跡は全く無く、地山岩盤上に数センチの表土が堆積するのみであった。

当初、調査期間は9月末日までを予定していたが、遺構の保存状態が非常に悪かったにもかかわらず、遺物の出土数が多かったため実測、写真撮影等に期日を要し、10月8日になって調査を完了した。（鬼柳 彰）

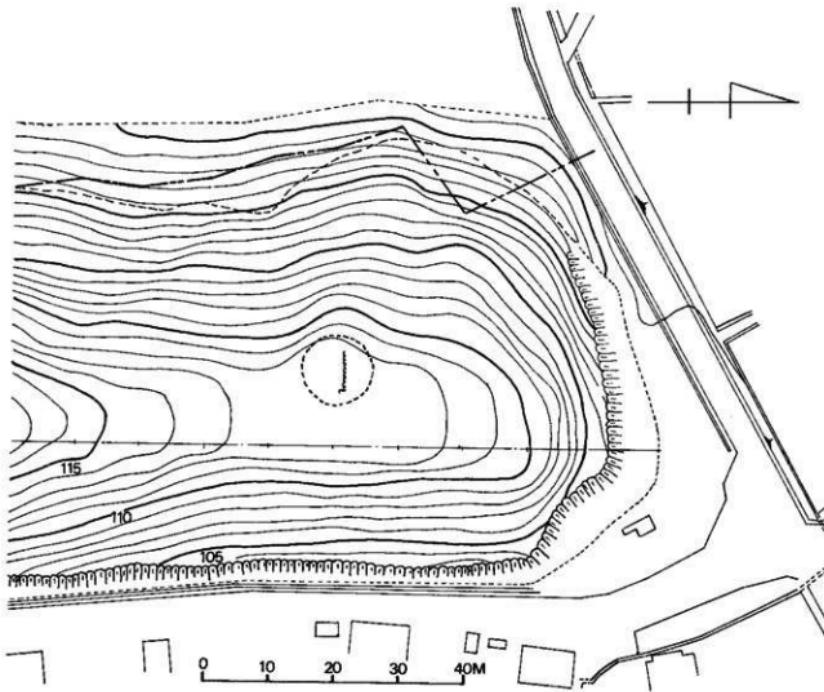


図11 中山古墳地形測量図

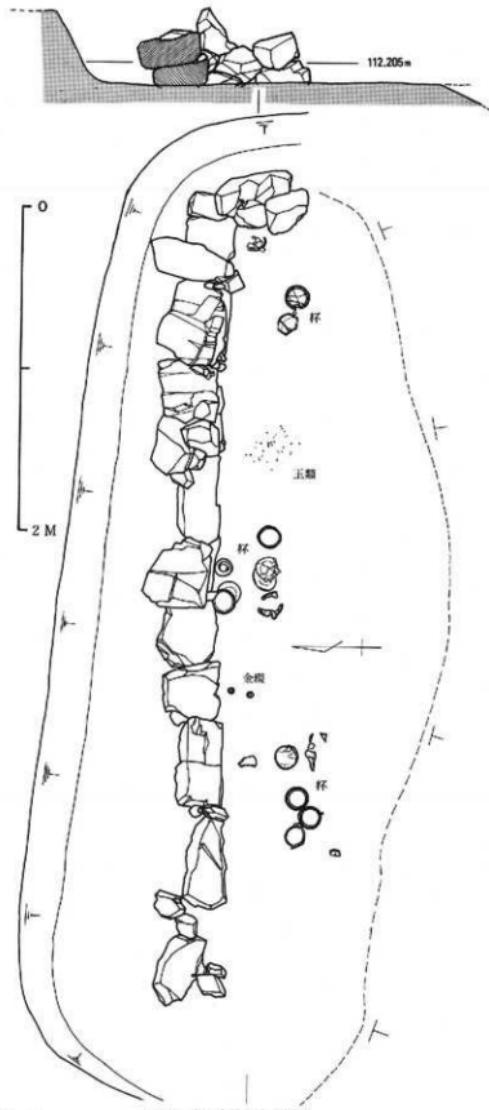
### 3. 遺構

#### 1) 墳丘(図11)

墳丘は現在全く遺存しない。当古墳は以前から糞干し場として利用されている平担部にあり、墳丘を思わせるような起伏等は全くみられない。石室に直交するトレンチによって観察したところ、石室周囲では、わずか數センチを計る表土があるのみで以下は全て地山岩壁であった。しかし上取り作業以前の地形図(図11)をみると、西側に石室をとり囲むような形の等高線が現れており、これが墳丘の裾、あるいは封土の流失したものであったということが考えられる。この地形と発見された石室の規模からみると、径20mほどの墳丘があったものと推定できるのである。

#### 2) 主体部(図12)

掘り方内部の削平された地山上に石室北側壁の最下段、一部で二段のみが遺存する。石



材は軟質のチャートで地山岩盤上に直接置かれている。石材は長径50cm程度で長さ5m~50cmにわたって直線上に並べられている。主軸方向は、ほぼ東~西方向にある。この列石の東端ではこれと直角に数個の石材がみられ、奥壁の一部と思われる。また列石の南側は1m~1m40cmの範囲でほぼ水平に削られているがこれが石室床面となっている。表面は安定した地山で、遺物もこの直上に置かれているもののが多かった。

石室の規模について考えてみよう。わずかに遺存する側壁最下段をみると、石材は約40cmから60cm程度であり、しかもこれを主軸方向へ向けて並べている。石室全長は掘り方からみると、最大に見積っても6mほどである。この数値は黄牛塚古墳主体部の8mと比べると短いが、先年調査された諸頭山古墳主体部の5.6mを超える。しかし諸頭山古墳では1mを超える石材が利用されているのに対し当古墳石室では、最大でこれの半分しかないのである。石室幅は推定の域を出ないが、床面の遺存する最大幅1.4mほどであろうと思われる。また玄室と羨道の区別は判断し難い。側壁中央付近より西半部がわずかに南へ寄るともみられるが、この部分を袖部と考えるには無理があろう。右片袖式の石室とも考え得るが、遺存部分の石材が、玄室、羨道を意図していないようにみうけられるところから、無袖であったと考えたい。

(鬼柳 彰)

### 3. 遺 物

#### 1) 遺物出土状態(図12)

遺物の半数以上が発見者によって採取されたものである。これを次に列記する。

环身 7点 (A-1, A-2, A-3, A-6, A-7, A-12, A-13)

环蓋 9点 (A'-2, A'-5, A'-6, A'-10, A'-12, A'-13, A'-14, A'-15, A'-16)

高环 5点 (B-1, B-2, B-4, B-5, B-6)

匙 1点 (C-1)

壺 7点 (F-1, F-2, F-3, F-4, F-5, F-6, F-7)

提瓶 2点 (G-1, G-2)

ガラス製丸玉 2点 (4, 5)

これらの遺物は出土状態を記録することは、できなかったが、主に石室西半部に集中していたとのことである。

調査が開始されてから発見された遺物には次のものがある。

环 7点 (A-4, A-5, A-8, A-9, A-10, A-11, A-14)

环蓋 7点 (A'-1, A'-3, A'-4, A'-7, A'-8, A'-9, A'-11)

高环 1点 (B-3)

壺 2点 (D-1, E-1)

ガラス製丸玉 2点 (6, 7)

ガラス製小玉 114点

金環 2点

鉄環 1点

これらの遺物は土操作業が行なわれたため破損が著しく、須恵器の完形品は数点を数えるに過ぎない。須恵器の出土地点は玄室奥部、中央部、西部の3カ所に集中している。先ず玄室奥壁近くで、壺2組が出土、中央部で

は环身3点、环蓋2点、直口兼一点、西部では环身2点、环蓋2点が発見された。これらは、床面上数センチ以内に正立して出土したものが多く、副葬された当時の状態を、大きく変えていないものと思われる。

また、装饰品のうち、金環2点と、ガラス小玉114点は上述した須恵器出土地点の中間で発見された。すなわちガラス製小玉は奥壁より径1.5mの地点に集中しており、金環は同3mの地点に約10cmほどの間隔をおいて出土した。

またガラス製丸玉は、一点が西部床面上に発見されたが、調査前に採取された2点もこの付近にあったものと思われる。他の一点は掘り上げた土の中からみつけられたものである。

(鬼柳 彩)

## 2) 遺物 (図13・図14)

### I) 須恵器

中山古墳からは、48個の須恵器が出土したが、この中には欠損品を実測して原図を描いたものもあり、他に復元不可能な破片も沢山ある。48個の須恵器の詳細については、後掲の説明表に記してあるので参照願うとして、ここでは全体的な特徴と推移を述べる。また当古墳と黄牛塚古墳は近距離にあり、築造年代も相い近いと考えられるので、黄牛塚古墳出土の須恵器との比較を通じて、大体の時代を推定しておこう。

环 坯の身〔A〕は14個出土しているが、2類に大別できよう。

(1)立ち上りはや・内傾し、高さは受部上面から1.0cm平均を測る。口径は12~13cm。〔A-1~7〕。

(2)立ち上りは内傾度がきつく、低くなり、受部とも矮小化の傾向にある。口径も11~12cmと小型化。(A-8~14)。

両者のうち、坯(2)は黄牛塚古墳の環(4)に対応できるので、実年代では6世紀末に比定され、坯(1)はそれに先行する段階に位置づけられよう。

蓋 坯の蓋〔A'〕は計16個出土し、大別して3類に分けられる。

(1)犬井部は丸く、口縁部は外下方に開く。口径平均14cm、器高4.5cmを測る。〔A'-3〕が〔A-6〕と、〔A'-9〕が〔A-4〕と一对をなすので、当然坯(1)と対応する。〔A'-1·2·3·6·9〕の5個。

(2)天井部は扁平気味で、口縁部はほぼ垂直に先端に至る。口径平均13cm、器高4cmと小型化する。坯(2)と対応すると思われる。〔A'-4·5·7·8·10·11〕の6個。

(3)口径10cm平均、器高3.5cm平均を測って超小型。口縁端部の内側が突出するもの(〔A'-12〕)があり、同じ形態のもの(〔A'-10〕)を承けると考えられる。黄牛塚古墳における7世紀前半のミニチュア化と関連があろう。

〔A'-12~16〕の計5個。

高环 高环〔B〕は計6個の出土をみた。無蓋高环4点のうち、〔B-2〕は長脚二段透しで、环の口縁部が直立、口縁部と底部の境に2段の凸帯と櫛描き刺突文が施されている。〔B-1〕も同じく長脚二段透しであるが、环の口縁部が外上方に開き、2段の縫とヘラ描き斜線文が口縁部と底部を区切っている。〔B-3〕の环部口縁は直立し、〔B-4〕は外上方にのびるが、ともに脚部は短く、透しは穿たれていない。脚部に透しのない高环は7世紀代に入つて多くなるので、〔B-3·4〕ともその時期に位置づけられよう。また〔B-1〕は、环部口縁の外反度が黄牛塚〔B-1〕に類似するため、同じ6世紀末に、〔B-2〕は、口縁の立ち上りや櫛描き刺突文といった特徴から、陶邑窯TK43に並行するとみて、6世紀後半に実年代を求める。ちなみにTK43につづくTK209(6世紀末)には、〔B-1〕類似の高环が出ている。これらのほか、有蓋短脚の高环が2個出土している(〔B-5·6〕)。短脚というよりもむしろ脚柱部をもたず、直接环底部と脚部とが連続するといった方が適当で、黄牛塚〔B-2·3〕の有蓋長脚二段透し高环とは別系統のものとみるべきであろう。

鰐 首 [C-1] はたゞ1個出土した。口頭部以上が欠損しているため器高は測りがたいが、体部最大径6.4cmと超小型の鰐である。黄牛塚古墳のミニ鰐[C-3・4・5]の最大径が7cm前後とこれに類似し、同じく7世紀前半に位置づけることができる。

壺 壺類は総計9個出土している。有蓋短頸壺[D-1]は、肩の張りがきつく、丸底の体部に直立する口縁がつく。体部最大径は肩の高さで測り、14.1cm。口径より器高の方が長い。直口壺[E-1]は、球状の体部に、はじめ外反気味で中ほどから直立する口頭部がつく。黄牛塚古墳[D-1]が口頭部と肩部に平行凹線をめぐらせるのに対し、一切装飾ではなく、それよりさらに小型である。壺[F-1・2]のうち、[F-1]は口縁部が広く、口端内外で段をつくり、最大径は体部の中ほどで11.3cmを測る。底部の乱方向のヘラ削りが、壺[F-4]と共に通する。[F-2]の方は口径6cmと口縁部が狭く、肩部が張り出し、肩部と口縁先端近くに凹線をめぐらしている。[F-3]は、口頭部は消失して不明だが、肩部がやや張って最大径11.3cmを測り、体・底部は丸く收める。肩部にカキ目を施し、体部はヘラ削りしている。[F-4・5]はともに完形で出土したミニチュア壺である。[F-4]は器高8.7cmに対し、口径7.1cmと、口頭部の発達に特徴がある。[F-5]は最大径7.6cmのやや扁平な体部に、中軸線を外れて短い口縁部がつく。両者ともカキ目が施されている。[F-6・7]はともに口頭部が消失しているが、前者の体部最大径が8.0cm、後者が7.4cmとミニチュア壺である。[F-7]の肩部には斜行する刻突文が施されている。以上4個のミニ壺は、蓋の小型品、[C-1]小型鰐とともにミニチュア化の特徴を均しくする。

提瓶 提瓶[G]は2点の出土をみた。ともに環状の把手を肩部両側につけている。[G-1]は、口縁端部に段をつくらず、頭部と口縁部を平行凹線によって区切っている。6世紀後半に比定できよう。[G-2]は口頭部が欠損するが、体部最大径12.2cmと小型化する。陶邑窯では提瓶は7世紀代には消滅するといわれるから、[G-2]は6世紀末に位置づけるべきかもしれない。

以上をまとめてみると、総計48個の須恵器は3グループに大別できる。そしてこの3群はそれぞれ6世紀後半、6世紀末、7世紀前半の3期に比定できると思われる。したがって須恵器資料を基準に考えると、当古墳は3次にわたって埋葬が行われたとみてよいであろう。

(谷口義介)

## II) 装身具類

ガラス製小玉 114点を数えるガラス製小玉は、径3~5mm、厚さ1~3mm程度で、色は、青、青緑、黄、である。青色のものは透明なものが多い、緑、黄のものは不透明である。原材は鉛ガラスであろう。次に計測値を上げる。

No.	外径	内径	厚さ	色
1	3.5	1.5	4.0	青
2	4.5	1.5	3.5	青・緑
3	4.3	1.2	3.2	青
4	4.0	1.7	2.8	青
5	4.8	1.7	2.5	青
6	3.8	1.5	2.5	青
7	4.5	1.0	3.0	青
8	4.0	1.0	2.2	青
9	4.2	1.6	2.0	青
10	4.5	1.3	3.0	青
11	4.0	1.3	2.8	青

No.	外径	内径	厚さ	色
12	4.7	1.7	2.9	青
13	3.5	1.0	3.0	青
14	3.5	0.8	3.0	青
15	4.0	1.7	2.8	青・緑
16	3.8	1.5	2.8	青
17	3.9	1.6	3.2	青
18	3.5	1.3	2.3	青
19	3.8	1.2	2.2	青
20	4.5	1.6	3.3	青
21	3.4	1.2	1.7	青
22	3.0	1.3	2.0	青

No.	外径	内径	厚さ	色
23	3.3	1.0	2.7	青
24	3.0	0.9	2.0	青
25	4.5	1.8	3.0	青
26	3.2	0.8	2.5	青
27	3.2	0.8	2.5	青
28	3.0	0.9	1.2	青
29	3.5	1.2	2.0	青
30	3.5	1.5	2.7	青
31	3.2	1.5	1.6	青
32	3.5	1.0	1.8	青
33	3.5	1.3	2.2	青

No.	外径	内径	厚さ	色
34	3.0	1.2	1.5	青
35	3.0	1.0	1.6	青
36	4.0	1.8	1.5	青
37	2.9	0.8	1.5	青
38	3.2	1.3	3.0	緑
39	4.2	2.0	2.8	青・緑
40	3.5	1.3	2.5	青・緑
41	4.0	1.0	2.3	緑
42	3.0	1.0	1.5	青
43	3.3	1.2	2.8	緑
44	3.5	1.3	1.5	青
45	4.0	1.7	4.2	青・緑
46	2.5	1.3	2.2	青
47	3.3	1.3	2.3	青
48	3.5	1.2	3.0	青
49	3.5	1.5	3.8	青
50	3.0	1.3	3.5	紫紺
51	2.8	1.0	1.3	青
52	3.2	1.2	3.5	青
53	3.3	1.3	2.1	青
54	3.0	1.5	2.2	緑
55	3.8	1.3	2.4	緑
56	3.5	0.8	2.2	緑
57	3.8	1.5	2.5	緑
58	3.5	1.5	2.2	緑
59	3.5	1.0	2.6	緑
60	3.3	1.2	2.1	緑

No.	外径	内径	厚さ	色
61	4.0	1.6	2.3	緑
62	3.8	1.2	3.3	緑
63	4.0	1.3	3.0	緑
64	3.5	1.7	2.3	緑
65	3.5	1.0	2.5	緑
66	4.3	1.0	4.0	緑
67	3.2	1.6	4.4	緑
68	3.4	1.3	2.3	緑
69	3.8	1.4	4.3	緑
70	3.5	0.9	3.9	緑
71	4.0	1.7	2.3	緑
72	3.5	1.3	2.4	緑
73	3.0	1.5	3.5	緑
74	3.5	1.2	1.9	緑
75	2.9	0.8	1.5	緑
76	2.3	0.6	2.5	緑
77	3.0	1.2	2.2	緑
78	3.5	1.5	2.1	緑
79	3.0	0.9	2.0	緑
80	2.9	1.1	1.5	緑
81	2.2	0.6	1.9	緑
82	2.9	1.1	1.0	緑
83	2.5	1.0	2.0	緑
84	3.3	1.1	2.1	緑
85	3.5	1.2	4.0	緑
86	3.5	1.8	2.5	緑
87	2.9	1.0	1.5	緑

No.	外径	内径	厚さ	色
88	3.0	1.0	2.6	緑
89	2.4	0.8	2.5	緑
90	3.5	1.3	2.7	緑
91	3.3	1.3	2.1	青・緑
92	2.5	0.8	2.7	緑
93	2.6	1.2	2.0	青・緑
94	3.3	1.5	2.2	緑
95	2.6	0.8	2.1	青・緑
96	2.2	1.1	1.8	緑
97	2.8	1.0	2.2	緑
98	3.0	0.9	2.5	緑
99	2.1	0.6	2.2	緑
100	3.2	1.1	2.3	緑
101	3.2	1.0	1.5	緑
102	4.5	1.2	2.5	緑
103	3.0	1.0	1.4	緑
104	4.0	1.5	2.0	黄
105	3.5	1.0	1.5	黄
106	3.4	1.7	2.1	黄
107	2.9	1.1	1.3	黄
108	3.1	1.1	1.5	黄
109	3.1	1.0	2.1	黄
110	3.3	1.0	2.2	黄
111	2.6	0.9	1.4	黄
112	3.3	0.9	1.5	黄
113	2.5	0.7	2.1	黄
114	2.3	0.5	2.2	黄

(数値単位はmm)

**金環** (図13の2、3) 地金は銅、金箔は一部を除いて剥離している。2は長径 2.6cm、短径 2.5cm、3は長径 2.6cm、短径 2.4cmをわかる。

**ガラス製丸玉** (図13の4～7) 紫紺色、4は整美な形態を有するが6はゆがんだ四辺形を示している。管状の吹ガラスを切断したものと思われる。

**鉄環** (図13の8) 指環と考えられる。金か銀の箔をかぶせたものであろうが、全く残っていない。

**石製鋸鍬車** (図13の1) 滑石製、表面、裏面共鋸齒文の線刻がある。(トレンチで出土) (鬼柳 彰)

## 中山古墳出土須恵器説明表

図版No.	器形	土器No.	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴
13	环身	A-1	*立ち上がりはや、内傾し、高さは受部上面から 0.9cmを測り、先端は丸く収める。 *口径は11.9cm。 *体部は丸みを帯び、底部はや、扁平。	*底部の刃が欠損するため定かでない。 *受部は不良。細縫を含む。 *ヘラ削り調整は施していない模様。 *焼成はなま焼け気味。 *色調は灰白色。	
13	环身	A-2	*立ち上がりは内傾度が著しく、高さは 0.9cm、先端は丸い。 *口径は11.2cm。 *受部は短く、水平にのび、先端はあまり。 *体・底部は丸みをもつ、底部はや、扁平。	*ヘラ削りの痕は認められない。 *底部中央は粗雑な仕上げ。	*胎土は不良。細縫を含む。 *焼成は良。 *色調は灰青色。
13	环身	A-3	*立ち上がりは受部上面から 1.2cmを測り、わざと内傾、器厚は先端に近くにつなげて急に薄くなる。 *受部は外上方にのび、先端は丸く収める。 *口径は11.9cm。 *受部先端から体・底部にかけて、やや内傾気味となり、底部中央は尖る。	*底部は刃ほどヘラ削り調整、方向は時計逆まわり。 *粘土組み上げ自体が粗雑なため、体・底部が不自然な形を示し、内面も強く屈曲する。	*胎土は良好。 *焼成は良好。 *色調は灰青色。
13	环身	A-4	*立ち上がりは受部上面から 1.1cm、全体に内傾するが、中ほどからや、上方にそれ程丸い先端に至る。 *口径は12.2cm。 *受部はほぼ水平にのび、先端は丸く収める。 *受部先端から体部にかけて丸く接続するが、底部は焼成のさうじらしい歪みを生じている。	*内・外面ともに横ナデ調整。 *外表底部にもヘラ削りの痕は認められず、ただクロ回転を利用した跡が一末めぐる。	*胎土は良好。 *焼成は堅焼。 *色調は灰青色。 *宝冢美駿前より出土。 *〔A'-9〕蓋と1セット。
13	环身	A-5	*立ち上がりは内傾度が著しく、高さは受部上面から 0.8cmを測る。先端は脱い。 *口径は11.0cm。 *受部は、立ち上がりとの境に四線をめぐらし、水平にのびて、先端は丸く収める。 *受部先端と体部との境界はや、内傾するが、体・底部は丸く収める。 *面歯は厚。	*体部の一部と底部全面にわたって、ヘラ削り調整。 方向は時計順まわり。	*胎土は良好。 *焼成も良好。 *色調は灰青色。 *宝冢美駿附近より出土。
13	环身	A-6	*立ち上がり高さ 1.1cm、内傾し、先端は丸く收める。 *口径は13.4cm。 *受部は、立ち上がりとの境に四線をめぐらし、外上方にのび、丸い先端に至る。 *体部は、粘土組み上げの痕を残して削出し、底部は扁平をなす。	*底部の刃ほどヘラ削り調整で、方向は時計逆まわり。 *底部のヘラ切りは粗雑。	*胎土は良好。 *焼成は堅焼。 *色調は灰青色。 *〔A'-3〕蓋と1セットをなす。
13	环身	A-7	*立ち上がりは内傾するが、中ほどから外方にそれ程丸く収める縁部に至る。 *口径は13.1cm、高さ 1.1cm。 *立ち上がりは受部の境に深い凹線をめぐらし、そのため受部の先端は上方に接をなすかたちを示す。 *受部先端から体部にかけて強く内傾しつつ接続し、体・底部は丸く収める。	*底部の刃ほどヘラ削り調整。 方向は時計順まわり。 *体部・山線部外表、および内面は丁寧に横ナデ仕上げ。	*胎土は良好。 *焼成は堅焼。 *色調は灰青色。

13	环 身	A-8	<ul style="list-style-type: none"> <li>*立ち上りは縮小化し、高さは 0.7cm、内傾度も著しい。</li> <li>*口径は 11.8cm。</li> <li>*受部は、立ち上りとの境に凹線をめぐらすが、深い部分と逆に全く認められない一部分がある。</li> <li>*丸く收める受部先端から体部にかけて内屈し、体・底部間は段をなして接続する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*底部外表面は、粗雑にヘラで削り落し、その上から簡単にナデる。</li> <li>*受部上面の凹線はヘラを立てて施す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は精良。</li> <li>*焼成は良好。</li> <li>*色調は灰青色。</li> <li>*玄窓中央部より出土。</li> </ul>
13	环 身	A-9	<ul style="list-style-type: none"> <li>*立ち上りは、受部上面から高さ 0.9 cm を測り、内傾度が著しく、先端は覗く収める。</li> <li>*受部は短く、外上方にのび、先端は丸い。</li> <li>*口径は、11.4cm。</li> <li>*受部と体部の境界は強く内屈し、体・底部は丸く收める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*底部はわずかにヘラ削りで、仕上げは机軒、ヘラ切りの痕を残す。</li> <li>*体部・口縫部外表面、および内面は横ナデ調整。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は不良。細砂を含む。</li> <li>*焼成は良好。</li> <li>*色調は灰青色。</li> </ul>
13	环 身	A-10	<ul style="list-style-type: none"> <li>*立ち上りは内傾度が著しいが、先端近くで軽く曲げをなす。</li> <li>*口径は 11.2cm。</li> <li>*受部は水平にのび、先端は丸く收める。</li> <li>*受部先端から体部にかけて内屈して接続し、体・底部は丸味をおびるが、部分扁平をなす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体・底部の間はヘラ削りするが、まだ粗雑に仕上げる。</li> <li>*内面底部中央の仕上げナデも粗雑。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は良。わずかに石粒を含む。</li> <li>*焼成は良好。</li> <li>*色調は灰青色。</li> </ul>
13	环 身	A-11	<ul style="list-style-type: none"> <li>*立ち上りは強く内傾するが、先端近くにそれ、先端は丸く收める。</li> <li>*受部は水平に外にのび、先端はあまり。</li> <li>*口径は、10.9cm。</li> <li>*体部は丸味をおびるが、底部はやや尖った感じに收める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*粘土組まき上げの痕を内・外面に頻繁に残す。</li> <li>*底部はヘラ削りでなく、指で直かに調整したらしく、指の痕をずっと残す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は良。わずかに小石粒を含む。</li> <li>*焼成は堅緻。</li> <li>*色調は灰青色。</li> </ul>
13	环 身	A-12	<ul style="list-style-type: none"> <li>*立ち上りには強度が著しく、受部上面から高さ 0.9cm を測り、先端に至って尖る。</li> <li>*受部はやや外上方にのび、先端は丸く收める。</li> <li>*口径は、11.0cm。</li> <li>*体部は丸味をおびるが、底部は扁平に近い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*内面は丁寧に横ナデ調整。</li> <li>*体・底部の境界にヘラ削り。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土精良。</li> <li>*焼成は堅緻。</li> <li>*色調は内面は灰青色、体・底部外表面は自然釉が吹き出して黄緑色。</li> </ul>
13	环 身	A-13	<ul style="list-style-type: none"> <li>*立ち上りは著しく縮小化し、高さは受部上面から 0.7cm を測る。</li> <li>*口径は、11.9cm。</li> <li>*受部は、立ち上りとの境にヘラで深い凹線をめぐらすため、先端は上方にのびる形を示す。</li> <li>*体部と底部は強い縦をなして連なる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*底部の調整はヘラを用いるが、ロクロ口縫は利用せず、無構不定方向の痕を残す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土良好。</li> <li>*焼成も良好。</li> <li>*色調は灰青色。</li> </ul>
13	环 身	A-14	<ul style="list-style-type: none"> <li>*立ち上りは縮小化して、高さ 0.7cm、先端は鋭い。</li> <li>*口径 11.6cm。</li> <li>*受部は外上方にのび、先端は丸く收める。</li> <li>*体部は丸味に乏しく、底部と明確な縦をなして連なる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体・底部の間は粗雑にヘラ削りし、外表面にも粘土組のまき上げ痕を残す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は良。や、小石粒を含む。</li> <li>*焼成は良好。</li> <li>*色調は灰青色。</li> <li>*玄窓中央部附近より出土。</li> </ul>
13	环 身	A-1	<ul style="list-style-type: none"> <li>*大井部は丸味をおり、体部はわずかに粗雑、上縫部はほぼ垂直をなす。</li> <li>*口縫先端は丸く、端部内面に凹線がめぐる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*大井部は粗雑にヘラ削りで調整、方向は時計順もあり。</li> <li>*内面は横ナデ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*胎土は良。わずかに石粒をまじえる。</li> <li>*焼成は良好。</li> <li>*色調は灰青色。</li> </ul>

13	坏 墓	A'-2	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部はゆるやかに丸味をとび、なだらかに口縁部に連なる。</li> <li>口縁部は外方に開き、先端は丸く、端部内面はわずかに段をなす。</li> <li>器底は薄く、ほぼ一定。</li> <li>大型で、口径14.6cmを測る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部は丁寧にヘラ削り調整し、へう削りの方向は時計逆まわり。</li> <li>内面は丁寧に横ナデして仕上げる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>胎土は良。わずかに石粒をまじえる。</li> <li>焼成は良好。</li> <li>色調は灰青色。</li> </ul>
13	坏 墓	A'-3	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部はゆるやかに丸く收め、口縁部は直底をなす。</li> <li>口縁先端は丸いが、器部内面は浅く広く凹む。</li> <li>器底はほぼ一定。</li> <li>大型で、口径は14.7cm。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部はヘラ削り調整で、方向は時計逆まわり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>胎土は良。わずかに石粒を含む。</li> <li>焼成は魚好。</li> <li>色調は灰青色。</li> <li>* (A'-6) 身とセット関係。</li> </ul>
13	坏 墓	A'-4	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部は扁平をなし、全体は内削し、口縁部は直底。</li> <li>口縁部は丸い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部はヘラ削り。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>胎土は良。</li> <li>焼成は良好。</li> <li>色調は薄い灰青色。</li> </ul>
13	坏 墓	A'-5	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部・全体は丸味をとび、口縁部は直底をなす。</li> <li>口縁底部は先端は丸く、内傾する端面を有し、凹窓がめぐる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部は直線にヘラ削り。</li> <li>全体・口縁部外表、および内面は丁寧に横ナデ仕上げ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>胎土は精良。</li> <li>焼成は堅緻。</li> <li>色調は灰青色。</li> </ul>
13	坏 墓	A'-6	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部はゆるやかに丸味をとび、天井・体部間は一部わずかに内削する。</li> <li>口縁部は外方に開き丸味で、先端は丸い。</li> <li>口径は、14.0cm。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部はヘラ削りで調整、方向は時計逆まわり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>胎土は不良。細砂・石粒を含む。</li> <li>焼成良好。</li> <li>色調は薄い灰青色。</li> </ul>
13	坏 墓	A'-7	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部は丸く收めるが、ヘラ削りでや、扁平を示す。</li> <li>天井部と口縁部は丸味をとびて接続し、口縁部は直底に先端に至る。</li> <li>先端は丸い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部はヘラ削り調整。</li> <li>方向は時計逆まわり。</li> <li>内面は横ナデして仕上げる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>胎土良好。</li> <li>焼成は堅緻。</li> <li>色調は灰青色。</li> <li>* 宝塚奥壁前より出土。</li> </ul>
13	坏 墓	A'-8	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部は丸味をとび、天井部と体部との境界に浅く広くくぼみがある。</li> <li>口縁部はほざかに外方に開き、先端は丸く收める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部はヘラ削りで調整。</li> <li>方向は時計逆まわり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>胎土は良。</li> <li>焼成は良好。</li> <li>色調は灰青色。</li> <li>* 宝塚奥壁前より出土。</li> </ul>
13	坏 墓	A'-9	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部はゆるやかに丸く收め、口縁部はほとんど直底をなす。</li> <li>口縁先端は内傾する曲面を有し、浅く凹む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部は直線にヘラ削り、方向は時計逆まわり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>胎土は良。</li> <li>焼成は良好。</li> <li>色調は灰青色。</li> <li>* 宝塚奥壁前より、(A'-4) 身とセットをなして出土。</li> </ul>
13	坏 墓	A'-10	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部は中央に浅く扁平で、天井部から体部・口縁部にかけて屈曲をくり返す。</li> <li>口縁底部は内傾する端面を有し、凹窓が一絆めぐる。</li> <li>口径は、13.2cmでや、小型。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部中央は直線にヘラ削り、仕上げナデを施す。</li> <li>内面は丁寧に横ナデ調整。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>胎土精良。</li> <li>焼成は堅緻。</li> <li>色調は灰青色。</li> </ul>
13	坏 墓	A'-11	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部・体部・口縁部と全体に丸味をとびる。</li> <li>口縁部先端は丸く收める。</li> <li>口径は、12.3cm。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部はわずかにヘラ削りの痕がある。</li> <li>全体・口縁部外表、および内面は横ナデ調整。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>胎土は良。</li> <li>焼成は堅緻。</li> <li>色調は灰青色。</li> <li>* 宝塚奥壁前より、片欠損して出土。</li> </ul>
13	坏 墓	A'-12	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部はゆるやかに丸味をとび、口縁部はや、外方に開いて下斜する。</li> <li>口縁先端は直底をなすが、口縁内側は突出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部はヘラ削り。</li> <li>正円の沈線が一絆めぐる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>胎土はわずかに石粒混入。</li> <li>焼成は良好。</li> <li>色調は内面は灰青色。外表は山自然科学が吹き出しており、緑色。</li> </ul>
13	坏 墓	A'-13	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部は丸く、天井部と口縁部の境はわずかに開む。</li> <li>口縁部はほぼ垂直に下方にのび、先端は丸く收める。</li> <li>端部内面は段をなす。</li> <li>口径10.5cmと超小型。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天井部は頂部をのぞいてヘラ削り。残りは横ナデ。</li> <li>* 天井部に3本の平行沈線が放物線状に付く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>胎土は石粒・細砂を含む。</li> <li>焼成は良好。</li> <li>色調は灰青色。</li> </ul>

13	环(奥) A'-14	<ul style="list-style-type: none"> <li>全体の弓以上が欠損。</li> <li>★天井部は扁平、口縁部はわずかに外方へ開きつ、端部に重る。</li> <li>★先端は丸いが、口縁部内側に投をなす。</li> <li>★口径10.5cmと超小型。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★犬井部と体部の境はヘラ削り、残りは両面とも横ナダ調整。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★胎土は細砂・石粉混入。</li> <li>★焼成は良好。</li> <li>★色調は灰青色。</li> </ul>
13	环(奥) A'-15	<ul style="list-style-type: none"> <li>★口径 9cmと超大型。</li> <li>★天井部と体部の境にわずかに丸味をもつもの、頂部はほぼ扁平。</li> <li>★口縁端部は面取りが施されている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★天井部から口縁まで横ナダのみ。</li> <li>★内面は全面横ナダのあと、犬井部を仕上げナダ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★胎土は良。</li> <li>★焼成は良好。</li> <li>★色調は外面灰緑色、内面は灰青色。</li> </ul>
13	环(奥) A'-16	<ul style="list-style-type: none"> <li>★最大径 9.5cmの超小型。</li> <li>★ほぼ垂直に立つ口縁部に扁平な犬井部がつく。</li> <li>★口縁端部は段状の面がとられている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★天井部と体部境あたりヘラ削り、内面天井部に同心円状のあて木痕がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★胎土は細砂混入。</li> <li>★焼成は良好。</li> <li>★色調は灰白色。</li> </ul>
13	高环(長脚無)	<ul style="list-style-type: none"> <li>★环部は、裾部が欠損。</li> <li>★环部は、口縁部と底部とが2段の枝とへら彫き羽彫文によって分けられる。</li> <li>★口縁部はわずかに外反して立ち上り、先端は丸く收める。</li> <li>★脚柱部は細く長くのび、長方形二段迷しを2方にあける。</li> <li>★脚腮部は、口縁部に外にのび、端部は上方にのみ突出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★外表面・内面とも横ナダ調整。</li> <li>★迷しの穿孔も丁寧。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★胎土良好。</li> <li>★焼成は堅緻。</li> <li>★色調は薄い灰青色。</li> </ul>
13	高环(長脚無)	<ul style="list-style-type: none"> <li>★环部の口縁部はほぼ垂直に立ち上り、口縁部から底面にかけて、つまり出し凸部が2段めあり、その間に斜行する彫彫き羽彫文を施す。</li> <li>★脚柱部は【B-1】に比べて短く、長方形二段迷しが2方にあく。</li> <li>★脚腮部は外下方にひらき、端部は下方にのみわずかに突出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★外表面・内面とも丁寧に横ナダ調整。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★胎土は良、わずかに細砂をまじえる。</li> <li>★焼成良好。</li> <li>★色調は濃い灰青色。</li> </ul>
14	高环(前倒)	<ul style="list-style-type: none"> <li>★环部の弓が欠損。</li> <li>★口縁部は長く、垂直に立ち上り、先端はや、尖る。</li> <li>★脚柱部は太く短く、透し孔は見られない。</li> <li>★脚腮部はつよく外下方にひらき、端部は下方にのみ三角に尖る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★环底部がヘラ削り調整。あとは横ナダ。</li> <li>★内面は自然な吹き出で判別しないが、おそらく横ナダ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★胎土良好。</li> <li>★焼成は堅緻。</li> <li>★色調は灰黒色。</li> </ul>
14	高环(前倒)	<ul style="list-style-type: none"> <li>★环部と脚柱部をわずかに残して、以下欠損。</li> <li>★口縁部はわずかに外反しつ、立ち上り、先端は丸く收める。</li> <li>★底部は丸味をわびる。</li> <li>★脚柱部に透し孔はなく、凹線が一条めぐる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★环底部がヘラ削り、あとは横ナダ調整。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★胎土良好。</li> <li>★焼成は堅緻。</li> <li>★色調は灰黒色。</li> </ul>
14	高环(短脚有)	<ul style="list-style-type: none"> <li>★环部立ち上りは内縮し、受部上面から高さ 1.0cmを測り、口縁先端は丸く收める。</li> <li>★受部はわずかに外上方にのび、先端は丸く收める。</li> <li>★底部は丸味をわびる。</li> <li>★脚柱部は短く、外方に下降し、脚部は柱部を受けてより開くが、端部は内縮して先端に至る。</li> <li>★脚腮部に円形の透しが2方にあく。</li> <li>★接地面は内方向を向くため外先端部のみ着地し、内先端部は突出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★环底部はヘラ削り調整。</li> <li>★脚部の穿孔は丁寧。</li> <li>★环底部以外は丁寧に横ナダして仕上げる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★胎土良好。</li> <li>★焼成は堅緻。</li> <li>★色調は灰青色。</li> </ul>

			●环部の剥、脚部部の汚が欠損。 ●环部立ち上りは内傾し、高さは10.0cm、先端は丸く取れる。 ●受部はや、外上方にのび、先端は丸い。 ●脚部部と脚部はまっすぐ連続して外方に開く。 ●接地点は最も広く団んで外方を向き、内先端部のみ着地、外先端部は甘い。 ●脚部部に不定形の透しが3方にうがつ。	●环底部はヘラ削り調整、环内面中央に同心円叩き文がつく。 ●その他は横ナデ。 ●脚部部の不定形透しは、粗雑に穿孔。	●粘土良好。 ●焼成も良好。 ●色調は灰青色。
14	高環 (短脚有蓋)	B-6	●口頭部以上が欠損。 ●体部はほゝ球形。 ●最大径 6.4cmと超小型。	●体・底部はヘラ削り調整。 ●脚部にカキ目。	●粘土は細砂を含む。 ●焼成は良好。 ●色調は灰青色。
14	頸	C-1	●口頭部は短く、垂直に立ち、先端は丸く取れる。 ●体部は胸の張りがきつく、無文。底部は丸く取れる。	●U縫部・肩部・体部は横ナデ調整。 ●内面も同様。 ●底部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。	●粘土は良。わずかに石粒混入。 ●焼成良好。 ●色調は灰青色。
14	短脚蓋 (短脚有蓋)	D-1	●口頭部ははじめわざかに外反気味で、中ほどから瓶底に立ち上る。 ●体部はほゝ球状。	●底部はヘラ削りするが、ロクロ回転を利用したのではない。 ●その他は横ナデ調整。	●脸上はわざかに石粒混入。 ●焼成良好。 ●色調は淡い灰青色。
14	直口蓋	E-1	●口頭部、体部とも一切施設しない。	●内面底部中央は粘土紐のまき上げの筋を仕上げナデせず、そのまま残す。	●玄宝異駆前より出土。
14	蓋	F-1	●全体の汚欠損。 ●体部最大径11.3cm。 ●口頭部は外反。	●内・外面とも横ナデ調整。 ●底部の仕上げは、欠損して不明。	●粘土は良好。 ●焼成は堅緻。 ●色調は灰黒色。
14	蓋	F-2	●口頭部内外に段をつくり、先端は尖って、断面は錐状を呈す。 ●脚部はや、張り出し、体・底部は丸く取れる。	●体部・底部はヘラ削り調整。	●粘土は精良。 ●焼成は堅緻。 ●色調は下半分が灰青色、上半は自然釉が吹き出している。
14	蓋	F-3	●口頭部および背部の一部欠損。 ●脚部はや、張り出して最大径11.3cmを測り、体・底部は丸く取れる。	●脚部はカキ目、体部はヘラ削り調整。 ●内面は横ナデ。	●粘土はわざかに石粒混入。 ●焼成は良好。 ●色調は灰青色。
14	蓋	F-4	●体部に比して口頭部は長く、や、外反して立ち上り、U縫部は垂直をなす。 ●脚部の張り出しあはや、強く、最大径を測る。	●U縫部から体部にかけてカキ目調整。 ●底部はヘラ削りするが、ロクロ回転を利用しない。 ●底部内面中央に、粘土紐まき上げの筋をそのまま残す。	●粘土良好。 ●焼成は堅緻。 ●色調は濃い灰青色。
14	蓋	F-5	●U縫部は短く、や、外反して立ち上り、脚部は丸く取れる。 ●U縫部は体部の中心からわざかにずれて付く。	●U縫部と肩部にカキ目。 ●体部はヘラ削り。	●粘土はわざかに石粒混入。 ●焼成は堅緻。 ●色調は灰青色。
14	蓋	F-6	●口径 3.6cm、器高 6.4cm、体部最大径 7.6cmと超小型。 ●全体の汚欠損。 ●最大径 8.0cmと超小型。 ●体部はほゝ球形につくり、口頭部は外反気味に立ち上る模様。	●底部はヘラ削り調整。 ●その他および内面は横ナデ。	●粘土はわざかに細砂混入。 ●焼成良好。 ●色調は灰青色。
14	蓋	F-7	●口頭部、および背部の一部欠損。 ●脚部はや、張り出し、最大径 7.4cmを測る。	●底部に斜行する刺突文。 ●底部は粗雑にヘラ切り。	●脸上は細砂混入。 ●焼成は良。 ●色調は薄い灰青色。

14	提瓶	G-1	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体部の側面が一部欠損。</li> <li>*頸部はや・外反して立ち上り、口縁部は垂直にのみて、丸い先端に至る。</li> <li>*肩部両側に環状の把手が付くが、欠損。</li> <li>*体部ほぼ一正円をなす。</li> <li>*体部前面のふくらみは頗著で、背面のふくらみは少ない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体部前面は回転を利用してカキ目調整。</li> <li>*胎土は細緻・石粒を含む。</li> <li>*焼成良好。</li> <li>*色調は灰褐色。器表に自然釉が吹き出でて、や・緑色。</li> </ul>
14	提瓶	G-2	<ul style="list-style-type: none"> <li>*口頸部、体部另欠損。</li> <li>*肩部両側に環状の把手が付くが、一方は欠損。</li> <li>*体部前面のふくらみはわずかで、背面もや・ふくらむ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*体部前面は回転を利用してカキ目調整。</li> <li>*背面と側面の接合部はヘラ削り。</li> <li>*胎土精良。</li> <li>*焼成良好。</li> <li>*色調は灰青色、一部灰黒色。</li> </ul>

### 参考文献

田辺昭二『陶邑古窯址群』I。

横山浩一「手工業生産の発達—土師器と須恵器—」・「古墳時代須恵器の編年略表」(『世界考古学大系』日本Ⅳ、古墳時代)。

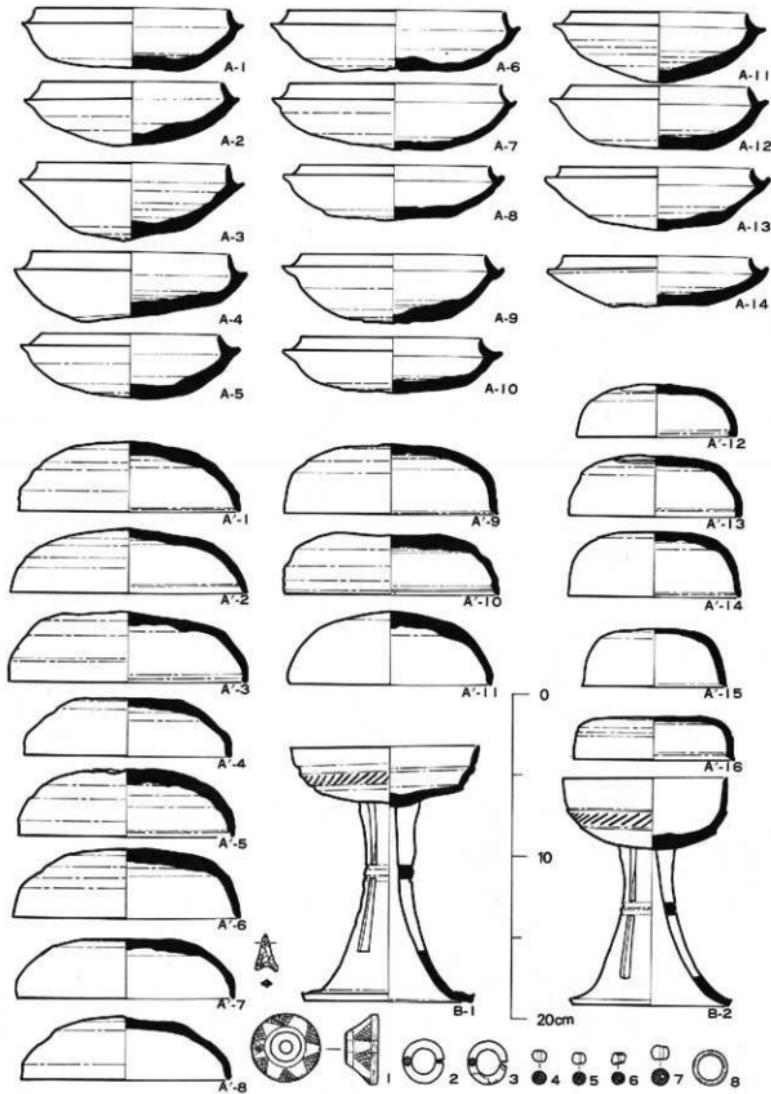


图13 中山古墳出土遺物実測図(1)

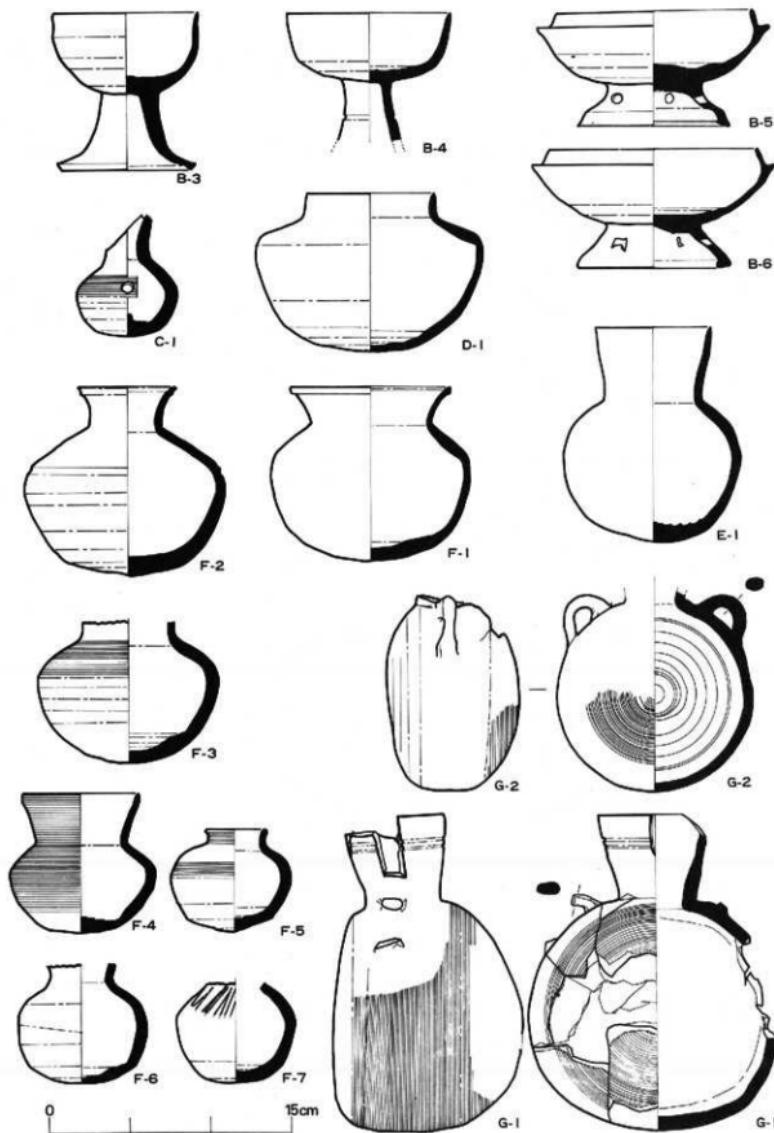


图14 中山古墳出土遺物実測図(2)

## 4. 結語

前述のように当古墳では3次にわたる埋葬が行なわれたと考え得る。遺物の出土状態をみれば、石室内より出土したものでは、奥壁部の壺2点が6世紀後半に比定されるものであり、石室中ほどから前半部にかけてのものは第2次、第3次埋葬時のものと思われる。発見者によって採取された30数点の須恵器類は、3次のものが混在している。これらのうち調査後発見されたものは、副葬時の位置をそれほど変えていないものと思われる。ここで棺体の置かれた位置を示唆するのは、ガラス製小玉と、金環の出土位置である。前者は石室床面上数センチの範囲内に、径30~40cmの円内にその全てが発見されたのであるから、遺体の位置を示しているものと思われる。次に金環は小玉より西で発見され、ほぼ同一レベルに10cmほどの間に置いて出土した。これは小玉とは2.2mの位置にあるのだから、別の被葬者のものと思われる。また奥壁においては、壺と共に鉄環が発見され、これは第一次の被葬者のものと思われる。

以上のことから、当古墳では遺物の出土状態から見ても3次にわたる埋葬が推定し得るのである。石室の構築年代は、第一次埋葬の時からして、6世紀後半と考えるのが妥当であろう。

当古墳は諸頭山古墳群のうち先年調査されたものより、築造年代がわずかに早いものと考えられるが、果して古墳群を形成していたものであろうか。中山では以前から古墳の分布は知られておらず、また地図、空中写真等によつても、全城が後世の削平を受けているために、判断し得ない。しかしながら、付近に分布する船崎山古墳群、諸頭山古墳群とも、4基~7基ほどを数えるのだから、当中山でも、後期古墳群として数基の分布があつたとしてもよい。調査中、トレンチを掘った部分では、黒色土より、かなりの数にのぼる須恵器類が出土している。即ち、後世の削平によって、数基の古墳が破壊された可能性は考えられるのである。今回調査された石室でも、わずかに石室最下段を遺存するのみであったことを考へると、他には完全に破壊されたものもあったとも考えられる。

(鬼柳 彰)

# 第3章 上ノ山古墳群

## はじめに

当報告書は、7基より構成される上ノ山古墳群のうち北陸自動車道の路線内にかかる1号墳及び2号墳の発掘調査記録である。調査は京都産業大学考古学クラブの協力を得て実施し、地元教育委員会、坂口区の方々の多大な援助を得た。また、地元の文化財専門員平野市介氏には当古墳群出土資料や附近の遺跡分布に関する情報の提供を受けた。最初に記して謝意を表します。

## 1. 位置 (図15)

上ノ山古墳群は行政上、滋賀県伊香郡余呉町坂口上ノ山に属する。姉川本流、高時川、草野川、余呉川等の諸河川で形成された湖北平野はその北端を木ノ本町黒田附近で集束し、以北、すなわち余呉川上流は伊吹山地の断層谷である柳ヶ瀬地溝帯へと続く。地溝帯の南方、今市、中ノ郷及び下余呉にかけては盆地状の小平野が形成されているが、下余呉以南黒田以北にかけては東の大箕山、西の大岩山にはさまれて再びせまい谷筋を形成している。この狭い谷筋に坂口の集落があり、上ノ山古墳群は谷筋の東側、大箕山の西側山麓に位置する。大箕山は標高532mで、周囲に幾つもの舌状台地を張り出しているが、上ノ山古墳群はその東側中程の一つの端部に形成され、標高156m~163mの間にある。

坂口の地は、余呉川に沿って北上し、柳ヶ瀬越から桜木峠、木ノ芽峠を経て越前国に至る古来よりのルートである北国街道の南の基部にあたり、交通路の要所である。福井県武生市まで約40kmの里程である。

## 2. 歴史的環境 (図15)

広大な湖北平野はその北端を木ノ本町黒田にもつが、その北方、余呉川の中、上流域では、下余呉から今市にかけての間で小盆地状の平野部を見る以外、狭い断層谷があるだけである。その他では、中ノ郷から東に入つて下丹生、上丹生にわずかな谷平野を見るにすぎない。遺跡の分布もこの小盆地と谷平野部に限られ、余呉川上流の柳ヶ瀬地溝帯には現在のところ知られていない。

まず、古墳の分布であるが、余呉川東岸で、上ノ山古墳群に隣接する丘陵尾根上に東野古墳群(円墳4基)、北隣に大門古墳(円墳、横穴式石室)があり、北上して、下余呉に北畠古墳群(円墳数基)、崩れ谷古墳、中ノ郷に日椿塚古墳(円墳)、今市に孤塚古墳(円墳)、塚谷古墳(円墳)と続く。余呉川の西岸では、現在のところ、上ノ山古墳群の西面、大岩山の東側の一丘に円墳6基(内2基に横穴式石室確認)、小谷をはさんで北隣の支丘端で円墳1基、さらに、これらの両支丘の基部で前方後円墳かと思われるもの1基を発見したのみで、余呉湖北方において、確実な古墳の存在を知らない。また、この古墳群の南方では、大岩山の南側の一丘上に木ノ本町黒田古墳群(円墳6基)が存在するだけである。従つて、北国街道沿いでは、その入口たる大箕山と大岩山の両丘端

に集中して分布し、北方では、余呂川東岸に限って点在するという状況を示している。これら諸古墳の年代は、知り得る限りで、横穴式石室を有し、又、須恵器の出土を見ている。古墳群中に前方後円墳かと思われるものを含むが、そのクビレ部に当る部分に大型の石材が露頭しており、あるいは横穴式石室を有する可能性の強いものである。従って、おおよそ、後期古墳と考えてよく、北国街道の必要性に関する政治的な背景を示唆するものとして興味深い。

これら諸古墳よりさかのぼる古墳の存在は、現在のところ知らないが、東尾古墳群の南側台地小字桜内で土師器を中心とする1万平方メートル以上に及ぶ散布地を確認した。北国街道沿いの集落跡としては、下余呂の余呂川西岸で藏方遺跡が知られているが、出土遺物は須恵器の平瓶、壺等で、古墳時代後期である。新たに発見した桜内遺跡は、土師器片を中心として散布しており、藏方遺跡よりさかのぼる可能性が強く、周辺諸古墳の出現に先行する集落跡の発見は、今後この地域の発展過程、すなわち、北国街道の街道筋としての位置を考える上に重要な問題を提示するものと思う。

弥生時代までさかのぼる遺跡は、余呂川沿い（北国街道沿い）において、現在のところ知らない。ただ、中ノ郷より東に入り、丹生川の上流、下丹生において、弥生時代土器を出土するにすぎない。また、縄文時代遺跡は皆無であるが、今回調査した上ノ山1号墳の封土中より、後期の土器片が出土しており、今後、その周辺で発見される可能性が出てきた。

以上、北国街道沿いにおいて、現在のところ、遺跡の中心は古墳時代にあるといえる。主に古墳の築造は、後期に下り、街道の東側で坂口から今市までに点在し、また、入口たる大箕山、大岩山の南半山腰に4~8基からなる古墳群が各2カ所ずつ存在し、北国街道の歴史的位置づけに重要な意味を持つようである。これら古墳の被葬者達の生活基盤たるべき集落跡についても、古墳時代後期の藏方遺跡の他、前期までさかのぼる可能性の強い桜内遺跡が発見され、今後、この地域の調査如何によって、余呂川沿いの歴史的な発展過程、延いては、北国街道の歴史的位置付けが可能になろう。

### 3. 上ノ山古墳群(図16)

上ノ山古墳群は現存数6基の円墳から構成されている。標高およそ163mから156mの間に、舌状台地を取り囲むように、その端部に築成されている。各古墳の規模は墳丘径10~18mと小さい。1号墳と5号墳とが比較的大規模なもので、墳径16~18mを計り、また、1号墳が古墳群中最高所に位置し、5号墳は最低所にある。3号・4号・6号の3墳は墳径15mで、ほぼ同一等高線上に並ぶ。2号墳は径11mと最も規模が小さく、3号墳等より若干高位にある。各古墳の位置関係については、2号墳と3号墳、4号墳と5号墳が墳丘網を接して位置し、1号墳と6号墳とは隣接するものと若干の距離を持っている。主体部の構造については、今回調査した1号墳と2号墳は入口を南面させた横穴式石室であることが明らかとなつたが、他のものについては、3号墳が墳頂部の大きな陥没窪と石材が露頭しているところから横穴式石室であることが確実である。4~6号墳については、いずれもほぼ完存しているところから明瞭でない。

以上は当古墳群の現状であるが、5号墳と6号墳の北側で、現在開墾して水田となっている所で、開墾時に遺物の出土を見たという教示を得た。その位置は、およそ標高150m附近で、5号墳よりも低位にあったことになる。出土遺物は須恵器杯1点、蓋2点の他に直刀らしい鉄製品もあったという。また、開墾時には石材はなかつたとのことであり、木棺の直葬墳であった可能性が強い。出土遺物は6世紀前半のものであり、後述するが、1

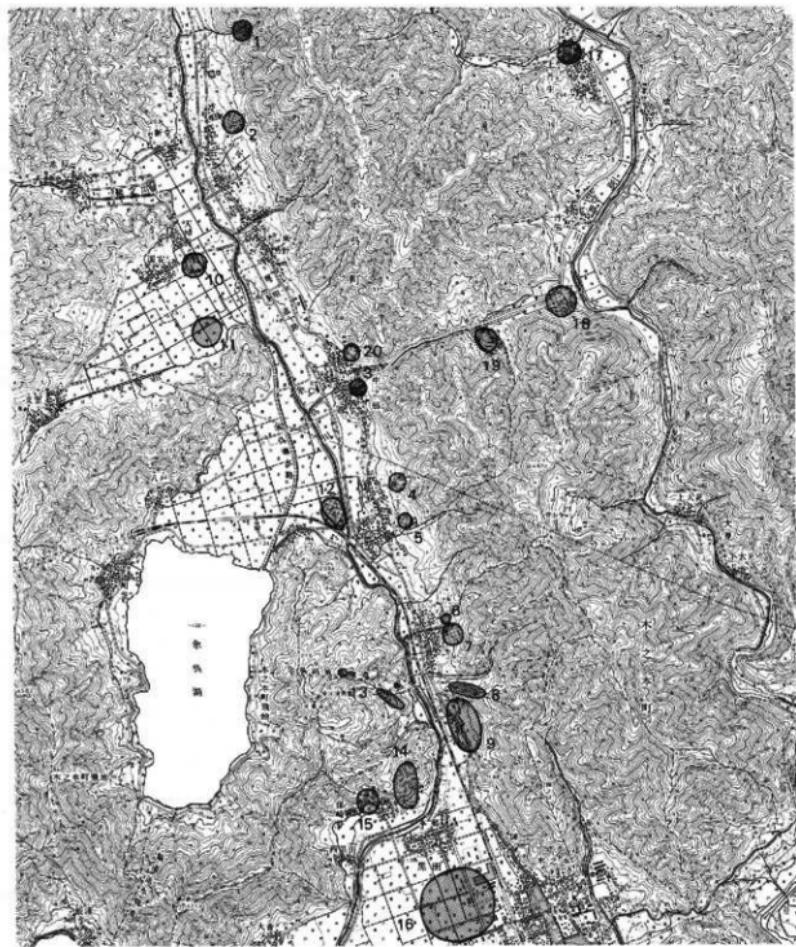


図15 上ノ山古墳群位図

NO	遺跡名	所在地	立地	種類	時代	備考
1	塚谷古墳	余呂町今市		円墳	古墳時代後期	
2	狐谷古墳	" "		"	"	
3	日榆塚古墳	中ノ郷大将軍		"	"	
4	崩谷れ古墳	下余呂崩れ谷		"	"	
5	北畠古墳群	" 北畠		円墳数基	"	須恵器提瓶・台付壺・勾玉・金環
6	大門古墳	坂口大門		円墳	"	横穴式石室
7	上ノ山古墳群	上ノ山	丘陵端部	円墳 7基	"	本報告書
8	東尾古墳群	" 東尾	丘陵尾根	円墳 4基	"	
9	桜内遺跡	桜内台地	集落跡	古墳時代前期	土師器片散布	
10	松田遺跡	" 松田野	平地	"	奈良時代	須恵器・土師器・墨書き器
11	ナラ寺遺跡					
12	茂方遺跡	茂方	平地	集落跡	古墳時代後期	須恵器平瓶・壺
13	西山古墳群	坂口	丘陵尾根	円墳 8基	"	
14	黒田古墳群	木ノ本町黒田森崎山	丘陵尾根	円墳数基	"	
15	黒田城跡遺跡	"		寺院跡		
16	黒田遺跡	"	平地	集落跡	弥生時代	
17	高木塚遺跡	余呂町上井生				
18	下丹生遺跡	" 下丹生台地	集落跡	弥生時代	弥生式土器	
19	横尾遺跡	中ノ郷横尾		墓跡?		
20	笠山遺跡	" 笠山	上山腹	墓跡	宝町時代	中世古墓2基・土器墓1基・灯明皿・管玉・勾玉

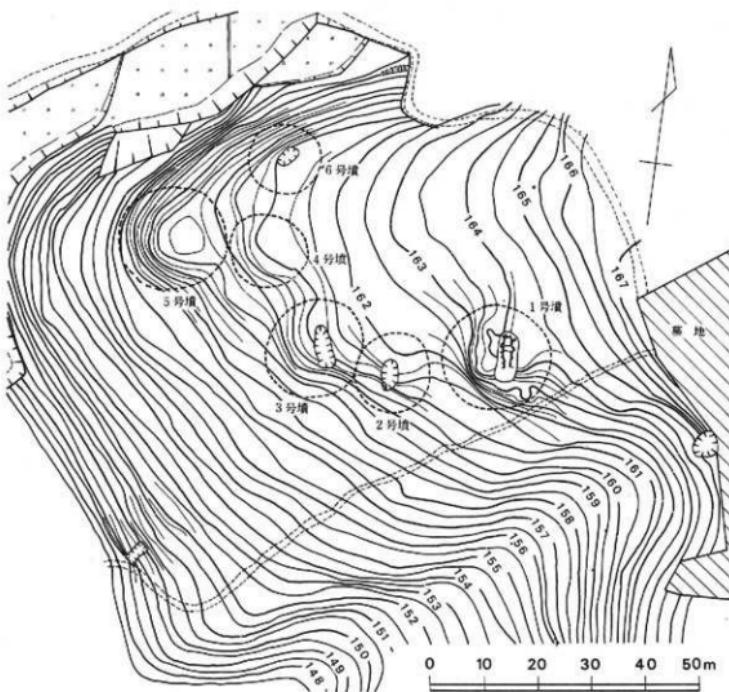


図16 上ノ山古墳群地形測量図

号墳が6世紀後半後葉のものであるところから、当古墳群形成初期の段階と以後との葬法形態の変化は注意すべき点である。

以上、当古墳群は、本来7基から構成されていた古墳群であり、その形成は6世紀前半にまでさかのぼるものである。

#### 4. 上ノ山1号墳(図17)

1号墳は群中最高位にあるもので、群の東端に位置している。調査前に、すでに盗掘を受けており、ずり落ちかけた天井石と玄室側壁の一部が露頭していた。しかし、一枚であるが天井石が遺存しているところから石室の遺存状態は良好であると思われ、墳丘もほぼ完存していると思われた。

調査は、まず、被掘痕内の埋土の除去作業から開始し、石室の輪郭を明瞭にすることにつとめた。次いで、石室の主軸に直交する方向と並行する方向の3ヵ所のトレンチを墳丘に設定し、各トレンチの断面土層の観察から

墳丘の築成方法を追求した。

### 1) 墳丘 (図18)

墳丘径16.6mの円墳である。墳丘高は、墳丘が南西方向に下る緩斜面に築造されているため、高所側で1.0m、低所側で2.4mを計る。

外部施設としての墓石や列石等を持たず、また、周溝等も見出しえなかった。

以下では、石室中軸線に直行する東及び西トレンチ、並行する北トレンチの3カ所の断面土層の観察結果をのべ、石室の構築と墳丘の築造との関係に触れることにする。

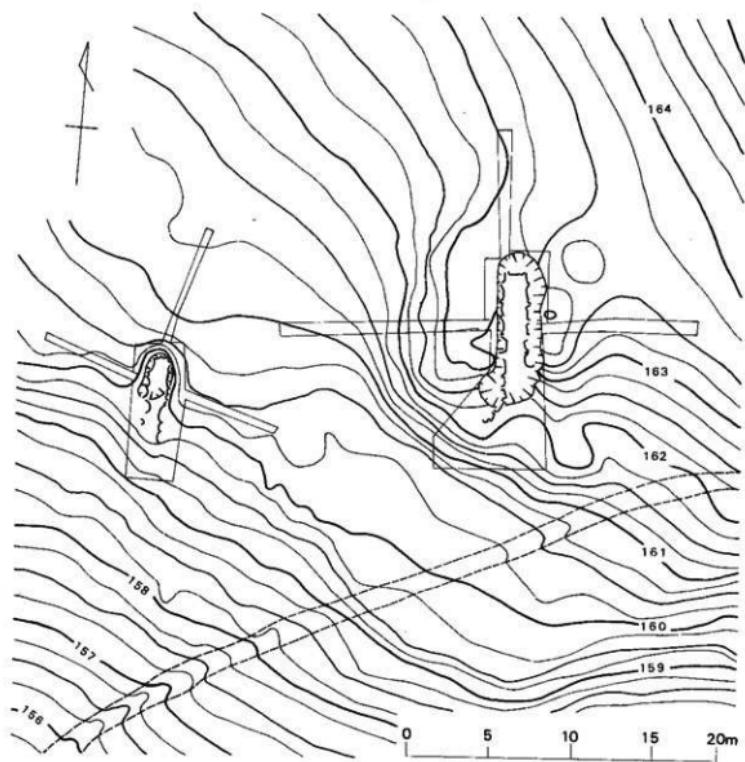


図17 上ノ山1号墳、2号墳、墳形測量図

## I) 東トレント

東トレントは台地緩傾斜面の高所側に当り、自然傾斜面を最高約1m程の深さで、巾約6mの範囲にわたって掘削し、掘削面がほぼ水平になるように整地している。自然傾斜面の整形は石室を構築すべき部分に及び、東側壁の部分で、さらに、約80cmの深さに掘り込んでいる。この掘り込みは、西トレントの断面土層の観察で、石室の西侧壁下面で自然傾斜面に移行している。

石室の高さは、天井石の遺存状況から考えて、約1.8mを計り、東トレントの部分では、下段を高さ約80cm、上段を約1mの二段の石材を用いて構成している。墳丘の構成はこの側壁石材の構築と密接な関連を有している。下段石材は自然傾斜面の掘り込みの内側に設置されるが、石材の規模が掘り込みの深さとほぼ等しく、石材後方に生じた掘り込み内の空所に6層（図18—東トレント断面土層図の3～7、以下土層番号のみ記す）にわたる版築状の土砂の充填がなされる。これは掘り込み壁を利用して石材を固めたものであろう。上段の石材は下段石材の後方を埋めた土層上に及ぶ大型石であるが、この石材の後方にも巾約1.9mにわたり7層（9～13）の盛土が4半円形状になされ、石材の外側からの押えをしている。

この二段階の盛土で石室側壁石材の積み上げが終了するが、次いで墳丘の形状を形成すべく2層（14～30）の盛土がなされる。この場合、最厚85cm程を計り、ほぼ二段目側壁石材の高さに等しく盛土し、さらに、側壁石材附近では高さを40cm程減じている。この段落内側には6層（33～38）の版築状の盛土が厚さ約60cmにわたってなされている。段落内側の盛土については、ちょうど側壁石材後方の盛土法と同様のものであるが、この部分は側壁ではなく、天井石が設置されるべき高さであり、従って、この盛土は天井石の周囲を固めるべく盛土されたものと考えられる。また、14～32までの盛土は墳丘の盛り上げを意図するとともに、その高さを側壁高にあわせていくところから、天井石の運搬に供すべく盛土されたものと思われる。

以上の過程を経て側壁の積み上げ、天井石の設置が終り、石室が完成するが、墳丘の形成については、まず39～44の盛土を行なって墳形を整える。この場合、盛土は天井石上面を同時に覆いかくさず、天井石の外周附近で終っている。すなわち、東トレントの断面土層の観察によって、これら天井石の外周でとどまり、また、遺存高で約20cmにわたって高さを減じ、天井石の外周も含めてその上方に凹所を形成していたと考えられる土層を検出し得たのである。そして、さらに、この凹所に充填されたと思われる44・45の2層を観察し得た。従って、墳丘の最終的な形成に、天井石上方を除いた39～44の盛土の段階がままであり、最後に45・46の盛土で天井石を覆いかくし、墳丘を完成させたようである。

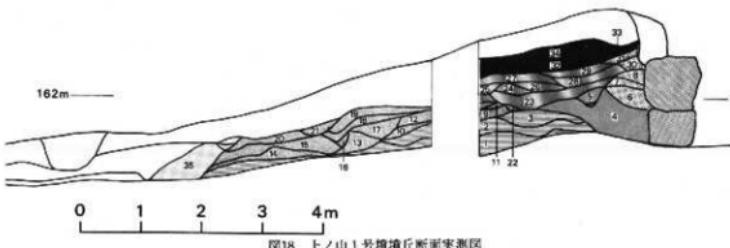


図18 上ノ山1号墳断面実測図

## II) 西トレント

西トレントでは、墳丘基盤が自然傾斜の低位側に当るため、地山の整形はほとんどなされておらず、自然傾面が残っている。

石室の側壁石材は二段分が遺存しているが、石室高からして、本来三段積みの側壁であったことが知れる。側壁の構築と墳丘の構成との関係は東トレントの所見と基本的に同様であるが、墳丘基盤たる地山面に整形がなされていないこと、側壁石材が三段積みであること等の点で若干の差異が認められる。

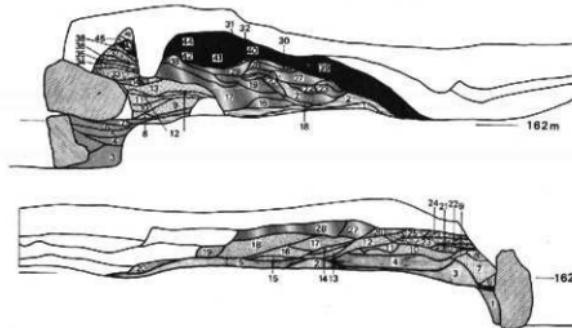
墳丘の盛土は、まず、側壁最下段石材後方に巾1m程の空所を残して1～3（図18-西トレント断面図上層番号、以下同じ）の盛土がなされている。この3層は最厚60cm程であるが、その高さは下段石材の高さに等しい。次いで石材後方の空所に4・5の土砂が充填されている。1～3の3層は東トレントにおける自然傾斜面の石室部分における段落の役割を負わせているものと思われる。

下段石材後方の固めのための盛土が4・5であるが、この土層は巾約1.9m程、最厚70cm程有り、下段石材の高さより30cm程高かくしている。また、中段石材後方に当る巾60cm程の部分では石室内側に向って漸次厚さを減じ、側壁に接する部分で、ほぼ下段石材の高さと等しくしている。従って、中段石材後方に巾60cm程の凹所が形成される。この凹所に6～8の3層を約70cmの厚さに充填して中段石材の後方固めとしている。この石材後方を固めるため凹所を設ける盛土法は東トレントでは、下段石材部分の自然傾斜面の段落がそれに当るが上段石材後方の盛土では認められないものである。

1～3層の上方には9～22の墳丘附近まで及ぶ盛土がある。巾5.3m、厚さ70cmにわたるものであるが、高さについては1～3の3層よりわずかに高い程度であり、墳丘を高かくするものであるとともに、石室側壁の中段石材の運搬も考慮した盛土であろう。従って、この盛土は中段石材後方の6～7の盛土に先行してなされたものと考えられる。

9～22と4～8との間に23～29の土層がみられる。高さは中段石材とほぼ等しい程度であるが、石材後面まで及んでおらず、巾70cm、深さ20cm程の凹所をつくっている。この凹所に30・31の盛土がある。一部中段石材の後方にかかるが、大半は中段石材以上にあり、やはり、上段石材後方の固めの盛土である。

32～34は東トレントの39～44に当るものと思われる。35は墳丘途中で消失しているが、東トレントから見る限り、32～34と同一段階、すなわち、墳形を形成すべき東トレントの39～44の盛土の段階にあたるものと思われる。



### III) 北トレント

墳丘基盤の自然傾斜面の整形は認められない。石室を構築すべき部分では、東トレント同様約90cmの深さに掘り込み、段落を設けている。北トレントは石室の奥壁に対して直交するトレントであるが、奥壁石材に一枚石が使用され、その規模は側壁に対して1.5~2倍の高さを有している。この石材の大きさのためか、石材後方の固めの盛土に、東・西両トレントで認められなかった2回にわたる盛上がりがなされている。まず、東トレント同様に、石材後方の段落内に生じた空所に土砂(図18-北トレント断面土層図の1、以下土層番号のみ記す)が充填される。奥壁石材の高さは1.3m程度あるため、空所への土砂の充填は石材の2分の1程にしか達していない。石材上半分に対しては、西トレントにおける下段石材に対する盛土法をとっている。すなわち、石材上半分後方に巾70cm、深さ40cm程度の空所を残して、墳丘裾部に対する2~5の盛土を行ない、次いで、空所に6~7の土砂を充填して奥壁石材上半分後方を固めているのである。

奥壁は石室高から判断して、下段石材の上方にはもう一段の積み上げがあったと考えられる。このことは、巾1.5m、厚さ30cmにわたる21~25の盛土の遺存からも、奥壁が石材の二段積みで構成されていたことが知れる。この場合も10~20の土砂を奥壁下段石材の高さ程に置き、上段石材の運搬を考慮している。

これら土層の上方に26~28の3層にわたる盛土の遺存をみたが、これは東トレントの39~44、西トレントの32~34に対応し、天井石上面を除く墳丘形成時の盛土と考えられる。しかし、北トレントの場合、この盛土は墳丘裾部を形成しない。

## 2) 主体部(図19)

主体部は南面する入口を持つ両幅の横穴式石室である。墳丘のN-Sの中心線に対し、それにほぼ接して東側に構築されている。また、自然傾斜面に対して約40度ほどのかたむきを持つ。

### I) 石室規模

石室床面における内法規格は、全長7.68m、玄室長3.84mを計り、玄室と羨道の長さはほぼ等しい。玄室巾は奥壁に接する部分で1.28m、中央で1.56m、玄門部で1.44を計る。羨道は玄室に接する部分で1.18mを計る。東側壁が一部破壊されていて入口の巾は不明だが、西側壁が遺存しており、復原すると1.44mを計る。

なお、羨道は、西側壁で、4石までが直線的に配列され、これより外方で弧状の列石が遺存している。羨道長は側壁が直線的に広く4石目までの計測値である。弧状列石までを含めると5.32mを計る。

石室の高さは天井石が完存していないため明らかでないが、玄室に遺存していた天井石の状況より、玄室で約1.8mを計ることができる。羨道については明らかでないが、東側壁で二段積みの部分が遺存していたが、墳丘の状況、玄室との対比から、この高さで羨道の高さとでき、約1.45mを計る。

### II) 床面

礎敷き、間仕切り、排水溝等の施設は検出できなかった。すでに盗掘を受けているが、本来なかったようである。

床面は自然傾斜面を東トレントで約80cm、西トレントで26cm、北トレントで約90cmの深さに掘り込んで形成されたものである。ほぼ水平であるが、わずかに1.5度程入口に向って傾斜している。入口外方では床面レベル以下の自然傾斜面が不整形に残されており、従って、急角度で傾斜している。

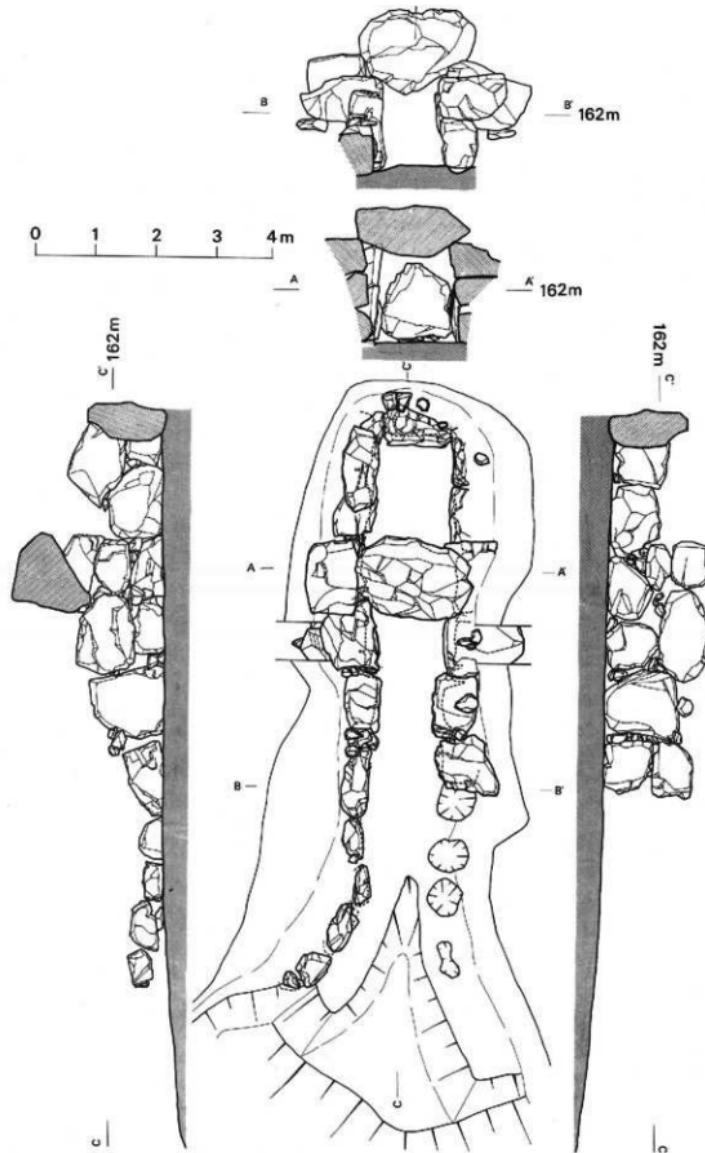


図19 上ノ山1号墳石室実測図

### III) 玄室

各側壁の下部は完存し、東西両側壁において、一部に最上部までの完存を見た。また、この完存部分で、ずれてはいるが、天井石が遺存していた。

奥壁は最下段に扁平な大型石材を使用している。

側壁は東西両壁とも下段に4石を用い、2～3段積みで構築している。下段は、概して長方体の石材を用い、横位に置いている。石材相互の重なり具合等から判断すると、まず、奥壁を両側からはさみ込むように置き、次いで、一石分をあけて置かれる。このあと、空所に石材を置いて玄室の輪郭を完成している。石材の規模は、東側壁ではほぼ大同小異で、高さは奥壁のほぼ3分の2程度のものを用いている。西側壁では、奥壁石材の2分の1程の高さの石材3個と、これらの倍近い大形石1個を使用している。

側壁の上方部については、部分的に二段積み、あるいは三段積みと異なる。東側壁では、羨道側の下段二石の上方に大型石一石を置き、羨道側より二石目と三石目との間に小型石を二段に積み上げている。西側壁では、羨道側の下段二石の各々の直上に二段ずつ積み上げ、最奥部のものは下段の二石にまたがって大型石が置かれている。側壁の上方部石材設置順序については、西側壁において、下段同様、最奥部より一石分の空所を残して二段目石材が置かれ、次いでその空所をつめるといつて方法がとられているようである。三段目については、二段目石材の規模に応じて三段目石材を要する部分にのみ設置される。東側壁については明瞭でないが、同様の方法をとっているものと思われる。

なお、東西両側壁ともほぼ垂直積みで、また、石材相互の空所には詰め石を行なってその安定を図っている。

### IV) 羨道

玄門石は東西両側壁ともほぼ同規模の石材を用い、玄室の下段石材設置後に置いている。玄門石以外の側壁石材は、西側壁では、最下段のみ遺存していたが、長方体の石材を横位に置き、入口に向って規模を小さくしている。東側壁では玄門石に隣接する部分のみ、二段積みの状態で遺存していた。

### V) 天井石

玄室で一石のみ遺存していた。入口側に傾むき、また、西側壁からずり落ちた状況にあった。石室内面が平坦で、横断面三角形状を呈している。

### 3) 遺物（図20）

すでに盗掘に会っており、出土遺物の大半は石室外の弧状列石前方部の埋土中よりのものである。石室内からは、原位置を保っていなかったが、常金具と让金具の残欠の出土を見た。

#### I) 頸窓器

壺（1～5、10） 口縁部のみが3点ある。1は直線的に開き、端部をS字状に屈曲させている。中程に一条の凹線が施されている。2も直線的に開き、端部で屈曲させている。上半部に二条の凹線を施している。3は外弯して開く。等間隔に三条の凹線がみえ、その間に桶状工具による波状文と刺突文を施している。

4、5は壺の底部及び胴部である。5は外底面をヘラ調整している。

10は小型広口壺で、口縁部は短かく直線的で、わずかに開く。胴上方部で最大径を取る。

なお、器高48cm、胴部最大径41.5cmの大形壺（図版三十七）が1点出土している。

杯（7～9） 7は蓋で、口縁部と天井部の境界を押えて凹め、一応の区別がみられる。天井部は丸いが、最上部は粗くヘラ調整して平担になっている。

8、9は杯身で、受部の立ち上りはともに短かく内傾している。受け部の端部はわずかに上方に向き、短かく外方へのびる。

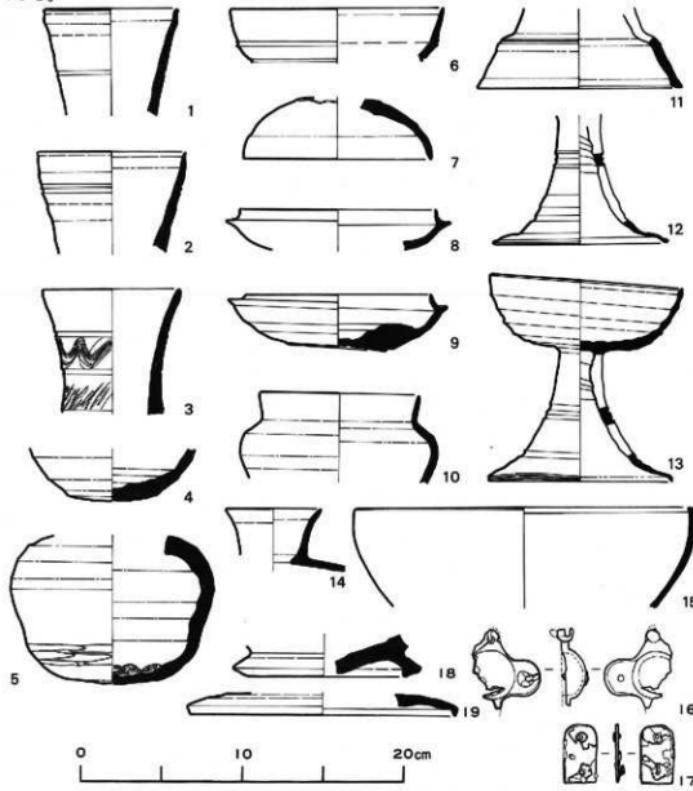


図20 上ノ山1号墳、2号墳出土遺物（1～17は1号墳、18、19は2号墳）

高杯（6、11～13） 6は杯部。直線的に開く口縁部を持ち、底部との境界を帯状に凸線をめぐらして区別している。また底部との境界附近に一条の凹線を見る。

11は脚部で、筒部と裾部との間で大きく屈曲させている。裾端部は平担で左右に肥厚している。筒部に長方形の透しを持つ。12は長方形の二段透しを持つ脚部。透しの間に二条、筒部の下方部に1条の凹線を見る。裾部は水平近くまで開く。この脚部の形態は13も同様であるが、13の場合、裾部端面に一条の凹線が施されている。杯

部は底部より内寄気味に聞く。口縁部と体部との境界は明瞭でない。口縁端部は内外両面からへらで削っている。

平瓶 (11) 内寄気味に聞く口縁部を持ち、体部は水平近くに平いている。平瓶の可能性の強いものである。

鉢 (15) 薄手で、仕上りは丁寧である。口縁部は外寄し、体部最大径より小さくなる。口縁端部は平粗で、内方に肥厚させている。

## II) 馬 具 (16・17)

辻金具と帶金具である。辻金具<sup>(16)</sup>は径3cmの無文の半球体に、四方に脚をつけたものである。3分の1程の残欠で、脚に一本ずつの鉢を残す。鉄地金銅張りである。帶金具<sup>(17)</sup>は長さ3.6cm、巾2cmの鉄地金銅張り製で、両端に各1個ずつの鉢を残す。

## III) 繩 文 式 土 器

墳丘の封土中による破片が2点出土した。小片で形状は不明。

# 5. 上ノ山2号墳(図17)

2号墳は1号墳の西方約8mのところに位置する。調査前では墳丘はわずかな盛り上りを残すのみで、主体部と思われた部分も大規模な被掘壙があった。今回の調査においても、墳丘の上半部は失なわれ、主体部も横穴式石室の石材の抜き跡を検出し得たにすぎない。

## 1) 墳 丘 (図21)

墳丘の北・東・西の三方にトレンチを設定し、その断面土層を観察した。その結果、墳丘は40~60cmの厚さで遺存していたにすぎなかった。しかし、墳丘裾部の遺存から墳丘径11.5mの円墳であることが知れた。

## I) 東トレンチ

厚さ約60cm、9層の遺存。自然傾斜面の整形は、トレンチ部分でほぼ水平であるため、なされていない。石室を構築すべき部分で約20cm程度掘り込み、段落を設けている。

墳丘は、まず、石室側より巾約2.5mにわたって、厚さ約20cm程盛り上げている(図21-東トレンチ土層断面)

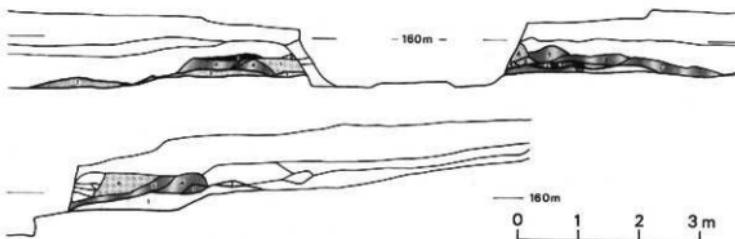


図21 上ノ山2号墳墳丘断面実測図

図の土層番号1～3、以下土層番号のみ記す)。次いで、巾約0.5m、厚さ約40cmの3層(4～6)にわたる盛土が見られる。ここまで土層は、1～3の厚さと段落の深さをプラスしたものが約40cm、4～6の厚さが約40cmで、4～6が石室石材後方を固める場合の通有の盛土方法であること、後述する石室石材の平面規模等からして、1～3までが石室最下段石材の高さに、また、4～6が二段目石材の高さに対応するものと思われる。

このうち、墳丘外方より順次、7～9の盛土があり、7が墳丘裾部を形成するとともに、全体として、二段目石材の高さ近くまで墳丘を盛り上げている。以上の墳丘については遺存を見ない。

## II) 西トレント

墳丘の外方約2分の1程は最下層の一層を残すのみで、欠失の度合いがはげしい。

自然傾斜の整形は東トレントと同様、石室を構築すべき部分で約20cm程の段落を設けている。

墳丘は石室側2分の1程の範囲で、厚さ約10cm程の盛土(1、3)があり、次いで、石室側に巾約80cm程を残して、厚さ約30cm程の三層(4～6)の盛土を行い、空所に新たな土砂を充填(?)している。

以上の状況からして、段落と1、3までは石室最下段石材に、7は二段目石材に対応するものと思われる。

なお、墳丘外側約2分の1程の範囲に、厚さ約20cm程の盛土が一層(2)のみ遺存していたが、墳丘裾部はこの2の外端部に求めた。

## III) 北トレント

ここでは、石室を構築すべき部分に、深さ約30cmの段落が設けられている他、段落より墳丘外方に向って巾約2m、深さ約30cmにわたる範囲で自然傾斜面の整形が認められる。

墳丘は、この整形部分を覆って、厚さ約30cmの盛土がある(1、2)。次いで、3～6の盛土が厚さ約40cm程なされる。北トレントの場合、石室の奥壁の後方に当るが、石室後方部分の欠失がはげしく、石室石材との関連は明瞭でない。ただ、1、2が最下段石材に対応する盛土であろうことは推察される。

なお、石室床面より遺存盛土の上端までは約1.05mあり、東・西トレント部分が60～70cmであるのに対し40～30cm程高い。従って、東西両トレント部分では、少なくとも三段の石材の積み上げがあったと考えられる。また、北トレントでは、東西両トレントの二段目石材に対応する高さは、ほぼ、5の高さであり、5が通有の石材後方固めの盛土と異なるところから、石室奥壁最下段の石材には、石室東西両側壁の二段分程の大型石材を使用したものと思われる。

## 2) 主 体 部 (図22)

主体部は大きく擾乱を受けていたが、擾乱層床面で石材の抜き取り壙を検出し、横穴式石室を有していたことが知れた。

石材の抜取り壙は奥壁で2壙、東壁で9壙、西壁で7壙を確認した。東壁のものはほぼ連続していて、長径(南北長)60cm前後、短径(東西長)60～30cm。西壁では奥壁より5壙が連続していて、長径50～90cm、短径35～55cmを計る。奥壁のものは長径(東西長)45cm、短径(南北長)20～30cmではほぼ同規模である。石材の高さについては、墳丘の土層よりして、奥壁で2段以上、東・西両壁で3段分の高さが1.05mと考えられ、各々およそ40cm前後と推察される。従って、石材の規模は、長さ60cm前後、巾、高さとも40cm前後の比較的小規模な石材を使用していたものと思われる。

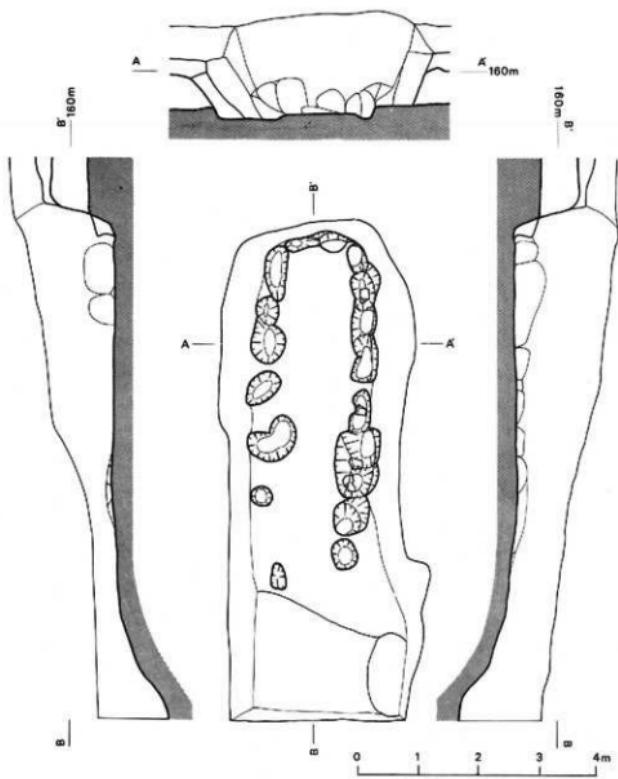


図22 上ノ山2号墳石室実測図

抜き取り塙の内法規格については、東西両壁の奥壁より四塙目までがほぼ直線的に並び、東西両壁の横の内端巾が約1.1m前後である。五塙目では、東西とも内方に寄って狭くなり、約0.7mを計る。六、七塙目は、西壁では連続しないが、東壁では五塙目に連続して一直線に並ぶ。長さは、東壁の一～八塙までが5.2m、一塙から四塙までが約3m、西壁の一塙から七塙までが5.5m、一～五塙までが3.4mを計る。

被掘壙床面は東壁の一～八塙目まではほぼ水平で、以降南方に向ってゆるかに傾斜し、八塙目より南方1m程のところから急角度に傾斜して、自然傾斜面に移行している。

以上の状況よりして、東壁の八塙目までが「石室東側壁」の位置を示すものであり、西壁の七塙目は床面の傾斜部に位置していることから、石室とは関係がないと思われる。また床面はその傾斜状態よりして、石室床面を遺存させているものと思われる。従って、石室は床面の水平部分、東壁抜き取り穴の八塙目までで、全長約5.2mの規

模とすることができる。

玄室と羨道の区分については、東西両壁とも五壇目が内方に寄っており、東壁の五壇目以降が一列に並ぶところから、一～四壇目までが玄室、以南部が羨道に当るものといえよう。又、五壇目の東西両壁とも内方に寄るところから両幅を有すると考えられる。従って玄室長約3m、巾約1.1m、羨道長約2.2m、巾0.7m、入口巾は不明ととどまることができる。

### 3) 遺物(図20)

出土遺物はすべて埋上中のもので、須恵器破片2点のみである。

杯蓋<sup>18</sup> 口縁部にかえりを持たず、端部を下方に折り曲げただけのもの。口縁端部の横断面は三角形状を呈し、天井部は水平で、口縁部との境界はわずかに屈曲している程度で、明瞭でない。器高1.5cm程で扁平である。

台付壺<sup>19</sup> 壺の高台部と思われるもの。外方に大きく踏んばった高台は、その端部で大きく内方に肥厚させている。貼り付高台である。

## おわりに

今回調査を実施したのは、7基の円墳より構成された上ノ山古墳群のうち、東端に位置する第1号墳及び第2号墳の2基である。まず、両墳の築造年代であるが、両墳とも盗掘の憂き目に会っており、直接年代を決定する資料を欠いている。1号墳では、羨道入口附近で、辻金具と帶金具の残片の出土を見たが、もとより原位置を保持したものではない。ただ、羨道入口の西側、弧状列石の前方部で、埋土中より須恵器及び土師器の出土を見ており、年代を考える上に間接資料となり得る。遺物は須恵器の杯身、蓋、高杯、壺、平瓶、鉢、大型壺、土師器の甕あるいは壺の破片である。杯身は外底面の粗いヘラ調整と全体的に扁平な形態、口縁部が短く内傾して立ち上り、水平からやや上方に短くかくのびる受部を持つ。蓋は天井部に丸味があり、口縁部との境界は調整の違い程度で明瞭でない。高杯は杯部、脚部とも二形態があるが、一つは外弯気味に開き、裾部で大きく屈曲させた二段透しを持つ脚部と壺形の杯部を持つものであり、他は筒部と裾部の境界で二段に屈曲させた脚部を持つものである。これら杯及び高杯の形態は大阪府陶邑古窯跡のものと比較するとTK109及びTK217の特徴を持ち、高杯はTK109に、杯はTK217に近い形態といえる。

小型広口壺及び鉢について、陶邑のTK217及びMT21の須恵器杯身を共存するもので比較すると、広口壺は肩部が明瞭な稜を取り口縁部は短く内傾して、端部に面を取っている。鉢は最大径が全体の3分の1上方にある。これに対し、当古墳の場合、広口壺は最大径の位置は同じであるが肩部は丸味を持ち、口縁部は直線的である。鉢は口縁径と胴部最大径がほぼ等しく、口縁端部は面を取り、内方に肥厚する。これらにより、当古墳出土の広口壺及び鉢はTK217及びMT21より古式の特徴を持つといえる。

以上の杯、高杯、広口壺、鉢等の形態は陶邑古窯跡においてはⅡ期末、6世紀末葉の一時期のものと考えられる。他に大型壺、壺等の出土を見ているが、ほぼ同様の時期のものと考えて大過なかろう。従って、弧状列石前方部埋土中の出土品は6世紀末葉の一時期のものであり、当古墳の築造年代についても、それに近いものと考えられる。

2号墳は、被掘壞の埋土中より須恵器杯蓋と壺の高台かと思われるものの2点を出土したにすぎない。杯蓋は口縁部の残欠で、端部に折り曲げただけのものである。高台部は踏んぱりが大きく、端部を内方へ肥厚させてい

上山古墳群	西城古墳群	鐵嶺古墳群	鞍山古墳群	黃海手塚古墳	渤海手塚古墳
1 7号墳					
II		1号			
III			1号	1号	
IV				1号	
V				1号	
VI				1号	
VII			1号	1号	
VIII				2号	
IX					3号

图23 海北地区出土的器物组合示意图

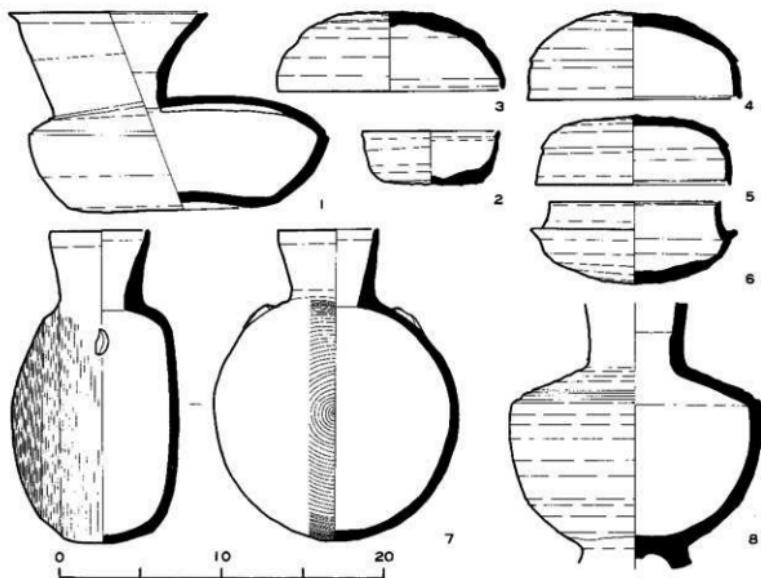


図24 上ノ山古墳群周辺遺跡出土遺物実測図(平野市介氏蔵)(1、2、藏方遺跡、3~6、上ノ山7号墳、7、8、北畠古墳)

る。およそ、奈良時代前半のものであろう。

以上、1号墳、2号墳の年代について、1号墳は6世紀末葉に比定できるが、2号墳からは奈良時代遺物の出土を見ており、その使用下限を示すにすぎない。しかし、およそ、その石室規模等よりして、1号墳より新しいと考えられるが、奈良時代の築造になるとは考えられず、7世紀の前半代に置くのが體当であろう。

次に、上ノ山古墳群の群形成の様相について触れ、その問題について若干の考察を加えたい。古墳群は調査時点では6基が遺存していたのであるが、地元の平野市介氏の御教示により、6基の北側で、さらに、1基の存在していたことが知れ、当古墳群は、本来、7基から構成されていたことが明らかになった。古墳群中1~3号墳については、主体部に横穴式石室を持ち、特に、今回調査した1号墳及び2号墳は6世紀末葉~7世紀前半の築造になるものと考えられた。3号墳についても、およそこの間にに入るものと思われる。しかるに、平野氏御教示の消滅墳(7号墳)については、開墾により破壊した時点では石材等の出土を見なかったとのことであり、直葬墳であった可能性が非常に強い。その際に出土した遺物は須恵器杯身・蓋、鐵刀等で、そのうち、須恵器は平野氏の保管になる。杯身(図24-6)は1点あり、口縁部径10.7cm、器高5.2cmで比較的小型である。形態は、やや内傾気味であるが、長い立ち上りを持ち、端部は内側に傾斜させ、段を持つ。受部はやや上方に短かくのび、端部は丸く仕上げている。底部はヘラ削りが約3分の2に及んでいる。蓋は2点あり、一つは身とセットをなすもの(図24-5)で、口縁部径12.1cm、器高4.3cm、天井部はやや扁平である。天井部と口縁部を分ける稜は突出し

ない。他（図24-4）は口縁部径13.3cmで大型化の傾向にあり、器高は5.5cmあって、天井部は丸い。口縁端部は内側に傾斜し、浅い凹みを持つ。これらは、陶邑古窯跡ではTK47型式の特徴を多く持ちながら、MT15型式にも近似するもので、両者の過渡的な様相を示す。いわゆるⅠ期末～Ⅱ期初当に当るもので、およそ6世紀前葉に比定できるであろう。

このように、消滅した7号墳は6世紀前葉にさかのぼり、当古墳群形成初期のものといえる。しかも、主体部に横穴式石室を持たず、直葬墳であった可能性が極めて強いものである。従って、当古墳群は6世紀前葉～7世紀前葉の間に7基の古墳が築成され、その初期段階では直葬墳の形態を取る。横穴式石室の導入は、6世紀中頃階については不明であるが、おそらくとも1号墳の6世紀末葉に下り、以降、2号墳、3号墳と少なくとも2基が継続的に築成されている。すなわち、当古墳群に限ってみると、群形成初期には単次葬、後半で復次葬の形態を取るとることができ、その変化は6世紀後半とし得る。

湖北において、後期古墳群の調査例は極めて少ないが、近時調査された二・三の資料により、上述の上ノ山古墳群に見る様相に関して、若干の問題点を指摘してみたい（以下図23を参照）。

さて、湖北において、古式の須恵器を出土する横穴式石室としては、まず、湖北町河毛の四郷崎古墳がある。当古墳は長方形の玄室の長辺に狭道が取り付くタイプの横穴式石室を有するものである。副葬品に多量の須恵器が出土したが、それらは形態上3類に区分でき、各々時期差を持つことが明らかである。特に杯の身について見ると、Ⅰ類は立ち上り端部を内側に傾斜させ、浅く回ませる。受部はほぼ水平に短かくのびる。Ⅱ類では立ち上がりがⅠ類より短かく、また、内傾度が若干大きい。端部は丸く仕上げて面を取らない。Ⅲ類に当る杯身はないが、有蓋高杯の杯部の形態では、立ち上りは短かく、内傾度は一層強い。底部はヘラ削り巾が小さく、とがり気味である。これらの特徴からⅠ類→Ⅲ類へと年代が新しくなることが指摘できよう。陶邑古窯跡で比較すると、Ⅰ類は口縁部径12.5～13.5cmと大型化しており、MT15に近似する。Ⅱ類は立ち上り端部に面を取らなくなっているところからTK10に、Ⅲ類はおよそTK43あるいはTK209に比定でき、およそⅡ期の初当～後葉の間にに入る。このように、四郷崎古墳は最古のⅠ類土器の時期に築造され、Ⅲ類土器の副葬まで少なくとも三世代の使用がうかがえる。Ⅰ類土器について上ノ山7号墳出土の杯身に比較すると、7号墳のものはまだ大型化しておらず、四郷崎古墳のものが後出といえる。

四郷崎古墳の石室は長方形の玄室の長辺に狭道の取り付く古式の横穴式石室であるが、近似するものに米原町磯の磯山に所在する磯崎古墳群中の2号墳がある。2号墳は玄室が正方形プランで両幅を持って狭道が付く横穴式石室である。当古墳出土の遺物については明瞭でないが、古墳群より出土したものとして磯崎神社及び地元磯崎文五郎氏の保管になる須恵器類がある。新旧混在し、またいざれの古墳から出土したか明瞭でないが、これらのうち最古式と思われるものを見ると、杯身では、口縁部径13cmあって大型であり、立ち上りは内傾が強く、受部は上方に短かくのびる。底部のヘラ削りは2分の1程度で、ややとがり気味である。これは四郷崎古墳出土須恵器でⅡ類としたものに比べると立ち上りの内傾度は一層大きく、底部がとがり気味で整形も粗雑であって、やや新しい要素を持つ。Ⅲ類のものよりも古く、陶邑古窯跡においてはTK10～TK43に当るものといえる。

これらの他に長浜市茶臼山古墳附近出土と伝えるものや近江町山津照神社古墳出土と伝えるものの中に、上ノ山7号墳出土と同時期と考えられる古式の須恵器が出土しているが、前者については当該古墳が不明である。

以上の一・二の例であるが、横穴式石室を伴うもので出土した須恵器を比較した場合、上ノ山7号墳出土の杯類より新しく、従って、現在のところ、湖北における横穴式石室の初現は四郷崎古墳であって、6世紀初当にさかのぼらない。

このように、湖北においては、横穴式石室は四郷崎古墳以降磯崎2号墳に見るように間断なく採用され、6世紀後葉に入ると、上ノ山1号墳をはじめ、調査された例では、近江町額戸黄牛塚古墳、長浜市小一条諸頭山古墳群、中山古墳、布勢古墳、米原町石瀬山古墳群等その數量を増して築造され、諸頭山3号墳や上ノ山2号墳のように軒窓式小石室の形態、あるいは規模を小さくした横穴式石室を採用するなどして7世紀前葉で消滅の方向に向う。横穴式石室はこうした消長の傾向を持つと考えられるのであるが、大和朝廷が在地の共同体を解体することなくその支配体制の中に組み入れていくための施策の顕現として考えられている古墳時代後期の群集墳の形成に対しては、こうした横穴式石室の消長の傾向とは、特にその初期の段階において若干の差があるようと思われる。たとえば、上ノ山古墳群においては、群の形成が6世紀初当にまでさかのぼるが、横穴式石室の導入は1号墳の6世紀後葉を待たねばならない。すなわち、群形成の初期段階では単次葬たる直葬の形態を取り、6世紀後葉に至って横穴式石室を採用して複次葬を可能たらしめているのである。

現在のところ最古の横穴式石室を有する四郷崎古墳の場合6世紀前葉にさかのぼり、上ノ山7号墳に近い時期に複次葬の形態を取っている。しかし、当古墳は虎御前山の北端に築造された単独墳であり、以降の続続は認められない。一方、磯崎古墳群は、知り得る限り2号墳が最古形式の石室を持ち、附近よりの出土遺物からしても6世紀中葉をさかのぼらない。附近出土遺物には7世紀初当までのものが見られ、また、磯崎氏によれば、いずれも横穴式石室からの出土であり、2号墳築造以降、7世紀初当まで継続して横穴式石室を採用していった古墳群であると/orすることができ、四郷崎古墳の場合と様相を異にする。

以上のように、横穴式石室の採用と群形成とのからみにおいて、湖北の後期古墳群にいくつかのタイプがあることが知れる。一つは、上ノ山古墳群のように、群形成が6世紀初当までさかのぼり、その初期段階で単次葬の形態を取り、6世紀後葉に至って横穴式石室を採用して複次葬を可能にしたもの、二つは、四郷崎古墳で、6世紀前葉に早くも複次葬のできる横穴式石室を採用するが、単独で群を形成しないもの、三つは、磯崎古墳群例でみると、横穴式石室の採用と群形成の段階が軸を一にし、以降、継続して横穴式石室を築造していくもの、四つ目は、三つ目と同様であるが、群の形成が6世紀後葉まで下るもの、である。この中で四つ目のタイプが最も一般的で、一つ目及び二つ目にも群形成の後半のものを取り上げれば四つ目のタイプに入る。

さて、これら各タイプで特にここで注意したいのは一つ目及び二つ目のタイプである。一つ目の上ノ山古墳群については、6世紀中葉の時点で単次葬から複次葬へと埋葬形態の変化のあったことが知れる。二つ目の四郷崎古墳については、最も早く横穴式石室を採用しながらも継続して古墳を築造していない。副用品から見る限り、当古墳の石室は三世代で6世紀後葉までの使用が認められる。古墳群が一般化する段階で使用が中止されているのである。このように見てみると四郷崎古墳の場合、6世紀後葉より一般化する横穴式石室と性格を異なる可能性もでてくる。すなわち、上ノ山古墳群の場合、横穴式石室を採用するまでの間は単次葬の直葬墓を順次形成していたと考えられるのであるが、その時期は1号墳の築成まで、6世紀の後葉までとし得る可能性が強い。一方四郷崎古墳はその使用が三世代で6世紀前葉から後葉の間で、上ノ山古墳群の1号墳築成までの時期に相当する。従って、四郷崎古墳の場合、早い段階で複次葬の可能な横穴式石室を採用したが、それは、上ノ山古墳群のように、世代変りごとに新たに直葬墓を築成せず、同一石室を再利用していったのではないか。四郷崎古墳が6世紀後葉以降にも古墳を築造せず、また、附近にいくつかの古墳群が認められることからも、一般的な後期古墳の横穴式石室と性格の異なるものである可能性が非常に強い。

このように、後期群集墳の中には、いわゆる家族墓的性格を持たないものがある。上ノ山古墳群のように直葬墓を順次築成する場合と四郷崎古墳のように横穴式石室を採用し、新たに墳墓をつくらないものとの差異がみら

れるが、いずれも6世紀初当～前葉までさかのばるものである。群形成初期より横穴式石室を採用している場合は、磯崎古墳群が最も古いと思われるが、6世紀中葉に下る。6世紀後葉以降に群形成初期の段階を持つ多数の後期古墳群はいずれも横穴式石室を採用しているのである。すなわち、6世紀中葉の段階で、後期古墳群の性格が単次葬から複次葬へと変化していく過程が考えられるのである。このような変化は、単に横穴式石室の一般化に対応するだけのものとは考えられず、むしろ、6世紀中葉を境にして、群集墳形成に横穴式石室を必要とする何等かの契機があったのではないか。古墳の量的増加がやはりこの時点を境にしていることもみのがせない。群集墳の形成が没共同体的な家族の独立を意味すると考えられるが、その家族の支配体制下への把握の方法がこの時点で変化していったのではないか。湖北の群集墳の最盛期は6世紀後半と/orすることができ、群集墳成立の前提が共同体の階層分化であることには異論はないが、その場合、上ノ山古墳群のように6世紀前葉にその形成初期があり、かつ、形成初期のものが単次葬の形態をとっているのであり、6世紀中葉を境にして、古墳に葬られた階層がより下位に及んでいったと考えざるを得ない。

以上、今後考究すべき問題であるが、特に湖北において、後期群集墳の盛期は6世紀後半にあるが、その形成初期が、6世紀前半にさかのばるもののが存在し、かつ、単次葬という形態を取る可能性があることが指摘できる。群集墳の成立が共同体の階層分化を反映したものであると考えた場合、6世紀中葉を境にした群集墳の有り方の差異は、その分化過程、延いては、大和朝廷の在地共同体の支配体制の変化過程を知るに重要な問題となろう。

(田中勝弘)

## 第4章 大東遺跡

### 1. 方形周溝墓（図25）

既に報ぜられたごとく（『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ）、大東遺跡第2次発掘調査において、方形周溝墓と推定される方形周溝遺構2基が検出された。

2基とも建築跡T1とT5の中間点地付近に、約6mの間隔をあけて平行して掘込まれていた。1号方形周溝墓HS1は一辺約7mの南東部にいわゆる陸橋部の見られるものである。残存規模を示せば、南北の最大幅9m、東西の最大幅8.6mであり、内側台状部では、南北幅7m、東西幅6.9mを測り、ほぼ正方形プランと見てよいものである。なお、周溝は最小幅0.5m、最大幅1.5mを測るが、東辺及び北辺が比較的幅が広く、南辺東端陸橋部はもっとも狭くなっている。溝の深さも均一でなく、概して東辺・北辺が深くなっているが、深いところでも30cmを測ることはなかった。また、内側台状部に土体部と考えられる遺構は存在しなかった。

2号方形周溝墓HS2は、東半部が未発掘のため、全容を明らかに出来なかつたが、検出部分での規模は、南北最大幅11.7m、内側台状部では8.8mの幅を有し、HS1に比べひとまわり大きい周溝墓であろうと考えられる。溝幅は最大2m最少1.2mを測り、深さは最大60cmを測るが、凹凸があり、北辺から西辺までが一段深く、西辺南半から南辺が浅い。西辺周溝内堆積土上層及び下層より弥生式土器が出上したが、特に菱形土器B、Cは、溝底に密着して出土した保存度のよいもので、流入物としての可能性が低く、当周溝墓の築成時期を示すものと考えられる。またHS2の周溝断面からすれば、早い時期に周溝を埋めたような形跡は見えず、周溝は序々に埋没したものと考えられる。なお、両基の肩部や台状部に多くのピットや溝状遺構が掘込まれていたが、いずれも後代のものと考えられるのである。

時期差が土器上から指摘されよう。すなわち、HS1西辺の周溝出土の小型菱形土器他一点は弥生後期終末に比定されるに対し、HS2の出土遺物にはこれより古い型式のものが見られ、若干先行する時代のものと考えられる。

（別所健二）

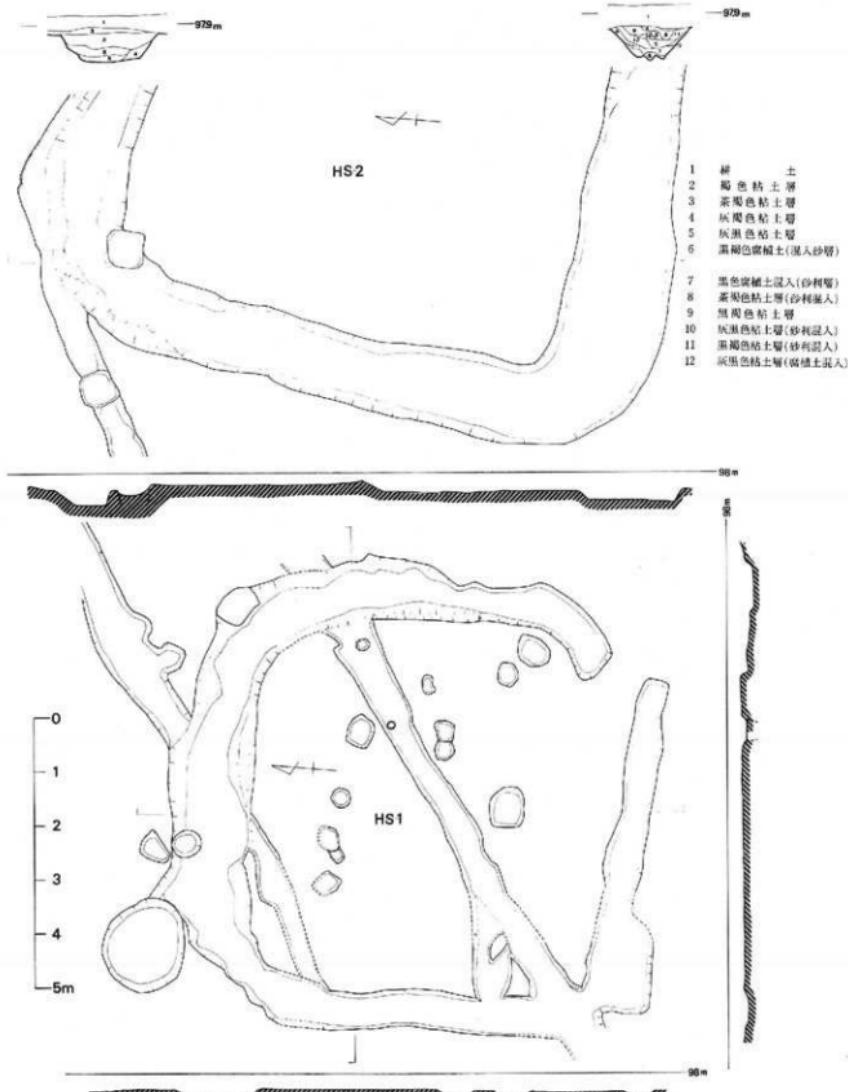


図25 大東遺跡方形周溝墓実測図

## 2. 遺物

### 1) 第1号方形周溝墓出土遺物(図26)

壺形土器(2) 細頸小型壺形土器で、器高13.3cm。直線的に開く口縁部と横に張った胴部を持つ。胴部最大径は中位にあり、器高とほぼ同じである。底部は下方に突出し、高台風に周縁が高い。口縁部から底部までほぼ全面に刷毛目による調整がなされているが、口縁端部附近と頸部上方はヨコナデされ、底部は指による圧痕を見る。胎土は細かく、焼き上りは硬質である。第1号方形周溝墓の西辺溝内よりの出土である。

壺型土器(1) 頸部の弯曲部よりさらに口縁部を外開きを残して内に屈曲させていわゆるS字状の口縁部を持つ。屈曲した口縁外面に竪によるクサビ形の刺突文をめぐらしている。胴部の張り具合は欠失していて不明だが、肩部上端に櫛状工具による6条の条痕をめぐらし、さらにその下方に、口縁部と同様のクサビ形刺突文をめぐらしている。胎土に砂粒が多い。

### 2) 第2号方形周溝墓出土遺物(図27)

壺型土器A(6) 「く」の字形に屈曲した厚手の口縁部で、直線的に短かく開く。刷毛でヨコナデしたあと、下半に指痕を残している。胴部は、下半については不明だが、球体に近い形状をなすものと思われる。胎土に砂粒が目立つ。

壺型土器B(5) 横によく張った胴部と小さな円底を持つもので、細長い筒形の口縁部をもつ形態であろう。内面に胴部と底部との接合痕を残し、接合部より上方外面を刷毛目、下部を竪で調整している。砂粒の多い胎土で、赤褐色を呈している。

壺型土器A(4) 短かく、大きく外方へ弯曲した口縁部を持つ。胴部に張りがなく、口縁部よりわずかに大きい程度で、細長い器形である。口縁部は平坦にしている。

壺型土器B(8) 脚台を有するもの。口縁部は、短く頸部より屈曲して開き、端部をわずかに上下に肥厚させている。胴部は中位に最大径を有し、球体に近いが、下半部がやや細長い。脚台は器高31.3cmに対し5cm程で小さい。ハの字形に直線的に開き、端部を内側に肥厚させている。器面全体に刷毛目調整を施しているが、肩部上端をヨコナデし、脚台の接合部に指痕を見る。内面は削り出している。

壺型土器C(7) 壺型土器Bと近似しているが、脚台を持たない。口縁部は「く」の字形に屈曲し、端部に櫛状工具による刺突文を施している。胴部の最大径が中位よりや上方にあり、壺型土器Bより細長い。底部は平底で、ヘラ磨きをしている。口縁部より底部まで全面に刷毛目調整痕を残す。内面は口縁部を残して刷毛目調整を施している。胎土に砂粒が多く、仕上りは硬質で良好である。

器台型土器(1~3) 3点出土しているが、いずれも同一タイプである。外弯して開く脚台部に直線的に開く

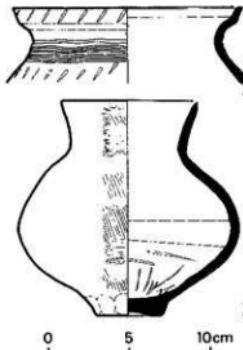


図26 大東塚跡1号方形周溝墓出土遺物実測図

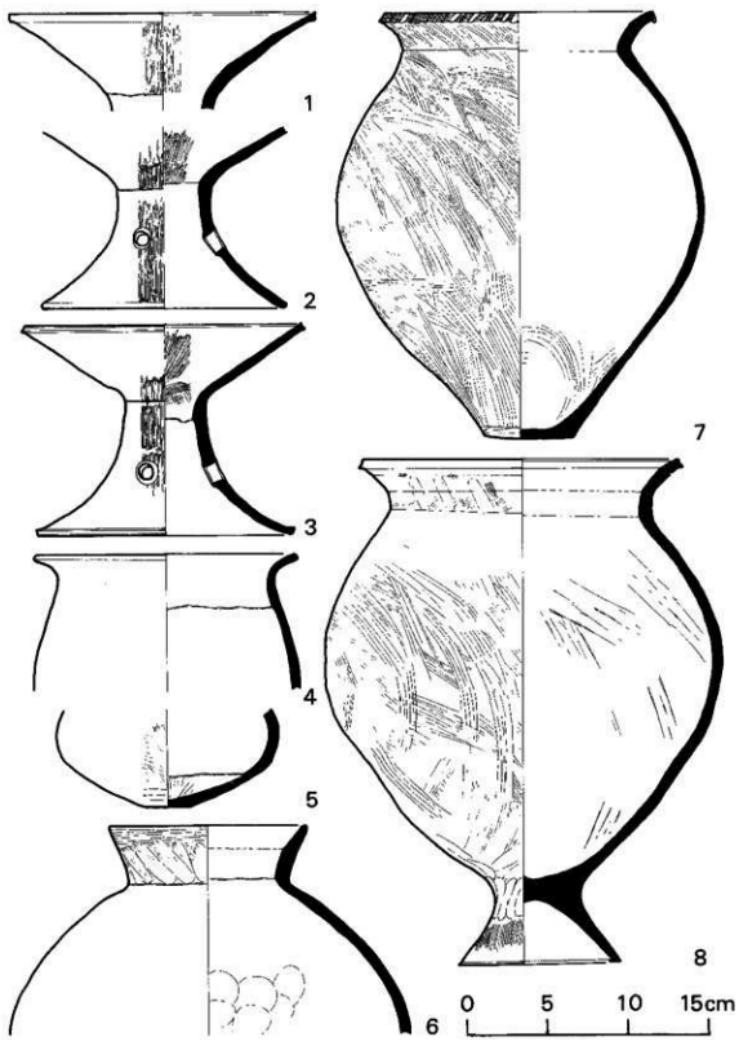


图27 大家道路2号方形窑沟出土遗物实测图

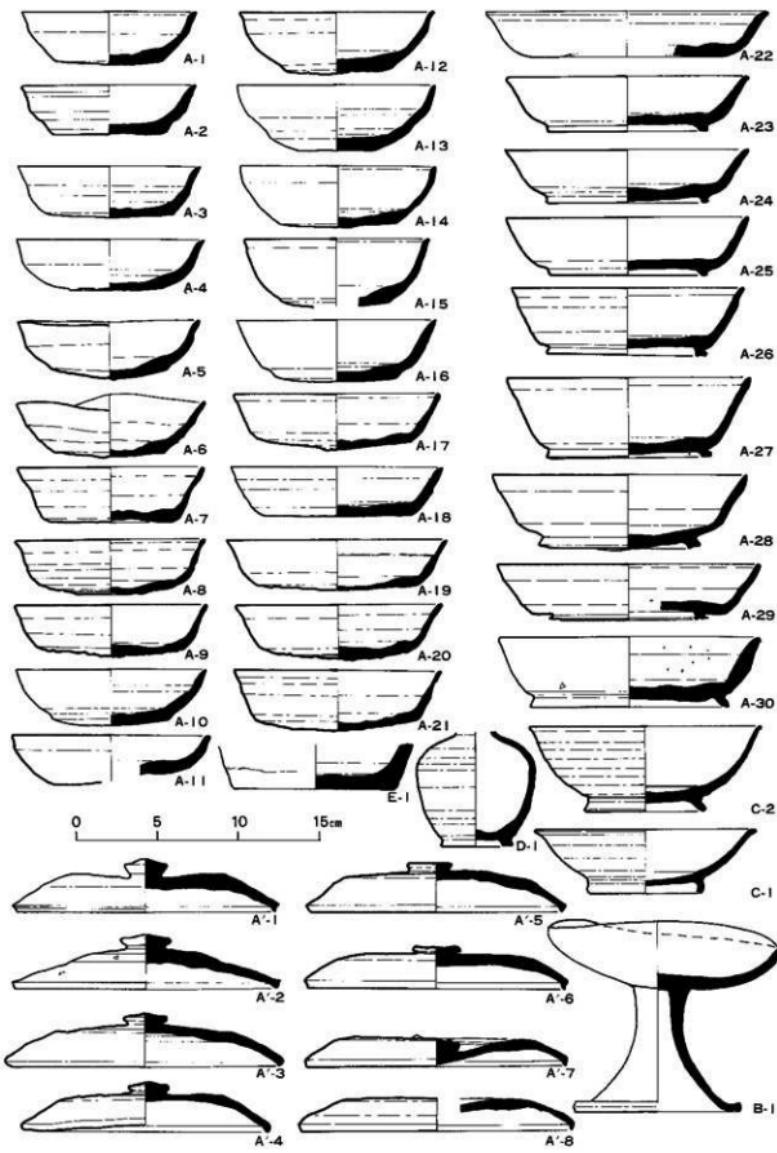


図28 大東道路出土遺物実測図 (1)

皿状の受皿部を取り付けたもの。脚台部には3個の透孔がうたれ、端部をわずかに上下に肥厚させている。受皿部は直線的で、端部を上下に肥厚させている。外面と受皿部内面は丁寧な施墨きが施され、脚台部内面はココナデしている。いずれも胎土の細い硬質の焼上りで、仕上げも非常に丁寧である。

(田中勝弘)

### 3) その他 土器類 (図28・図29)

第2次調査によって検出された遺物のうち、土器類について簡単な説明を加えておきたい。出土地点は、C地区内の溝17・18を中心とした瓦割りの範囲である。

壺の身〈A〉は30点を数えるが、大別して2類に分けることができる。

(1)口縁部に立ち上りをもたず、底部に高台をつけない。計22個。口径は最小10.8cm～最大13.6cm内に、深さは3.2cm～4.1cm内に収まる。(ただ〔A-22〕は皿とも思えるが、破損品であるため明らかでない)。体部はおおむね直線的に外上方にのびるが、口縁部に至つわざかに内彎するものが2、3ある。先端はすべて丸く收める。体部から底部にかけては、丸味をもって屈曲するものと、角をなすものとがある。底部は平底のものと、扁平に近い丸底のものがある。内面および体部外表は丁寧に横ナデ調整するが、底部のヘラ切りは粗い。胎土はおおむね良好で、灰青色を呈し、焼成も堅緻といえる。

(2)底部に高台を有するもの。8個。底部と体部の境はつよく屈曲するものと、丸味をおびるものとがある。体部は口縁部に向って外反気味にのびるが、その角度には差異がある。端部はすべて丸く收める。高台はすべて貼付けで、下方に垂直にのびる短いものと、外方にふんばるものとがあり、体底部の境もieはその内側に位置している。また端部が外に肥厚し、接地面がへこむ高台が2、3ある。口径は最大のもので16.1cm、器高5.0cmを測る。

壺の蓋〈A〉8点のうち、天井頂部が欠失して不明な1点をぞいて、すべて扁平な宝珠つまみをもつ。また、口縁部先端近くのかえりは消失している。口径は16cm平均を測る。口縁先端は下方に短く屈曲する。天井部は平坦をなすものと、ゆるやかに丸味をもつものがあるが、均しくヘラ削りし、内面は横ナデ調整後、仕上げナデを施す。つまみは比較的丁寧なつくりで、宝珠つまみが次第に扁平なものに移行する。

高壺〈B-1〉は、壺部が著しく焼けひすみ、上方からみると楕円形を呈している。口径に比して、壺部は浅い。口縁部は短く、内彎しつつ外上方にのびる。壺底部はヘラ削り。柱部は中空状であるが、透し孔を穿たない。脚柱部は細く、ラッパ状をなして壺部に広がる。壺部先端は肥厚し、端面は垂直状をなすが、わずかに稜をつくる。

壺は陶器で、2点を掲げる。〔C-1〕は口径13.7cm、器高4.0cm、〔C-2〕は口径14.4cm、器高5.3cm。とともに体部は内彎気味に外上方にのび、口端部に至って外反する。〔C-2〕は体部外表に手ナデによる凹凸を生ず。高台は、〔C-1〕は直立し、〔C-2〕は外へふんばるが、ともに後から貼付けている。胎は糊せて分明でない。

小型瓶〈D-1〉は、口頭部を欠失する。体部は肩がやや張り出して、最大径7.3cmを測る。底部に高台を有し、外方にふんばる。体部外表に手ナデによる凹凸がある。胎土は精良、灰色を呈す。

壺〈E-1〉は、底部が一部分みられる。平底で、底体部の境は急角度をなして屈曲、体部は外上方に直線的

にのびる傾向を示す。

窓(F-1)は、硬質な土器である。口縁部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外に肥厚、内縁しつつ外上方にのびる。肩部内外面に斜め方向のハケ目を施す。肩部以下欠失。

[F-2]は、口径24.6cm、口縁部が外側で開く。肩部以下は欠失して不明。肩部外表面に平行叩き目、内面に同じ円叩き目痕が残る。[F-3]は口径40.4cm、[F-4]は口径41.7cm。[F-3]の口縁部は外側しつつ外上方に開き、口縁部が肥厚、[F-4]はやや開きつつ直線的にのびる。[F-4]の外表面は平行叩き目、体部内面は同心円の叩き目を残し、肩部内面に指圧痕を留めている。以上の3点は、須恵器の大型窓である。

(谷口義介)

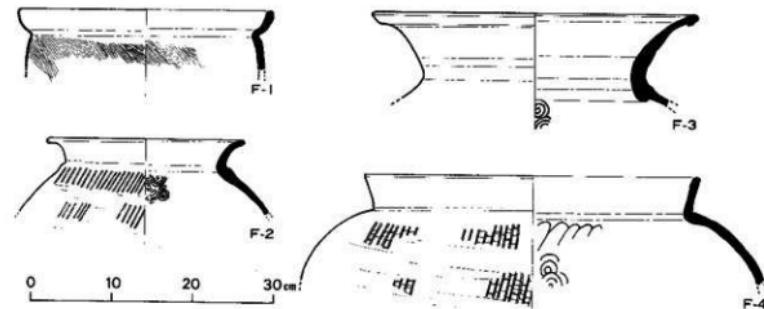


図29 大東道路出土遺物実測図 (2)

### 3. 小 結

第1号方形周溝墓出土の壺型土器は非常に特徴的で、口縁部と肩部の刻目状の刺突痕と肩部の櫛状工具による条痕は東海西部地方の欠山期のものである。欠山第2号塚出土の同一施文を持つものでは、口縁端部が外方へ折れ曲がっているが、本例は口縁部が外方へ開くだけで、端部は平坦に仕上っている点、形態上若干の差異を見る。しかし、後出の元屋敷期の定形化するいわゆる「S」字状口縁とは明らかに異なるし、まだ丸味を残している。また、櫛状工具による条痕のかけ目は前代の山中期に見ないものである。

第1号出土の壺型土器の特徴は、やや外開きの直口縁と、横に強く張った扁球状の胴部、突出した高台状の底部である。突出した底部は欠山期～元屋敷期の広口壺型によく見かけるもので、山中期のものには少ない。小型壺型土器の形態では、山中期のものが円底で、筒状の口縁と胴の張った扁平な形態を取るに対し、本例は、筒状の口縁をもつが、胴部は球体状に近い。第2号方形周溝墓出土の壺型土器Bは口縁部は不明であるが、底部は円底で、横に張った扁球状の胴部を持ち、第1号より古式で山中期に属するものと思われる。

第2号方形周溝墓出土土器では、器台型土器が整形、形態よりして山中期に属すると思われる。

壺型土器B及びCは、頸部の屈曲が大きくなり、最大径を胴部中位かやや上位に持つものであるが、口縁端部に櫛状工具による刺突文を持つBは脚台を持たないが、最大径をやや上位に持ち、やや縦長に丸くふくれた形態で山中期の特徴をそなえている。Cは最大径を胴部中程に持ち、より球体に近く、口縁端部に刺突文を持た

ない。脚台を持つが、端部を内方へ肥厚させる等若干新しい要素が見られるが、小型で低く、古式の様相も受けついでいる。

また変形土器Aは長胴で口縁部径より若干大きい程で、口縁部は短かく、大きく彎曲する。端部は単純に半抜にしているだけである。

以上の第1号及び第2号方形周溝墓出土土器を比較すると、共通土器である小型壺形土器で第2号のものがより古式であること、第1号の変形土器が穴山期並行で、第2号の器台形土器が山中期並行、壺形土器B及びCが山中期に近似する等よりして、第2号が第1号に先行し、両者の時期は後期前半から後期後半にかけて、すなわち山中期から穴山期にかけてのものと考えられる。

次に、須恵器を中心に時代観をきぐってみると、大体7世紀末から8世紀中頃の間にそれを求めることができる。この傾向は、第1次調査におけるA地区内出土の須恵器と異なるものではない。したがって、A地区内の数棟の建物跡の方位とC地区内のそれとが同じで、これらが同一プランのもとに設計されたであろうとする推定を、上記の須恵器資料は時期的に補強するものといえよう。

(田中勝弘)

(谷口義介)

## 付章 横山古墳群の意味するもの(図1)

滋賀県の北東部には、余呉川・高時川・草野川・姉川・天野川の諸河川の沖積地である湖北平野が広がっているが、その中でも最大の沃野・長浜平野は豊かな自然と北国及び東国との結節点として、原始時代より近江北城における政治と文化の中心として栄えてきたのであった。その長浜デルタの東限を画するごとく南北約10kmにわたって連なる山陵が、長浜市及び近江町の東端に存在し、文字どおり横山と総称されている。

この標高300mにも満たない独立丘の山頂・山腹・山麓には約80基を数える古墳が存在し、一般に横山古墳群とか長浜古墳群と呼ばれている。特に琵琶湖あるいは長浜平野に面す、横山山頂及び西側斜面、西麓の古墳は、坂田郡を本貫地とし、大和朝廷と密接な関係を有し、古事記に数多くの系譜をとどめた豪族、息長氏及びその支配下の有力家族の墳墓と考えられ、奈良時代以前の当地方の政治・社会の具体的展開を解明するうえに重要な根本的な資料として研究、調査がまたれていたものである。

しかし、これまでのところ横山古墳群の調査研究は、地域政権の首長及びその系譜のものと考えられる前方後円墳数基を中心としたものがほとんどで、緻密な横山古墳群の分布調査を下に、多数の後期の小円墳に論究したものもなければ、前方後円墳と後期古墳を総合的にとらえ、この地方の地域政権の具体的な支配構造及びその特色、性格にふれたものは皆無とさえ言え、近江の他地域の研究に比較して、そのたちおくれが感ぜられていた。

この点、このたびの北陸縦貫道敷設に伴う、諸頭山・黄牛塚・中山の各古墳の調査は、横山古墳群の後期の実態を知るうえに、恰好の資料を提供したわけだが、小論ではこれら後期の古墳群と先述した首長系譜の双方の古墳を考察の対象とし、当地方における古墳時代の政治的・社会的展開を望見してみたいと思う。

さて、総数約80基を数える横山古墳群も横山全域にムラなく分布するのではなく、巨視的に見て2地区に偏在しているのである。まず臥竜山の北端に所在する横山古墳群中最古最大の茶臼山前方後円墳をはじめ、垣籠町のオキサキ山・垣籠古墳、東上坂町の長屋敷古墳、さらに西方の櫻木町・加納町に所在する福ノ神・越前塚・上萬塚等の首長系譜の古墳を核とする長浜平野北東地区の古墳群がそれである。そして残る一つは、近江町高溝に所在する入塚山から能登瀬集落の山津照神社古墳に至る横山南西部の丘陵端及び山麓部の諸古墳である。

では次に、より微細に上記の2地区的古墳群の実態を眺めてみることにしよう。

遙くとも紀元前1世紀頃には長浜平野に伝播した稻作農耕は、当初生産性の低い低湿地農耕であったが、少なくとも縄文時代の狩猟・採集を中心とした社会よりは、相対的な安定をもたらしたため、急激な人口増加が起きたと考えられている。この社会矛盾は中期・後期以降の湿田の拡大と乾田の開拓によって解消され、湖北地方における水稻耕作をさらに前進させたのであつたが、この新しい稻作農耕の展開と維持は、姉川の支流を利用した灌溉施設など大土木工事を必然とし、多量の労働力の投入と協業という、あらたな労働力の編成を必須にし、縄文時代以来の血縁的紐帯にとらわれない集団関係を組織化させたのであつた。しかし、この農業共同体もそれ自体、自己完結的ではありえても、他の農業共同体との抗争激化は避けられず、さらに優位な共同体による他の共同体の系列化が進み、4世紀頃には農業共同体のワクをこえる新しい政治結合体=小国家が現在の長浜市域に成立していたものと思われる。

さて、既に述べた長浜市北東域の古墳群こそはこの新しい政治結合体の古墳群なのであり、臥竜山の丘尾に位置し、長浜のデルタを見下ろす茶臼山古墳は、この新しく成立した地域政権の最初の首長の墳墓と考えられ、死して後まで一般共同体員の頭上に君臨していたのである。

しかし、この地域の首長系譜の前方後円墳は5世紀以後、平野部に移動し、規模も50m以下という具合に、通常例に反して縮小しており、前世紀に成立していた地域的統合にならぬ変化が起った事が予想されている。<sup>①</sup>

これに対して、近江町内の首長系譜の墳墓は異なった様相を示している。天野川流域の農業共同体の政治的結合は、アルタの狭少と対応して遅れたらしく、6世紀前葉に比定される能登瀬の山津照神社古墳の築造が最古のものであり、以後平野部に進出して高溝集落の人塚山古墳、新庄集落の塚の越古墳がこれにつづくものと考えられていた。しかし、このたび藤戸集落の南の丘上端部に約50mの帆立貝式古墳と約30mの大円墳からなる後別当古墳群が発見され、この地の統合が5世紀代にまで遡りうる可能性が生まれてきたのである。しかしそれにしても、この地域の政治的統一は、姉川の穀倉地帯に比べてたち遅れ、その勢力も当初においては劣っていたものと考えられる。だが、この地域には耕作地の狭少の割に首長系譜の古墳が多く注目されることを記しておこう。

ところで、上記の二つの古墳群は、『和名抄』の上坂・下坂郷と朝妻郷もしくは阿那郷に相当する地域に分布するが、前者の上坂・下坂郷が坂田君の本拠であり、後者の朝妻郷は息長氏の本貫地であり、両地域が古代皇室にその女を入れた二大地方豪族が住したところであることが、両地域に残る地名や記紀に掲載された系譜や伝承その他多くの古文書、文献によって明らかである。

すなわち、姉川扇頂部を占拠した坂田君は、姉川流域の穀倉地帯を半耳り、早くから長浜市北東域の地域的統合をなし、下流の農業共同体に対して、灌漑用水路を掌握して、4世紀代から5世紀代前半頃までにおいては隔絶した勢力を得ていたと考えられる。

一方、天野川流域の貧弱な冲積地を根拠地とした息長氏は、劣弱な生産基盤のために、勢力を伸張しえなかつたが、天野川河口の筑摩、朝妻の二大良港と東山道と北陸道の分岐点という地の利を得て、堺津、敦賀を介しての朝鮮との交流も想定される商業活動によって、大和朝廷と南接な関係を有すようになり、5世紀代には畠族として強大な勢力を広げ、息長系譜に属する坂田君があらわれるなど、湖北での勢力を拡大し、坂田君を抑えて長浜平野に君臨したものと考えられる。

以上が横山古墳群において屹立している二大古墳群の実態と考えられ、横山古墳群から坂田古墳群・息長古墳群としてそれぞれ抽出できる地域政治結合体の首長系譜の古墳群なのである。

前期・中期からの如上の二大首長墓群の他に、6世紀以降横山には数多くの古墳が前述の首長墓群のワクの内外に营造されたのである。

一概に後期古墳（群）は、早いところで5世紀末に成立はじめ、6世紀に入って先進地域に普遍的に成立し、後Ⅱ期・6世紀後半には、ところによれば一定の墓域内に100基をこえる古墳が縦を切り合うように築造され、盛行期に至るのだが、50年も経ずして7世紀初頭には古墳の築造は急速に減少し、7世紀中葉以降には、大和を中心に皇族、官僚のごくわずかな古墳しか見られなくなって、古墳時代は終焉するものと考えられている。

しかし横山山陵における後期古墳文化の展開図は既述のように単純ではなかったようである。横山古墳群において、6C以降の築造と見られる小円墳は総計60基ぐらいにしかすぎず、その群集化も、多いもので5・6基がせいぜいで、10基以上を数える古墳群は存在しないと見られ、等質な小円墳が100基前後群集する、いわゆる群集墳はついに成立しなかったのである。

姉川が形成した長浜の沃野と雄族息長氏の居住からすれば、横山古墳群におけるこのような後期古墳群の過疎性と群集墳の皆無は一見不可解としか言いようがなかろう。

このような近江における、群集墳の不均衡及び偏在には、その背後に大きな政治的、社会的諸事象が埋没しているように思われ、これらに関しては水野正好氏や丸山竜平氏らの湖西を中心とした研究があり、後期群集墳の

荷い手即有力家父長といった定説の再検討が行なわれているのである。<sup>④</sup><sup>⑤</sup>にもかかわらず、湖北の古墳時代後期の検討は未熟で、横山の後期古墳の過疎を視野に入れた研究は、ほとんどないと言つて過言ではない。そこで小論においては、横山における後期群集墳の過疎の要因たるものと考えてみたい。

穴太銅込古墳群、滋賀里百穴古墳群等が存在する大津北郊には、大友村主、穴太村主等の帰化系氏族の所住が考えられているが<sup>⑥</sup>彼ら帰化人は多くは工人または特定の職掌に関する専門家であり、自立化の傾向が強いところから群集墳を形づくることが一般的であると推定されている。事実、大津北郊南北5km余の範囲には、1,000基以上の古墳が群集しており、湖北横山古墳群とは対照的である。上述の如く、横山にはせいぜい5・6基の古墳群が見られる程度であり、その墓域も分散し、大規模な群集墳も皆無であり、帰化人の貢付がなかったものと考えられる。ただ、阿那郷に穴太氏の居住が考えられるが、後半本姓を改めて志賀忌寸を賜っている者などの存在などから、大津北郊の穴太村主の一派の分枝したものと考えられ、彼らに関しては、帰化人の同一墓地の構成志向という点から、本貫地大津北郊への帰葬が考えられる。

近江には、さるに横山古墳群と対照的な様相を示す古墳群が存する。大津堅田地区の春日曼陀羅古墳群がそれである。これらの古墳群は首長墓を核とする100基以上の後期にまで及ぶ群集墳であり、僅かに当横山古墳群より先行するものと考えられるものの、後期古墳群としては、やはり当横山古墳群とは明瞭な質的差異を示すものである。すなわち、堅田区域の春日山・曼陀羅向古墳群は、雄族和邇氏及びその同族とその配下の部民の墓域と考えられているが、横山古墳群はこのような部の統括者とその被統括者による大古墳群という様相をも持ちはずせていないのである。

古墳時代後期には、その根拠地天野川流域内にとどまらず、湖北平野一帯をその支配下においたと考えられる息長氏は、雄体天皇の出身氏族とも言われるほど、古代皇室と密接な関係を有したが、「葛城氏、柳耳氏、あるいは蘇我氏のように強大な外戚氏族として發展する道をえらばず、むしろ皇室の内部にあって、皇室氏族として存続する道をえらんだ。」<sup>⑦</sup>とされ、このため前三者のような自家の部曲を拡大することもしなかつたし、息長部の成立も見なかつたと言われる。<sup>⑧</sup>このような、地域政治共同体の首長たる両氏の質的差異が、上述したように、その古墳群に異質な相貌をもたらしたのではないかと考えられる。

以上のように、横山山陵には群集墳の成立を見なかつたが、それでも数基單位の或は単独の古墳の分布が、山麓の集落に対応して確認され、共同体の有力家族の抬頭の反映と見られるが、この共同体の紐帶の崩壊に対して、朝廷はいち早くこれら有力家族に姓を付与し、これを抱込み、これら新興の有力家父長層の進出による共同体の変貌を最小限に押しつどめたのであった。

(別所健二)

註 ①『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書Ⅱ』(滋賀県教育委員会)

②岡田精司「雄体天皇の出自とその背景」(『日本史研究』128号)

③塙口義信「大帝日光考」(『日本書紀研究』第5巻)

薗田香融「皇祖大兄御名入部について」(『日本書紀研究』第3巻)

④水野正好「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」(『滋賀県文化財調査報告書第4号』滋賀県教育委員会)

⑤丸山竜平「近江羅氏の考古学的研究」(『日本史論叢』第4輯)

⑥註④と同じ

⑦森浩一「群集墳と古墳の終末」(岩波講座『日本歴史』2)

⑧註②と同じ

⑨註③の薗田論文

⑩註③の薗田論文



1 古墳 全景(発掘前 東より)



2 古墳 全景(発掘後 西より)



1 石室全景(西より)



2 古墳全景(東より)



1 石室全貌(東より)



2 閉塞石遺存状態(東より)



1 玄室與壁



2 玄室 東南コーナー



1 玄室 北東コーナー



2 葵道入口南側列石



1 玄室内遺物出土状態



2 玄室内遺物出土状態(東より)



1 玄室內遺物出土狀態



2 玄室內遺物出土狀態



1 玄室內遺物出土狀態



2 玄室內遺物出土狀態

図版九 黄牛塚古墳(遺物)



黄牛塚古墳出土遺物1) (番号は挿図番号)



黄牛塚古墳出土遺物(2) (番号は挿図番号)



1 古墳全景(発掘前、東より)



2 古墳全景(発掘後、東より)



1 石室全景(東より)



2 石室全景(南より)



1 石室側壁(1)



2 石室側壁(2)



1 石室側壁(3)



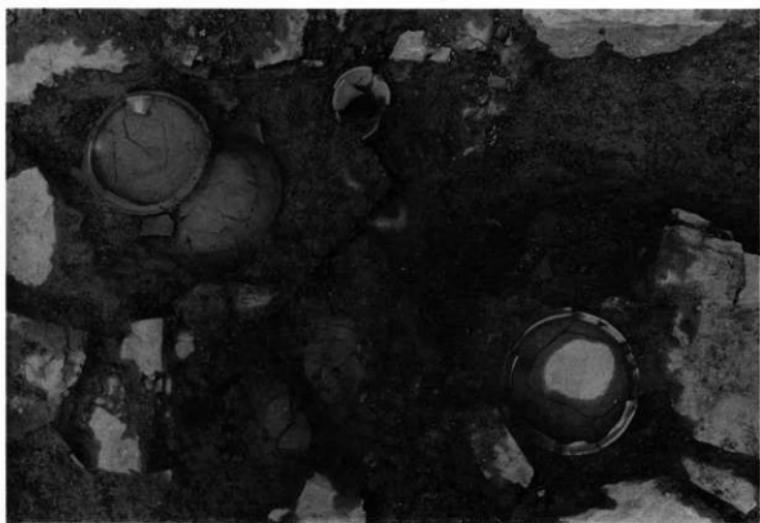
2 石室側壁(4)



1 遺物出土状態(杯身・蓋・鉄環)



2 遺物出土状態(杯)



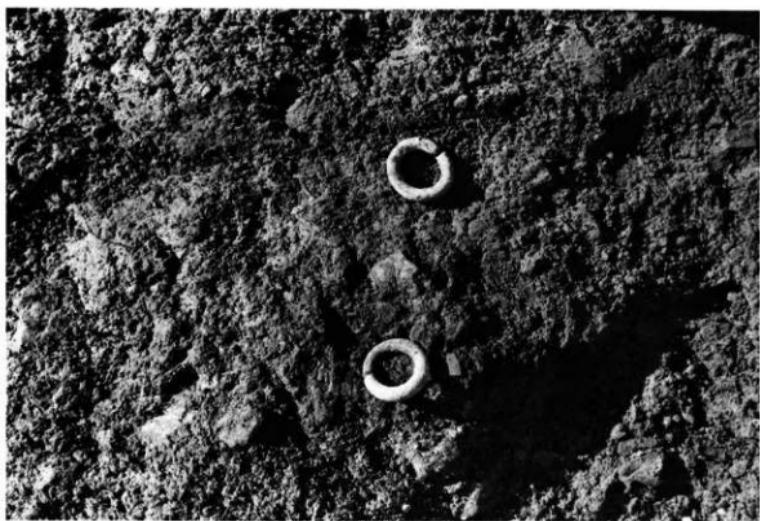
1 遺物出土状態(杯)



2 遺物出土状態(杯・壺)

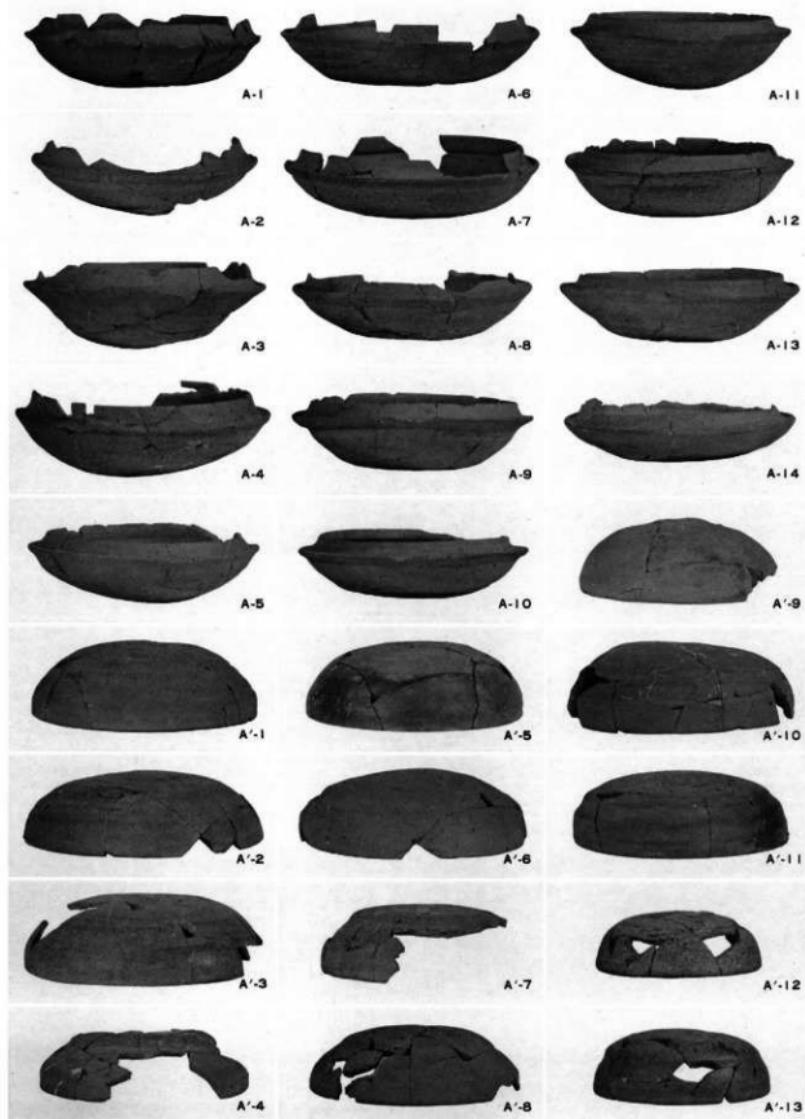


1 遺物出土状態(玉類)



2 遺物出土状態(金環)

圖版一八 中山古墳(遺物)



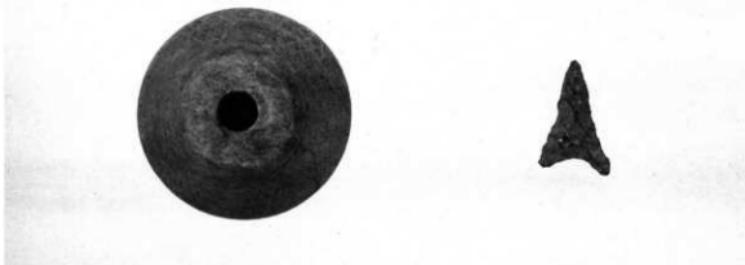
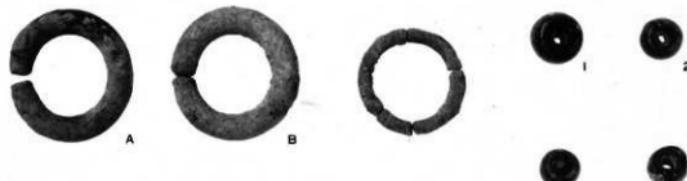
須恵器杯身・蓋(番号は掉図番号)



須恵器 高杯・壺・甌・提瓶(番号は排図番号)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65
66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78
79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91
92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104
105	106	107	108	109	110	111	112	113	114			

1 玉類



2 金環・鉄環・玉類・紡錘車・石鏡(番号は掲図番号)



1 古墳群遠景(北より)



2 1号—2号墳全景(東より)



1 1号墳全景(南より)



2 1号墳全景(東より)



1 1号墳全景(発掘後、南より)



2 1号墳石室全景(南より)



1 1号墳石室全景(南西より)



2 1号墳石室全景(南東より)



1 1号墳石室近景(南より)



2 1号墳石室近景(北より)



1 1号墳玄室(東より)



2 1号墳玄室(西より)



1 1号墳玄室(南より)



2 1号墳羨道(北より)



1 1号墳狭道(東より)



2 1号墳狭道(北より)



1 1号墳玄室奥壁



2 1号墳玄室奥壁近景



1 1号墳玄室北西コーナー



2 1号墳玄室北東コーナー



1 1号墳玄室東壁北半部



2 1号墳玄室東壁南半部



1 1号墳玄室西壁北半部



2 1号墳玄室西壁南半部



1 1号墳羨道東壁



2 1号墳羨道西壁



1 1号墳遺物出土状態



2 1号墳遺物出土状態



1 2号墳全景(発掘前、南より)



2 2号墳全景(発掘後、南より)



1 2号墳石室全景(南より)



2 2号墳玄室石材抜取り状態(南より)



12



13



10



9

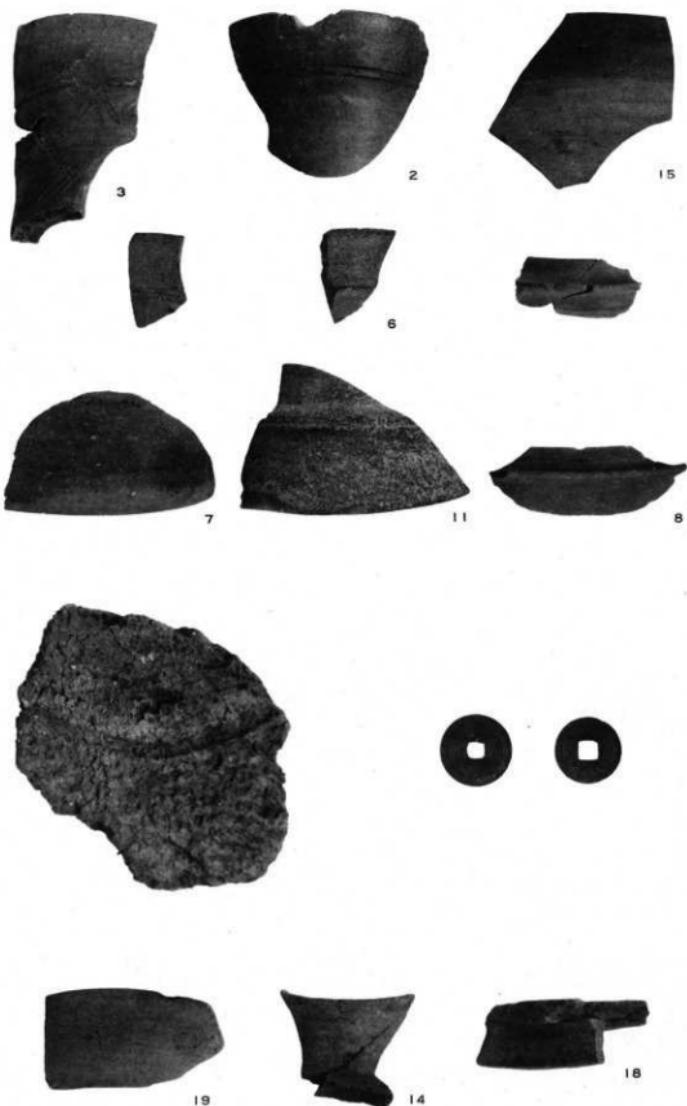


16



17

I号墳出土遺物(約3分の1。ただし7・8は実大) (No.は挿図21と同じ)



1号・2号墳出土遺物(約3分の1, ただし2は実大)  
(1 1号墳, 2,3 1号墳封土内, 4 2号墳) (No.13は挿図21と同じ)

図版三九 上ノ山古墳群周辺遺跡出土遺物



4



3



6



8



7



2



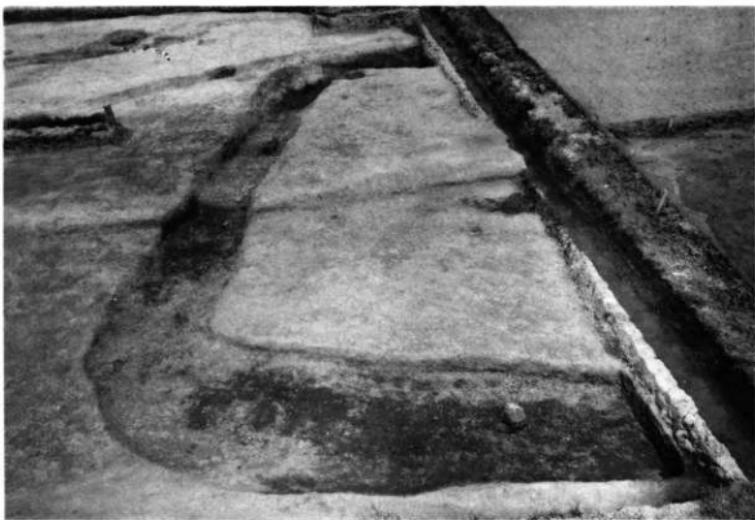
(No.は挿図25と同じ)



1 1号・2号方形周溝墓



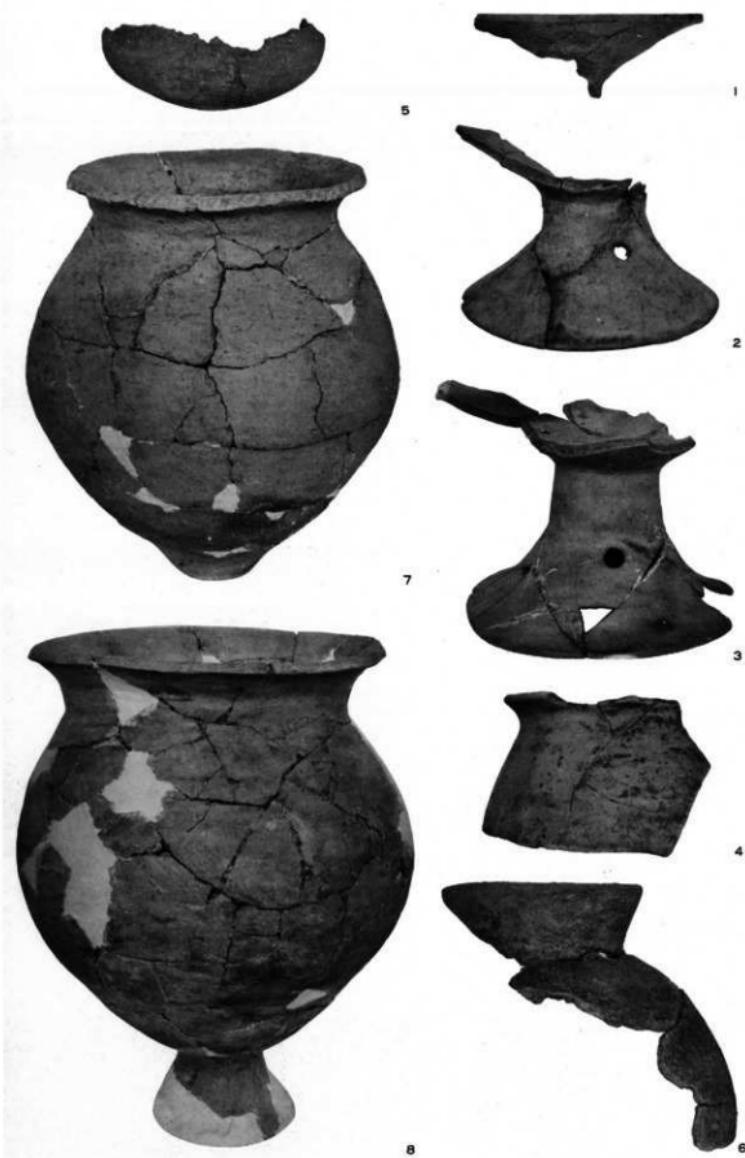
2 2号方形周溝墓(HSI)



1 2号方形周溝臺(HS II)



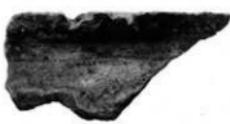
2 T 6柱穴内礎板出土状態



2号方形周溝窯出土遺物(約3分の1)(番号は挿図27と同じ)



2



1



1 号方形圓溝墓及びその他出土遺物(排図28)



その他出土遺物

昭和51年2月5日 印刷  
昭和51年2月10日 発行

北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告 III

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷製作 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仙光寺上ル  
TEL 351-6034番

1420